

「ふくしまに生きる ふくしまを守る」の電子書籍化に当たって



福島県警察本部長 向山 喜浩

「ふくしまに生きる ふくしまを守る」は、東日本大震災とその後原発事故に対応した警察職員とその家族の手記を記した書籍として、福島民報社の編集協力の下、平成二十四年十一月に発行されました。同書は、大きな反響を呼び、福島県内はもとより全国で約三万五千部が販売され、多くの読者に、当時の福島県警察職員らの活動と知っていただくことができました。

東日本大震災は、平安時代の初期、貞観十一（西暦八六九）年に発生した「貞観地震」の再来と言われています。貞観地震の際にも、東北地方の太平洋岸は大津波に襲われましたが、その時の津波は、現在の宮城県多賀城市にある「末の松山」という所

の近くにまで達したと言い伝えられています。この出来事がきっかけとなつて、「末の松山を波が越えること」は、決してあり得ないことの例えとなり、「末の松山」は多くの和歌(特に恋歌)に詠われる歌枕となりました。小倉百人一首にも、清原元輔(清少納言の父親)が、「契りきな かたみに袖を しほりつつ 末の松山 波越さじとは」(約束したではないですか。互いに涙で濡れた袖を絞りながら。末の松山を波が越えることがないように、二人の仲は変わらないことを)という歌を残しています。このように、貞観地震の記憶は、千年以上の時を超えて百人一首の中にとどめ置かれたのですが、現代の我々は、その記憶を十分に教訓として生かすことはできませんでした。

「末の松山」は、その後の時の経過で、一度は場所の特定ができなくなりましたが、江戸時代に仙台藩が推定した場所が、現在も史跡として残されています。そこには「末の松山」に因んだ和歌の歌碑が建てられていますが、その中に、「君をおきて あだし心を 我が持たば 末の松山 波も越えなむ」という詠み人知らずの歌がありました。これは、「君を差し置いて、不実でいい加減な心を持つようなことがあれば、波が越えないとされる末の松山を、波が越えていくことでしょう」という意味の恋歌だそうですが、無粋な私には、この歌が、「過去の記憶や教訓を忘れて、油断や

慢心をするようなことがあれば、いつかまた襲い来る大災害に立ち向かうことはできないぞ」と訴えかけてくるように思えました。

さて、このたび、「ふくしまに生きる ふくしまを守る」が電子書籍化され、福島県警察のウェブサイトに掲載されることになりました。電子書籍化に当たり御尽力いただいた福島民報社など関係者の方々に感謝を申し上げますとともに、電子書籍化により、同書が再び多くの方々目の目に触れ、大震災の記憶と教訓を改めてかみしめる機会となることを願っております。

どんな災害も、長い年月の経過とともに、それを直接経験した人は少なくなり、やがて人々の記憶からも消え去る時がやってきます。しかし、貞観地震の記憶をとどめた「末の松山」の歌ほどとまでは言わずとも、「ふくしまに生きる ふくしまを守る」に込められた思いが、電子書籍という新しい形になることで、より長く、より鮮明に人々の記憶にとどめられるようになることを心から祈っております。

（平成三十一年三月）

ふくしまに

FUKUSHIMA

生きる

警察官と

警察官と家族の手記

家族の手記

ふくしまを

守る

監修 福島県警察本部



いつまでも
「ふくしま」を
心に留めて…

俳優 西田 敏行(郡山市出身)

- ◆第27日目(4月6日)
 - ・福島第一原発から半径20^キ圏内の南相馬市原町区の捜索に重機を投入、本格捜索の実施
- ◆第31日目(4月10日)
 - ・福島第一原発から半径20～30^キ圏内の広野町で部隊を投入しての捜索を開始
- ◆第32日目(4月11日)
 - ・富岡町から郡山市に避難している小学生・中学生の初登校に、双葉署員による付き添いを開始
- ◆第35日目(4月14日)
 - ・半径10^キ圏内の浪江町において警察官300人による大規模捜索を開始～県警察本部長が陣頭指揮
- ◆第40日目(4月19日)
 - ・福島第一原発から半径10^キ圏内の双葉町で部隊を投入しての捜索開始
- ◆第41日目(4月20日)
 - ・福島第一原発から半径10^キ圏内の富岡町、10～20^キ圏内の楡葉町で部隊を投入しての捜索開始
- ◆第42日目(4月21日)
 - ・大熊町での捜索に向けた調査を実施
- ◆第43日目(4月22日)
 - ・福島第一原発から半径20^キ圏内を「警戒区域」に設定
 - ・福島第一原発から半径20^キ圏外における放射線量が高い地域を「計画的避難区域」に指定
 - ・浪江町で重機を使った捜索開始
- ◆第44日目(4月23日)
 - ・警察官250人による半径20^キ圏内警戒区域75箇所への進入規制及び警戒活動の強化
 - ・警察官300人による半径20^キ圏内行方不明者の集中捜索の開始
- ◆第45日目(4月24日)
 - ・双葉町で重機を使った捜索を開始
- ◆第46日目(4月25日)
 - ・福島第一原発から半径5^キ圏内の双葉町で重機を使った集中捜索を開始
 - ・警察庁長官による原発被災地の視察、捜索隊員の激励
- ◆第61日目(5月10日)
 - ・警戒区域内への一時立入り開始
- ◆第62日目(5月11日)
 - ・天皇后両陛下の行幸啓(被災地等御見舞…福島市、相馬市)
- ◆第63日目(5月12日)
 - ・「ビッグパレットふくしま」内における郡山署臨時派出所(おだがいさま交番)の開設
- ◆第66日目(5月15日)
 - ・「計画的避難区域」に指定されている県内5町村のうち、飯館村住民(2,193世帯、6,857人)と川俣町山木屋地区住民(364世帯、1,252人)の避難開始
- ◆第72日目(5月21日)
 - ・日中韓首脳会議メンバー来県、避難所等を訪問
- ◆第74日目(5月23日)
 - ・県警察学校における初任科生入校式(初任科生122人、一般職員6人入校)～47日遅れ
- ◆第83日目(6月1日)
 - ・車両持ち出しのための一時立入り開始
- ◆第84日目(6月2日)
 - ・本県及び他県警察応援部隊300人体制による「特別警備隊」の発足～「計画的避難区域」を中心とした警戒活動の開始
- ◆第96日目(6月14日)
 - ・県警災害警備本部を福島署4階から福島県庁西庁舎12階に移転
- ◆第98日目(6月16日)
 - ・20^キ圏内外の沿岸部で大規模捜索を実施(～18日、延べ約900人の警察官を投入)

東日本大震災発生当初の福島県警察の動き(時系列)

◆第1日目(3月11日)

- ◎午後2時46分、三陸沖を震源とする巨大地震（マグニチュード9.0）が発生
- ・福島署4階大会議室に「福島県警察災害警備本部」を設置、県内22署に「署災害警備本部」を設置
- ・福島県が「福島県災害対策本部」を設置
- ・太平洋沿岸に大津波警報発令、東日本の太平洋沿岸に大津波が襲来
- ・大津波警報に伴う住民の避難誘導、救出救助活動を実施
- ・南相馬署員2人、双葉署員3人が行方不明
- ・東京電力福島第一原発1～3号機、福島第二原発1～4号機の計7基が自動停止
- ・福島第一原発1～3号機で運転自動停止後、緊急炉心冷却装置、非常電源が故障
- ・福島第一原発の半径3^{km}以内の住民に避難指示

◆第2日目(3月12日)

- ・福島第一原発から半径20^{km}圏内の住民に「避難指示」
- ・福島第二原発にも「緊急事態宣言」を拡大、半径3^{km}圏内に「避難指示」、半径10^{km}圏内に「屋内退避指示」
- ・福島第一原発1号機建屋で水素爆発、3号機でベント実施
- ・避難指示等を受け、福島第一原発半径20^{km}圏外、福島第二原発半径10^{km}圏外へ住民の避難誘導等を開始
- ・県警、他県警察応援部隊が相馬署管内等で捜索を開始
- ・双葉警察署は川内村、双葉署浪江分庁舎は津島駐在所に拠点を移して業務継続

◆第4日目(3月14日)

- ・福島第一原発3号機で水素爆発、11人がけが、7人が被ばく
- ・半径20^{km}圏内にある病院・老人介護施設の入院患者及び入所者に対する避難救出活動を実施～15日までに県内外の病院等に搬送

◆第5日目(3月15日)

- ・福島第一原発4号機で爆発音と出火、2号機で異音
- ・福島第一原発から半径20^{km}圏内に「避難指示」、福島第一原発から半径20～30^{km}圏内に「屋内退避指示」
- ・福島第一原発から20～30^{km}圏内の住民等に屋内退避要請の広報とパトロールを実施

◆第7日目(3月17日)

- ・福島第一原発30^{km}圏内における部隊を投入しての捜索活動を開始
- ・福島第一原発3号機へ警視庁の高圧放水車による放水オペレーションを実施

◆第11日目(3月21日)

- ・福島第一原発3号機使用済み核燃料プール付近から黒煙、2号機原子炉建屋から白煙
- ・県庁東分庁舎に入室していた県警察本部各課の移転完了

◆第12日目(3月22日)

- ・福島第一原発の排水口付近の海水から法令限度の126倍を超える放射性物質を検出
- ・福島第一原発4号機に初めてアームを備えた生コン圧送機で20トンを放水

◆第19日目(3月29日)

- ・福島第一原発から半径10～30^{km}圏内に対する警備部隊の投入…被災地における治安維持活動の強化

◆第20日目(3月30日)

- ・県は国に対し、福島第一原発の半径20^{km}圏内について「警戒区域」の設定を要請

◆第24日目(4月3日)

- ・福島第一原発から半径10～20^{km}圏内の南相馬市原町区における部隊を投入しての捜索活動を開始

◆第25日目(4月4日)

- ・福島第一原発から半径30^{km}圏境で実施していた検問などの交通規制を、避難指示区域である半径20^{km}圏境に変更
- ・福島第一原発から半径10^{km}周辺の富岡町等で捜索に向けた情報収集を開始



ふくしまに

MA

生きる

ふくしまを

守る

警察官と

警察官と家族の手記

家族の手記



同じ思いを胸に　ここに私たちがいることを

知って欲しい

ただひたすら　この町に住み続ける

子供たちの笑顔を守るために

ただひたすら　以前と変わらぬ

仕事をするために

ただひたすら　眼前の故郷の変わり果てた姿が

日常になる悲しみに堪えながら

ただひたすら　行方不明の住民を、仲間を、



一人でも多く家族の元へ帰すために

ただひたすら 職に殉じた同僚たちに

恥じないように

ただひたすら 美しいふくしまを取り戻したいと

強く願い立ち上がる 県民を支えるために

同じ思いを胸に 私たちがいることを

知って欲しい

同じ空の下 私たちはここにいます

『ある福島県警察官の思い』

亡くなられた方々の冥福を願い、祈りを捧げる警察官＝平成23年4月11日、浪江町

闘



復旧に向け、道路上の障害物を撤去する
警察官＝平成23年4月18日、双葉町



警戒区域内を視察する松本県警本部長(右)＝平成23年4月7日、浪江町



被災地の捜索に向かう中部管区機動隊の車列＝平成23年3月19日、猪苗代町



被災地を巡回するパトカー＝平成23年4月30日、広野町



決壊した藤沼湖でも、多くの警察官が捜索活動に従事した=平成24年3月8日、須賀川市



大きな被害を受けた相馬市松川浦。地道な捜索活動が続く=平成23年10月27日



水没した車両を調べる警察官
=平成23年7月14日、相馬市



復興に向け再編される警戒区域=平成24年4月16日



地震発生直後に立ち上げた県本部災害警備本部=平成23年3月11日、福島署

温



相馬市の避難所を訪れ、悩みなどに耳を傾ける女性警察官＝平成23年3月25日



パトロール中でも地域住民とのコミュニケーションは不可欠＝平成23年3月27日、天栄村



スクリーニング会場を訪れた県民を案内する警察官＝平成23年3月17日、二本松市



仮設住宅のお年寄りに年賀状を手渡す警察官＝平成24年1月4日、郡山市



南相馬市の介護施設入所者を避難させる警察官＝平成23年3月21日



福島県警察への出向者で編成された「ウルトラ警察隊」＝平成24年7月1日、福島市



行方不明者捜索のため応援に駆けつけた
警視庁機動隊＝平成23年4月7日、福島市



避難所対応では他県警からの応援も＝平成23年4月15日、福島市

埼玉県警スキューバダイビング部
隊＝平成23年3月23日、いわき市



援



がれきの山を捜索する滋賀県の警察官＝平成23年3月20日、相馬市

励



飯野町商工会青年部

展望風
UFO物産館

がんばれ
笑顔

がんばれ
笑顔

被災地に向かう部隊の車両に手を振る小学生。その励ましに勇気と活力を与えられた警察官が数多くいる＝平成23年6月11日、福島市

まさきに「生の声」

俳優 西田 敏行（郡山市出身）

この本を読み進めていくうちに、涙がこみあげてきました。

この手記は東日本大震災、東京電力福島第一原子力発電所事故の直後から救援、救助に携わった警察官の声を綴ったものです。被災現場で警察官が活動する姿は数々のニュースなどで紹介されてきましたが、本書はまさきに「生の声」を収録しています。

警察官としての使命感やふるさとを守ろうとする熱い想いとともに、決死の覚悟で現場に赴く姿に、只々頭の下がる思いです。また、夫や父、家族を想う妻や子ども達の手記には愛情が満ちあふれています。

私の大切な故郷ふくしまの復興への歩みは、まだ始まったばかりです。

全国の皆さんがこの本を手にとって、今まさにこの時にも被災地で昼夜を分かつたず活動を続けている警察官の姿を思い、いつまでも「ふくしま」のことを心に留めてくださることを願っています。

発刊にあたって



福島県警察本部長 平井 興宣

千年に一度とも言われる巨大地震と大津波、そして原発事故と、福島県は立て続けに危難に見舞われました。この震災により亡くなられ、または行方不明になっている方々は1,800人を超え、今なお、県内外に約16万人の方々が避難生活を送られています。警察官も、住民の避難誘導中に津波に巻き込まれ、4人が殉職、1人はいまだ発見されておりません。

この未曾有の大震災に対応した警察職員の経験を後進に伝え、今後の活動に生かすことは、私たちの務めであり、志半ばで逝った殉職者の遺志に報いる途でもあると考え、福島県警察では大震災と原発事故に対応した警察の活動を記録化する作業を進め

てきました。この際に集められた警察職員とその家族の手記をもとに編まれたのが本書です。

手記には、大震災と原発事故に直面した警察職員とその家族の思いが綴られています。

今回の大震災では、多くの警察職員とその家族も被災しました。自分や家族に優先しても住民の安全を確保しなければならぬという警察の責務があり、他方では、守らなければならない家族がある。大震災と原発事故に対応した警察職員はみな、その葛藤と闘いながら懸命の活動を行ってきました。手記には、そのような心情も率直に綴られています。

いまだ行方の分からない多くの方々、そして、収束の見通しが不透明な原発事故など、震災から1年半を経た現在でも、福島県をとりまく状況には厳しいものがあります。福島に生きて、福島を守る、私たち福島県警察職員が、どのような思いで大震災と原発事故に対応してきたのか、そして、これからも対応し続けていくのか、この本に収められた手記を通して、その一端でも感じ取っていただければと思います。

(平成24年11月)

目次

巻頭グラフ		
まさに「生の声」	俳優	西田 敏行(郡山市出身)
発刊にあたって	福島県警察本部長	平井 興宣
		10
		9

第1章 それぞれの最前線〜浜通り編

警察魂	齋藤 圭	相馬署	18
履霜戒	吾妻 和美	いわき中央署	21
生かされた者に希望を	青木 省三	いわき中央署	25
パトカーからの脱出	菅野 理範	いわき中央署	30
その姿に打たれて	野村 和正	いわき中央署	34
一瞬の迷い	宇山 浩史	いわき東署	37
仲間とともに地域住民を守る	菅野 利範	いわき南署	41
警察官という仕事	伊藤 兼輔	いわき南署	44
今できることに全力で取り組む	菅野 裕介	双葉署	48
忘れられない言葉	小路 輝	双葉署	52
遺族対応	佐藤 佑哉	双葉署	54
悲しみのなかの光「絆」	田口 裕美	南相馬署	58
泥沼化した老人施設	大谷 裕二	南相馬署	62
今こそ県民のために	大島 秀一	南相馬署	65

死の恐怖

香野 洋平

地域安全課

69

第2章 それぞれの最前線〜中通り、会津編

藤沼決壊

折笠 順

須賀川署

74

みんなの協力に感謝

香野 巧

須賀川署

77

地域住民とともに

小椋 正春

須賀川署

80

安全管理サポート班に従事して

上妻 直樹

福島署

82

東日本大震災を体験して

佐藤 恵士

福島署

85

被災者の身元確認

佐々木幹成

福島北署

89

奪われた命

塚田 祐一

二本松署

92

捜索活動に従事して

西方 秀文

郡山署

95

幸せな「平凡な生活」

高橋 眞

郡山北署

100

放射線との戦い

森 裕樹

田村署

103

がんばり時は今だ

菅野 敬之

白河署

108

原発10^{キロ}圏内の捜索

佐藤 敦

白河署

111

消防団に見たボランティア精神

花見 秀一

棚倉署

115

検視班として

高野 秀一

会津若松署

119

未来への希望

遠藤 宏

会津坂下署

122

県民の安心のために

菅野 泰洋

高速道路交通警察隊

128

安全を守る

村越 健一

高速道路交通警察隊

131

私は警察官だ

小針 拓史

機動隊

135

検視班に従事して	佐藤 克彦	捜査第一課	140
気 概	田崎 行州	捜査第二課	143
警察官の覚悟	渡部 文武	機動捜査隊	147
無理はするな。でも後悔もするな	菊池 達也	警備部	150
県警ヘリ「あづま」	齋藤 明人	地域安全課	154
免許センターでの被災	森山 精一	運転免許課	159
災害警備本部交通班の活動	根本栄太郎	交通企画課	162
ひとつでも多く、被災者の元へ	霜山 裕樹	会計課	165
被災遺族に接して	平野 敏行	教養課	168
県外部隊に見た警察の神髄	赤石沢千昌	情報管理課	173
技術職として	飯塚 達也	科学捜査研究所	176
被災直後の心のより所に	神尾 直子	県民サービス課	179
家族と被災者からの期待	渡部 博之	県民サービス課	183
復興への礎	高宮 優	警察学校	187
警備活動から得たもの	佐藤 嘉紀	警察学校	191
初任科生の決意			
警察官を目指した理由	角田 昌章	警察学校初任科	195
福島のために	佐藤 祐記	警察学校初任科	198

第4章 職務と家族と

支えてくれた妻と息子の写真

妻と二人で

人を思いやること

主人の決意

家族の思い

警察官の妻として

夫への思い

我が家のルール

警察官の家族として

その時 やるべきことを

息子を支えて

「行つてらっしゃい」「お帰りなさい」

白岩 道晃

山内 統

國井 咲希

渡辺 雅子

本多 幸

渡部 貴子

猪狩 千文

穴戸 若緒

加藤 久美

山辺 明美

菅野いつみ

小林 愛佳

いわき東署

田村署

職員家族

職員家族

職員家族

職員家族

職員家族

職員家族

職員家族

職員家族

職員家族

職員家族

第5章 警察は一つ
応援部隊

感謝の気持ち忘れず

こころ

「遠くから ありがとう」

ジャパンブルーの空に

またいつか笑顔で

兵庫県警察

奈良県警察

山口県警察

鳥取県警察

千葉県警察

藤江 幸生

笹田 厚司

柿 大輔

谷岡 一馬

藤崎 朋子

260

264

270

272

276

204

209

215

221

225

229

232

237

241

244

250

253

出動命令を受けて

長野県警察

神林 宏

282

ウルトラ警察隊

東京より愛をこめて

総合運用指令課

加藤 雅道(警視庁から出向)

288

奄美から福島へ

総合運用指令課

中崎 翔太(鹿児島県警から出向)

293

第6章 寄せられた声く写真展のアンケートから

297

あとがきに代えて

警察庁長官官房人事課長
前福島県警察本部長

松本 光弘

306

ふくしまに生きるふくしまを守る「凡例」

●この本は福島県警察本部が、平成23年3月11日に発生した東日本大震災と、それに続く東京電力福島第一原発事故の被害に対応した警察活動を後世に残すため、所属する警察職員とその家族、福島県に來援した他の都道府県警察の応援部隊員などに依頼した体験記(手記)を基に構成しています。

●文末の年月日は手記執筆時のものです。特に断りのない限り筆者の所属、年齢は震災当時のものです。また、手記で触れられている被害や交通状況、警戒区域の範囲などについては、その時点のものです。

●手記は読みやすさを考慮して加筆、修正し、使用する漢字は常用漢字を基本に(人名を除く)、適宜読み仮名を振りました。

第1章

それぞれの最前線

～浜通り編

平成23年3月11日、東日本大震災。大津波などによる未曾有の大災害は、東北地方の太平洋沿岸を中心にその景色さえも変え、多くの命を奪い去った。福島県では、東京電力福島第一原発の事故が発生、多くの住民が温かな住まいを失う事態に。浜通りに位置する警察署などに当時所属していた警察官は、この災害にどう立ち向かったのか。



水素爆発により大きく損壊した福島第一原発4号機＝平成23年5月1日

警察魂

相馬警察署

齋藤 圭 20歳代

3月11日の東日本大震災を、私はJR新地駅に停車中の電車の中で経験しました。

当時、私と同期の同僚は警察学校初任補修科の卒業式を終え、福島市内の警察学校から常磐線岩沼経由で帰署途上でした。相馬署管内の最初の駅である新地町に入り「相馬に戻ってきたな」という気持ちが高まったところでした。

その直後、高まる気持ちを打ち砕く巨大地震に襲われました。車両は左右に激しく揺れ、手すりなどにつかまっていけないと踏ん張っていられないほどでした。徐々に揺れが大きくなり、窓ガラスの反対側に見える新地駅の駅舎は、まるで「こんにゃく」のようにしなっており、さらなる恐怖感をおおっていました。長い長い揺れがようやく収まった直後、私たちは二手に分かれ車両内の被害状況、負傷者がいないかを確認して歩きました。車両内に異常はなく、その旨を車掌らに告げました。警察官として何をやるべきか、とっさに頭に浮かんだことでした。人員の確認、負傷者の救護な



津波で折れ曲がったJR常磐線車両＝平成23年3月24日、新地町

ど、警察学校で訓練を受け、学んできたことが無意識のうちに行動に出ていました。

その後、大津波警報の情報を得た私は「このままでは津波に襲われてしまう」と判断し、乗客全員の命を確実に守るためには、ここから避難しなければならぬと決断しました。当時、乗客には新地駅で下車する予定の人はほとんどいなかったのも、もし津波が来なかったら乗客の皆さんに大変な迷惑を掛けることになるなど、正直、不安な気持ちの方が大きかったように思います。

しかし、そのことよりも優先すべきことは「警察官として人の命を守ることであり」という使命感と信念が、私の体を突き動かしました。



津波に押し流されたJR常磐線車両
＝平成23年3月24日、新地町

避難が始まってからは、乗客が安全に行動がとれるように、私と同僚で声を掛けながら隊列を組んで行きました。同僚が先頭を歩き、私は最後尾を足の不自由なおばあさんと一緒に歩いていましたが、徐々に前方の列と離れていきました。そのような中でも不安感を与えないように私自身が冷静になるよう努めました。

避難開始から15分ほど経過した時、最後尾を避難している私たちに突如襲いかかってきたのは、ゴゴゴゴゴという地鳴りでした。振り返って見ると、混濁の大津波がまるで壁のようにこちらに向かってきました。それを見た時、私は本当に死ぬかもしれないと覚悟しました。それでも諦めず、偶然通りかかった軽トラックを呼び止め、乗せてもらいました。助手席におばあさんに乗せ、他にも現場付近で足がすくんでいる数人の住民も荷台に乗せて避難しました。高台まで避難し、乗客全員の無事を確認した直後、私たちの眼下を津波が、がれきや車をのみ込んで流れていきました。そのあまりの光景に私の背筋をゾクツとするものが走りました。

今回このような大震災を経験し、私は警察官の意義を再確認するとともに、警察官としての自覚の重要性を深く実感しました。警察官の自覚とは、危機的状況、事件・事故の現場などで、地域住民の生命、身体および財産を保護するために、実際のどのような行動を起こすべきか常に考えることだと思います。

(平成23年8月)

履霜戒

りそうのいましめ

いわき中央警察署

吾妻 和美 50歳代

二次異動の内示が終わり、いつもの慌ただしい刑事第一課に戻った午後、携帯電話のヴァーンヴァーンという聞き慣れない音が響き渡った。

最初は大きな揺れではなかった。しかし、長い。これはデカイと思ったが何もできない。早く収まってくれと願いながら気づくとシュレッダーに必死にしがみついていた。

地震が収まると署災害警備本部が設置されたが、情報が入らない。管内で何が起き



上空からの四倉港の状況＝平成23年3月11日、いわき市

ているのか分からない。遠くにサイレンの音が鳴り響いていた。

津波である。いわき市の沿岸にも津波が押し寄せ甚大な被害に遭ったらしいが、詳しい情報が入らない。いたずらに時間だけが過ぎていったような気がした。

日が暮れ始めると、被害状況が入り始め、次々と津波による火災、死者の通報がなされ、刑事第一課員が慌ただしく動き出し災害に伴う検視が始まっていた。

震災当日は、十数件の通報であったが、中には、交番や市役所の支所に運び込まれたご遺体もあった。

夜になっても被害の全貌がつかめず、



平建物の山となったがれきの山
平成23年4月2日、いわき市

どれだけ死者がいるのか想像がつかない。とにかく、いわき中央署でとれるだけの体制を取ることとし、刑事第二課をはじめとした各課および機動鑑識隊浜通分駐隊の応援を得て、総勢50人にも及ぶ検視班と遺族対応班を編成した。

そして、震災2日目、寒い日であった。

検視場所となった市民プールには、捜索班、搬送班が収容したご遺体が次々と運び込まれて来た。お年寄りの女性が多い。みんな泥まみれで、体が濡れて冷たくなっている。さぞ寒かったろうと手を合わせる捜査員の姿があった。

ご遺体の搬送は続く、終わらない。いったいどうなっているのか、搬送班に聞くと「豊間、とよま薄磯地区は壊滅状態だ」と言う。

2階の安置所が手狭になってくる、毛布・納体袋が残り少ない、ひつぎがない、ロビーで怒号する遺族がいる、水が出ない——などとさまざまな問題が起こるが、一つ一つ解決していく署員の姿があった。

震災3日目、不眠不休に加え、寒さがこたえる。

幼い兄弟と祖母のご遺体が収容された。

祖母が孫を連れて逃げる途中に津波の被害に遭ったのだろう。

しかし、相変わらずひつぎが足りない。一番小さい子どもだけをひつぎに納め、両親が対面する。

「すみません。ひつぎが間に合わないんです」

母親が、兄弟を一つのひつぎに入れてやりたいと言うので、幼い弟を納めたひつぎに兄も一緒に納めると「よかったね。お兄ちゃんと一緒だよ」と言葉をかける母親の姿。

涙があふれ言葉が出ない。刑事警察28年、大抵のことでは驚かないが、今度ばかりはこたえた。

震災から5カ月が過ぎ、普段の生活を取り戻したが、まだまだ苦悩の日々を続けている人々がいることを忘れてはいけない。

そして、我々もこの日のことを決して忘れることはないと思う。

最後に、いわき中央署の会議室に「履霜戒」という書が掲示されている。

元警察庁長官の後藤田正晴氏の書で、意味は、霜を踏んで歩けば、やがて氷が張る

時期になることから「前兆を見て、やがて来る災いに対して用心せよ」という戒めの言葉である。

阪神・淡路大震災があり、やがて宮城県沖地震が来ると言われていたが、果たして、我々は何か準備していたものがあつたのだろうか。
(平成23年8月)

生かされた者に希望を

いわき中央警察署
青木 省二 50歳代

左手甲の部分に愛用の太ボールペンで書いた「2:46、3:05、3:25」の文字。これは、地震の発生とそれに続く津波の襲来の時刻を、現場で急ぎ書き留めたものです。津波に追われて九死に一生の思いで駐在所に戻った後、震災で乱雑になった事務所に置かれているメモ用紙に、この忘れ難い時刻を書き写しました。

平成23年3月11日午後2時46分、大地震発生。同日午後3時5分、津波第一波襲

来。

豊間海岸サーファー駐車場で、北の海から小高い波が押し寄せ、堤防の高さまでの約4メートルの津波を目撃。引き続き、パトカーで海岸沿いの警戒警ら、津波広報の継続。

そして、第二波の約5分前、美空ひばりの「みだれ髪」で有名な灯台下の塩屋埼築港付近で、海を眺めてひとりたたずむ海の男に声を掛けました。

「大丈夫ですか」

「今の津波で、小舟が全部陸に打ち上げられ壊れちゃった。地震が大きかったので、また大きいやつが来るかもな」と話していた矢先です。目の前の海が、瞬く間に引き潮になり、海が真っ黒に変身したのでした。

海の男も、さすがに今まで慣れ親しんできたウニ、アワビ漁場の異変に気付いたのでしょうか。

「駐在さん、逃げっぺ。俺、こんな海や引き潮を見たことがねえ」と真顔で話し、海の男は灯台下の我が家へ向かったのです。

海の男と別れてから、1、2分すぎた時です。パトカーのルームミラーに目をやると、何か黒い暗いものが押し寄せてきました。それが津波だと気付いたのは、駐在所

近くの豊間小学校校門付近にパトカーを止め、降車した時でした。パトカー後方約5分の所を茶色い津波が、道路を横断し、学校プール、グラウンドを覆ってきたのです。私は数秒の差で生かされたことに、ただその場にぼうぜんと立ちすくむだけでした。

海の男とは後日、再会することができ、生かされた者同士、共に復興を誓い合いました。

薄磯地区270世帯のうち、駐在所付近6軒の民家と小学校校舎は、津波の被害を^{まぬが}免れましたが、全てのライフラインが閉ざされ陸の孤島と化しました。

津波避難所に指定されている豊間小学校に住民が避難して来たことから、避難誘導を実施しました。

豊間小学校校舎への避難者は約430人に上り、私は何度も来襲する津波の恐怖におののきながらも、けが人の介護、避難者の対応などに地元消防団や地元有志と一緒に頑張って対処したのですが、何せ寝ずの番で、あの時具体的にどうしたかなどは記憶が薄れてきています。ただ、あの震災で地元駐在所の赤い門灯が残ったということ

が、地元の人たちに励みになればと思い一生懸命でした。

翌日になって、市役所から豊間小学校は危険だという連絡が入ったため、支援に駆けつけた自衛隊や消防署員と協力し、避難者を別の避難所まで誘導でき、ひとまず安堵あんどしました。

しかし、小学校に避難してきた方々の情報から薄磯地区でも相当な数の行方不明者がいると聞かされ、これからが正念場と感じ取りました。

それから3日ぐらいたった時でしょうか、一面がれきの山と化した住宅街にも、重機により道が開かれ、車両が通れるようになりました。本格的な行方不明者搜索活動が始まりました。

本来であれば、区の陣頭指揮を執るはずの薄磯地区区長、豊間地区防犯協会長等々のご遺体で次々発見され、これから復興のために一翼を担うであろう方々が亡くなつたという現実はショックでした。

思えばあの日の午前、中学校の卒業式で一緒に来賓として招かれ、中学生の旅立ちに立ち会って、それが別れとなりました。

搜索活動では、ご遺体が発見される度に出来るだけ発見現場に赴き、地元消防団員



重機を使い捜索活動を行う警察職員＝平成23年3月22日、相馬市

や有志の協力を得て一緒に立ち会っていただくことで、遺体安置所での身元確認作業がスムーズに出来るように努めました。

しかし日がたつにつれ、ご遺体の傷みも進み、立ち会われる地元有志は大変つらいだろうと感じましたが、嫌な顔ひとつせず立ち会っていただき、我々警察への協力には頭が下がる思いでした。

ライフラインが絶たれた薄磯地区の状況は散々たるものでした。電気やガス、水道が当たり前に使えることが、この時ほどありがたいと感じたことはありませんでした。特に困ったのが食料と衛生の問題でした。

食料が底を突いた際には、かまぼこ店を営む消防団員の方が、被災した大型冷

蔵庫の中からかまぼこを出してきて、私たちに届けてくれました。豊間のかまぼこは他地域に誇れる美味で、つらい避難生活の中でも、味わっているときは至福の時、一生分のかまぼこを頂きました。

小学校の断水したトイレは汚物があふれ、非常に不衛生な状態でした。そんな時、駐在所から見える小学校のプールに津波の海水がたまっているのに気付きました。水を確保できたことにより、トイレの衛生を保つことが出来ましたが、手洗いや入浴が出来ず当たり前前の生活にはほど遠いものでした。

(平成23年8月)

パトカーからの脱出

いわき中央警察署

菅野 理範 20歳代

▼地震発生

東日本大震災発生当時、私は草野駐在所員として、受け持ち区内で巡回連絡を行っていました。ある飲食店を訪問しているとき激しい揺れに襲われました。



津波で流されたバス＝平成23年3月18日、相馬市松川浦

地震が収まったかと思うと大津波警報が発令されました。私は同僚とともに、住民や通行車両などに対する避難誘導や道路状況などの被害確認のため、パトカーで海岸地区に向かいました。

海岸付近の道路の損傷は激しく、通行不能となっている場所も多くありました。パニックになっている住民も多かったため、私たちは高い場所に避難するよう車載マイクで広報を続けました。

▼津波の到来

しばらく海岸付近で活動していると、突然大きな津波が堤防を越えて押し寄せてきました。パトカーが浮き上がったかと思うと一瞬で流されてしまい、全くすすべがない状況に陥ってしまいました。

パトカーは道路脇の木に衝突して停止しましたが、津波は猛烈な勢いで押し寄せ続けました。窓の外では滝のように水が流れ、パトカーは水没間際の状況で、

生まれて初めて死を意識した瞬間でした。

「もうすぐ死ぬ。もう家族にも会えない」という考えが頭をよぎり、自分が置かれている状況が信じられませんでした。

死にたくないという一心から、パトカーに車載されているガラスクラッシュャーを使用して、側面ガラスを割って車内から脱出しよう決めました。パトカーから出るとで逆に津波にさらわれてしまう危険もあり、どうするべきか迷いましたが、最終的にはパトカーの天井部分から木に登って難を逃れることができました。

津波が引いた後は、びしょ濡れになった制服を着たまま、命からがら歩いて帰りました。

▼行方不明者の搜索活動

行方不明者の搜索活動は翌日から本格的に始まり、私も連日、搜索活動に従事しました。現場では余震や津波の危険に加え、東京電力福島第一原発事故による放射線の恐怖との戦いとなりました。

特に最初の一週間は劣悪な状況で、休憩時間や食料も全くない状態でした。もちろんトイレもありません。適当な場所を探していると「ご遺体が見つかった」と消防団

員や自衛隊員に呼び止められたり「がれきの中に娘が取り残されています。一緒に捜すのを手伝ってください」などと声を掛けられるなど、精神的にも肉体的にも本当につらい活動となりました。

▼反省・教訓

今思い返してみると、さまざまな反省点や教訓が思い浮かびます。

例として災害知識の不足が挙げられます。

私は津波がこれほどの被害をもたらすものとは夢にも思っておりませんでした。詳しい災害知識があれば、私は津波にのまれることもなく、もっと多くのことができたのではないかと悔やまれてなりません。

警察官は、普段から災害に備えて知識の習得に努めるとともに、発生した際にはどのような行動をとるべきかをイメージしておく必要があると痛感しました。このことは、現場で活動する者が、適切かつ安全な行動をとるためだけでなく、幹部が適切な指示を出すためにも必要なことであると考えています。

(平成23年8月)

その姿に打たれて

いわき中央警察署

野村 和正 30歳代

鮮明に覚えていることと言えば、当署にある大型バスを午後11時ごろに送り出した時のことです。私を含めた署員約20人に見送られ、大型バスが、当署正面玄関前から暗がりの中へ吸い込まれるように出て行きました。大型バスには、放射線防護服を着用したK警部補、O警部補、S巡査部長の3人が乗っていました。

向かった先は、東京電力福島第一原発から10^{キロ}圏付近の特別養護老人ホームでした。

この日は原発建屋が水素爆発して数日しかたっていない時期でした。

3人の任務は、老人ホームに避難したまま取り残された入所者を、原発から離れた場所に避難させるというものでした。災害警備本部からの出動命令が来て「誰が行くのか？」となりました。当時は、原発や放射能に関する十分な知識もなく、それに対する不安から張り詰めた空気の中、K警部補が、われ先に名乗り出て、すぐに準備を



介護施設入所者を避難させる本県警察官＝平成23年3月21日、南相馬市

始めました。

〇警部補も「じゃ、俺も行く」と言って支度し、続いてS巡査部長も少し苦笑いしながら「俺も行こう」と立ち上がり、地図を見ながら場所の確認を始めました。

あつという間に出動隊員が決まり、この3人が出動することになったのです。

放射線防護服、防護マスク、吸気缶を用意して、出動する3人に着装させたのですが、初めてのことで要領も分からず、過去に着装の講義を受けていた署員を中心に、1人に対して、2、3人がかりで着装を行ったのです。

この間、他に何人かの署員が「自分が行く」と申し出ましたが、3人の意志は固く「俺たちが行く」と譲ろうとはしませんでした。意固地になっているわけでもなく、自分に酔っているわけでもなく、淡々としたその姿は、ただもう頭が下がる思いでした。

3人とも、既婚者で家族がいます。この時、3人を突き動かしていたものは、一言で言えば「使命感」だったと思います。

危険を伴うこの任務、守るべき家族がいれば、あえて危険な場所へ行くのは避けたくなるのが普通だと思います。

当時は、本部から放射線に関する資料が出始めたところで、今のように原発周辺のモニタリング結果(線量測定値)が出ていたわけでもなく、どの程度危険だとか、大丈夫だとか、よく分からない時期でした。

3人は悲壮感を感じさせることもなく、黙々と「これからか、少し眠いな」などと明るく、陽気に放射線防護服を着ていました。そして、どれほどの危険があるのかわからない中、3人は老人ホームを目指して出発して行ったのです。

結果として、福島市から先行した機動隊員が、なんとか老人ホームにたどり着き、入所者全員を無事に原発から離れた場所に避難させることができました。

当署から向かった3人は、地震後の悪路に阻まれ、途中で引き返すしかなかったのでした。しかし、3人の勇気、仕事に対する情熱、使命感、そして日々の仕事として出動した姿は、警察官としての模範と言えるものです。

(平成23年8月)

一瞬の迷い

いわき東警察署
宇山 浩史 30歳代

平成23年3月11日、前日に逮捕した被疑者の取調べの準備のため、刑事課執務室内で事務処理中に聞き慣れないアラーム音を聞きました。

地震発生後、管内において発生した火災、津波発生に伴う検視事案の現場に、避難する一般車両と逆行するように向かい、目の前の事象を現実と受け止め、無我夢中で事案処理に奔走しました。心の中に、家族は…、身内は…との一抹の不安を抱きながら。

当直体制に入り、現場から警察署に戻ると警察署のロビーは、家族の安否確認、行方不明者届け出に訪れる市民であふれかえり、騒然としていました。

私は、ある男性から安否不明家族の相談を受けましたが、その男性が帰り際、私に「刑事さんの家族は無事ですか」と尋ねてきました。

それまで、余計なことは考えまいと、必死で現場を走り回っていた私の頭のなか

に、先の不安が膨れ上がってきたのです。

妻は隣接署に勤務する警察官であり、おそらく現場を駆け回っていることだろう。では実家はどうか。私の実家はいわき市北部の沿岸地域、久之浜町であり、波立海岸はたちの目の前である。実家に在宅中の91歳の祖父は無事に避難しているだろうか、母の勤務先は久之浜漁港にほど近い場所に位置している。津波の被害は免れただろうか――と次々に頭の中をよぎりました。

すると、郡山市に嫁いだ妹から、地震発生以降、不通だった携帯電話に着信があったのです。

妹はひどく動揺した声で、実家の電話がつかまらない、母の携帯電話もつかからない、親戚の電話もつかまらない、実家の様子を見に行けないか、と私に訴えてくるのです。

私は妹に対し、今晚は当直勤務で職場を離れられない旨伝えると、妹は無用な心配をかけたことを謝り、今は警察官として頑張つて、とだけ言い電話を切ったのです。

一瞬よぎった「自分が警察官でなければ……」。その葛藤を打ち消したのは、警察官採用試験の際、面接官に言われた言葉でした。



津波により火災が発生した住宅地＝平成23年3月11日、JR久ノ浜駅周辺

「警察官と他の公務員の違いは、命を懸けて、他人を守ることが出来るかどうか。時に家族よりも、他人の命を守ることが優先されるが、その覚悟はあるか」ということです。

まさか、本当にそんな時が来るとは思いもしませんでした。

しかし、この時私は、とにかく警察官としてやるべきことをやろう、家族もそれを望んでいるはずだ、もしこの場から離れれば家族から非難されるだろうと、その行動原理は使命感という格好のいいものではなく、自分自身の運命であると受け止め、そう結論づけたのです。

その後、実家を管轄する警察署に勤務する妻から「任務で実家付近まで行ったが、避難所である中学校には母と祖父の姿はない。近所は壊滅状態だが、実家は津波の被害はなく、玄関が施錠され、不在であった」との連絡を受けたのです。

きつとみんなどこかに避難していると、妻に言い聞かせる一方、自分にも言い聞かせていることに気付いたのです。

それからまた、混乱した管内の現場を駆け回り、当直勤務が明けようとしている3月12日の朝方、東京に単身赴任中の父から携帯電話があり、家族全員無事であるとの連絡を受け、張り詰めていた緊張感が、ため息とともに一瞬のうちに安堵感あんどに変わったのです。

震災から約1カ月半、やっと再会した母は、震災当日の様子として、押し寄せる津波にのまれながらも必死で逃げ延びたことなどを興奮気味に話してくれました。私たち夫婦に対して「震災の真つ最中、警察官として休みなく国民、県民のため働いたあなたたちを誇りに思うよ」と笑顔で話す母の姿に、報われたような気がしました。

今回の震災により、警察官最大にして、永久に結論づけ出来ないであろう命題に直面しました。あるいはそれに苦悩すること自体、警察官としてのタブーなのではない

か、今回の執筆に際し、他にもっと取り上げるべきテーマがあったのではないかと、今になって自問しているところです。
(平成23年8月)

仲間とともに 地域住民を守る

いわき南警察署
菅野 利範 30歳代

地震の揺れがようやく収まると署内は慌ただしくなり、各署員が被害状況確認、情報収集などのため当署1階に集まり、幹部指示のもと、災害警備体制を取ることとなったのです。無線からは、現場に出ている自動車警ら署員から「○○○○で爆発」などの報告が続々と入ってきたのです。

私は署に残り、現場から報告される被害状況やテレビから流れてくる地震の状況についてまとめる用意をしていましたが、程なく「きゃあ。早く逃げて」「津波が来てるぞ」「早く逃げろ」などと叫びながら、付近にいた多数の住民たちが署内になだれ込んで来ました。

一体何が起きたのかと思います、窓から外の状況を確認すると、警察署近くを流れる洪川が津波により氾濫し、その津波が警察署に押し寄せて来ていたのです。

その光景を見て、すぐに署玄関に向かい詳しい状況を確認しました。

すると津波は、警察署北側からも迫って来ていたのです。そして、この時私は、署に迫り来る津波に巻き込まれたお年寄りの姿を見たのです。そのお年寄りは、津波から逃げ遅れたのです。

お年寄りは、警察署駐車場の出入り口付近で、同じく津波に巻き込まれ動けなくなった成人男性2人に抱えられ、それ以上流されずに済んだのです。

しかし、その3人は、動きが取れずに立ち往生し、お年寄りは、足がすくみ立つこともままならない状態でした。

「早く、警察署に誘導しなければ」と思い、お年寄りたちの元に向かいました。

警察署からお年寄りまでの距離は約20メートルでしたが、迫り来る津波により足が思うように進まず、20メートルの距離がとても長く感じました。

ようやくお年寄りの元に駆けつけると、お年寄りの両脇を抱え上げ、警察署まで引き上げることにしたのです。



津波により浸水した地域の救助活動＝平成23年3月11日、いわき南署周辺

津波に流されたお年寄りはずでに体力をなくし、自力で立ち上がれない状態だったため、お年寄りの全体重が私の体へのし掛かりました。

最大限の力を振り絞って、署玄関までお年寄りを引き上げようとしたのですが、署までの距離残り約10メートル付近に来たところで、津波の流れはさらに強くなり始めたのです。

私は、足をすくわれるのを防ぐため、いったん足を止め、流れが緩やかになるのを待ちました。

するとその時、刑事課のY警部補が「菅野、大丈夫か」「今行くから、がんばれ」と言って、私の元に駆けつけてくれました。

Y警部補の助けで、無事お年寄りを警察署まで引き上げることができました。お年寄りにけがなく、またお年寄りと共に津波に立ち往生してい

た成人男性も自力で警察署までたどり着くことが出来ました。

お年寄り救出後、私は津波により半倒壊した家に取り残された人たちの救助や被害状況の収集、行方不明者の捜索などに従事しました。

今回の震災では、多くの人に「お疲れさまです」「お体大事にしてください」などとねぎらいの言葉をいただきました。

自身が被災し大変な状況にいる中でも、我々警察官の姿を見ると、そのようなねぎらいの言葉をかけてくれて、あらためて我々の職務の重さや警察官としての誇りと使命感を感じました。

(平成23年8月)

警察官という仕事

いわき南警察署

伊藤 兼輔 20歳代

▼地震

平成23年3月11日、私は当時いわき南署刑事課に所属しており、その日は日勤勤務



がれきと共に流れ着いた民家＝
平成23年3月19日、相馬市原釜

であった。当日は人事異動の内示日で、私は棚倉署への異動内示を受け、署長への報告や、事務処理などを行っていた。

午後2時46分ごろ、地面からのドシンという震動とともに、いまだかつてない大きい揺れがいわき南署を襲った。

▼不安

津波警報が発令されたものの、無線が輻輳し、正確な情報が得られないまま、署員は外に出て広報や避難誘導活動に従事した。

津波が来るとなると、妻と子どもは大丈夫だろうかと頭をよぎったが、携帯電話は全くつながらず、どうすることもできなかった。

また、地震の影響により、管内の工場が爆発し、さらにアパートの一室がガス爆発して死者が出るなど事故が多発し、私は家族への不安を残したまま対応に追われた。

▼津波

津波が来た。

あつという間に警察署の駐車場に水が流れ込み、玄関ギリギリの高さまで水かさが増した。

警察署の中は避難してきた人たちであふれ、3階の会議室を開放し畳を敷き、毛布を集めた。

いわき南署の立地場所が低いためか、どんどん水が流れ込んできた。

駐車場では車の中に取り残されたおばあちゃんが「助けて」と叫んでいる。

駐車中の車が流される。

故障した車からクラクションが鳴りやまない。

道路上の車が縦に3台積み上がっている。

今まで見たこともない風景が私の目にこれでもかと飛び込んでくる。

私は、これは現実なのかと目を疑ったが、それはここにいる誰もが思ったであろう。（※おばあちゃんはボートにより救助しました。）

▼家族

空も暗くなるころ、しばらくつながらなかった私の携帯電話が鳴った。

見ると、妻からの「今、警察署の会議室にいる」というメールであった。

私は急いで3階の会議室に行き、大勢の人混みの中から妻と娘を見つけると、心配していたものがどこかに行き、すつと力が抜けるのを感じた。

話を聞くと、妻と娘は、係長の家族らと高台に避難しようと車を走らせたところ、ちょうど警察署の近くで津波に遭った。

警察署南側のビルの非常階段にみんなで避難していたところ、警察官数人にボートで救助され、警察署に避難したのだそうだ。

妻と娘は、係長の車に乗せてもらっていた。

次の日、係長の車を見ると、津波の水圧でエアバックが開き、ボディはへこみ、その被害状況は津波の威力を物語っていた。

▼記憶

妻と娘には、こびりついて離れない頭のなかの地震、津波の記憶を出来る限り^{ふっしょく}拭きさせるよう、心のケアを何年もかけてしていかないといけない。

2歳になったばかりの娘は、小さな地震が起こっても「はっ」とした表情になり過敏に反応し、私にギュッと抱きついてきたりもする。

その半面、自分から「じしん、ぐらぐら」などと言って体を揺らす。

子どもは、怖かった体験を遊びに取り入れることによって、そのショックを癒やそうとするのだとテレビで見たことがある。

娘も娘なりに、地震の恐怖を受け入れ、消化しようと頑張っているのだと思う。

▼誇り

妻と娘をボートで救助してくれた数人の若手警察官には、感謝してもしきれない。人のために尽力する警察官という仕事を、これほど尊く、これほど誇りに思ったことはない。やはり、警察官は地域住民にとって最後の砦とりでなのだ。

(平成23年8月)

今できることに

全力で取り組む

双葉警察署

菅野 裕介 30歳代

震災発生時、私は双葉署浪江分庁舎で当番勤務をしていました。午後2時46分、分庁舎の地域課の部屋で事務処理をしていたところ、私や周りの署員の携帯電話から、

一斉に警報音が鳴り出しました。すぐに緊急地震速報だと気づき、外に出ようと廊下を歩き始めた時に、大きな横揺れがゆっくりと始まったのです。

外へ出ても大きな揺れは続き、次第に立っていることが困難なくらいの激しい揺れになりました。地面にしゃがむようにして揺れが収まるのを待っていると、私の目の前で、駐車場に大きな亀裂が走り、分庁舎脇にある民家の一部が倒壊しました。

揺れが収まるとすぐに倒壊した民家に走り、けが人がいないか確認しました。幸いにも、その倒壊した家屋に人はおらず、けが人もいないようでした。辺りを見回すと、他にも損壊した民家、大きく陥没した道路などが目に飛び込んできました。見慣れた浪江町の風景は、大きく変わっていました。

私は損壊した家を一軒一軒見て回り、けが人がいないことを確認して、いったん分庁舎に戻り、津波広報と避難誘導のためにパトカーで、海岸近くにある請戸漁港方面へ向かいました。

出勤する時、私はまさか巨大な津波に遭遇するとは全く想像もしていませんでした。

請戸漁港近くの県道で津波の広報をしていたところ、ごう音と土煙と共に迫り来

る、巨大な黒い濁流としか表現できない大津波に遭遇しました。

この時の光景は、一生忘れないと思います。

私は近くにあった高台に駆け上がり、何とか大津波から逃れることができました。

少したってから高台を降りてみると、津波は既に引き波の状態で、流れ着いた家屋などのがれきが、すっかり水に漬かった辺り一面を埋め尽くしていました。路上に駐車されていたはずの車両も全てなくなり、道路はがれきでふさがれ、車両が通行できない状態でした。

分庁舎に戻り状況を報告することも考えましたが「このがれきの山の中に人がいるかもしれない。今はできる限りのことをやろう」と決め、また大津波が来るかもしれないという不安を抱えながらも、搜索を始めました。

私は、周囲にプロパンガスの臭気が漂うなか、足場が定まらないがれきの山を苦勞しながら歩き、生存者を搜索しました。

大声で呼び掛けても、返事をする人はなく、もう生きている人はいないのかもしれないと半ば諦めのような感情を持ちながら、搜索を続けました。

辺りが暗くなるまで搜索を続けたところ、数人の生存者を発見することができまし



上空からの請戸小学校付近の状況＝平成23年3月11日、浪江町

た。

いずれもけがの程度がひどく、すぐに治療をしなければならぬ状態でしたが、幸い近くまで救急隊や警察車両が来ていたので、搬送してもらうことができました。この時、私自身も分庁舎へ戻るようになりました。

分庁舎に戻って、やっと「私はまだ生きてるんだ」と実感することができました。

こうして私は、今回の震災で生き残ることができました。

現在、双葉署管内は原発事故の影響で、ほぼ全域で住民が避難しています。このような状況のなか、空き巣などの犯罪が多発しているというところは、たいへん悲しいことであり、断じて許すことのできない行為です。

現在、私は機動捜査隊会津分駐隊へ異動になり、双葉署管内で活動することはあまりなくなりました。

た。

しかし、機動捜査隊員として今できることは、このような犯罪を犯す輩を野放しにすることなく、必ず捕まえるという強い気持ちを持って職務に当たることだと思いません。
(平成23年8月)

忘れられない言葉

双葉警察署

小路 輝 30歳代

3月11日は、異動の内示日でした。私は留任となり、新たな気持ちで仕事をしようとしたその時、大地震が発生したのです。

それ以後、双葉署は、まさしく命懸けの勤務を、署員一体で行うこととなりました。そして、双葉署管内は世界中で最も注目を浴びる場所となっていました。

私も、2階建ての建物よりも大きな津波に追われながらも、のみ込まれる寸前のところで助かったり、東京電力福島第一原発が水素爆発を起こした時には、わずか3キロ



防護服を着て対応にあたる双葉署員＝平成23年3月12日、双葉署浪江分庁舎内

ほどの近くにおり、本当に死ぬかもしれないと思いながら職務に当たってきました。今でも間近に迫った大津波を忘れることはありませんし、いよいよ原発が危ないとなった時に署長から言われた「原発が危ない。でも警察は逃げるわけにはいかない。覚悟してくれ」という言葉が忘れられません。

これまで、職務中に死ぬかもしれないと思ったことは、正直ありませんでした。今回の震災後の勤務では、死ぬかもしれないと思ったことが何度もあり、この時、真っ先に浮かんできたのは恐怖でした。しかし、何とか恐怖を乗り切り、現在に至ります。

私だけではなく、署員全員がそうだったに違いありません。

震災後、原発の爆発で警察署に立ち入れなくなって、拠点を段階的に移しながらの勤務でした。

最終的な拠点が福島署川俣分庁舎の3階となり、数日ぶりに署員がそろい、知っている顔を見た時は、安心感というか、安堵感あんどというか、お互い無事あんどでよかったとい

う感情が湧いてきて涙が出そうでした。

震災では、役場、消防、自衛隊などいろいろな機関が活動していますが、警察も広範囲な業務に当たっています。

双葉署にもさまざまな問い合わせや要望などがあり、中には警察本来の仕事なのかなど思うときもありますが、それだけ県民は警察を頼りにしているということではないでしょうか。警察官としてやるべきこと、できることをやり、県民の不安を取り除くとともに復興の力になりたいと思います。双葉署員は頑張っています。

(平成23年6月)

遺族対応

双葉警察署

佐藤 佑哉 20歳代

3月11日、大震災が発生した時、私はJR白石駅で停車中の電車の中にいました。警察学校の初任補修科を卒業して、富岡駅まで電車に乗って双葉署に戻る途中でし



遺体安置所において連日読経を行った日蓮宗
法恩寺住職＝平成23年3月26日、南相馬市

だが、今後、警察官として独り立ちしなければならないことを考えると不安でした。そんな不安も忘れてしまうほどの大地震が起こりました。

電車は動かず、この日、私は双葉署に戻ることができなかったばかりか、翌日には、東京電力福島第一原発の爆発事故が起こりました。

私たち双葉署員は、福島署川俣分庁舎の会議室に立ち上げた双葉署災害警備本部で勤務するようになりました。

私に与えられた仕事は、遺族対応でした。津波などの災害で亡くなって発見されたご遺体の身元を確認して、遺族に引き渡す仕事です。

双葉署の安置所は、相馬市の会社跡地に設けられました。

ご遺体の担当は、警察学校を卒業したばかりの私の最初の試練でした。

遺族には、どんなに変わり果てた姿になっていても、本人だと分かるようです。

遺族を案内してご遺体と対面していただくと、顔の輪郭を見ただけで「息子に間違いない」などと言って、ひつぎを抱きしめて泣き崩れてしまう方がほとんどでした。

あまりにも悲しい様子に、私は次に話す言葉も思い浮かびませんでした。

ご遺体については、DNA鑑定と歯形のデンタルチャート（歯の状態等を記録したもの）を合わせて照合して、確実に身元が分かった段階で遺族に引き渡していました。身元が確実に分かるまでは、相当の日数がかかるため、私たちは多くの遺族から「間違いないのに、なぜ早く引き渡せないのだ」と問い詰められました。

私たちは、一刻も早くご遺体を遺族に引き渡したいという気持ちで仕事をしていましたが、万が一にも、ご遺体を取り違えてしまったら大変なことになってしまいます。

遺族には、DNA鑑定の必要性などを説明して、引き渡しを待つてくださるよう、ひたすら説得するしかありませんでした。

私は、安置所で数多いご遺体を見て、遺族と接しました。

妻を亡くした夫、両親を亡くした子ども、中には、自分以外の家族や親戚をすべて

亡くした人もいました。

それまで我慢してため込んでいた行き場のない怒りが安置所で爆発してしまう遺族の方もいました。

「どうしてこんなに傷むまで、見つけてくれなかったんだ」「まだ、うちの子は見つからないのか、ちゃんと捜しているのか」と怒鳴るように言われました。

私は、何の返答もできず、じっと黙って相手の話を聞き続け、怒りが静まるのを待っているしかありませんでした。

また、涙を流しながら「うちの人は、苦しんだのでしょうか」という質問も多くなりました。

私は「あれほどの津波です。すぐに気を失ってしまい、苦しむ時間もなかったと思います」としか答えられませんでした。本当のことは分かりませんが、そのように言うしかありませんでした。

そんな私の返答に、遺族は一樣に「それなら良かった。安心しました」と言って涙を流しましたが、遺族の安心したとの言葉は、私の唯一の救いでした。

毎日のように安置所に通って身内のご遺体を捜している遺族、変わり果てた姿のご

遺体を抱きかかえるようにして泣き続ける遺族、私たちに不満をぶちまける遺族…。

安置所は、愛する人や大切なものを全て失った方々の悲しみ、あるいは、誰にもぶつけることのできない不満や怒りが、御霊みたまの眠る静かさと混在して、毎日、大波が立ち、私の心を打ち付けていました。

(平成23年8月)

悲しみの なかの光「絆」

南相馬警察署

田口 裕美 30歳代

私は、南相馬署で避難誘導中、土煙のような、茶色い渦を巻きながら陸地をのみ込んでいく津波に追い掛けられました。

建物までもなぎ倒し、かなりのスピードで私たちの乗ったパトカーへ近づいてきた津波の恐怖は、その時初めて死を覚悟したほどです。

津波のひいた海沿いの町は、人の生活のにおいまで消し去るようながれきの一面で、その光景は、とても静かで、とても悲しく、そしてとてもやりきれないものでし

た。

巡回連絡で知り合い、親しくさせてもらっていた夫婦も、同じ職場で働いていた上司2人も、この震災で亡くしました。

震災の傷痕を見るだけで、涙があふれてきたこともあります。自然に対して、人間のちっぽけさ、無力さを痛感しました。警察官として、使命感を持ち、人命救助や復旧のため、仕事をしなければいけないのに虚脱感に襲われることもありました。

そんな気持ちと戦いながら、頑張れたのは深い深い「絆」のおかげだと思っています。震災直後、南相馬市はコンビニエンスストアやスーパーなど、食料品や日用雑貨を売る店がほとんど店を閉めてしまい、生活自体が困難でした。

県内ではガソリンが不足し、どこへも行けない状態が続きました。

しかし、私の両親は朝早くから給油所に2回も並び、郡山から私のところへ水や食料を届けてくれました。

母親は、私の顔を見るなり、泣き出し、私の頭をなでました。

私も泣きそうになりましたが、耐えながら「大丈夫だよ」と言ったような気がしません。



南相馬署災害警備本部の
状況＝平成23年3月29日

その時あらためて、家族との絆を感じました。それだけで、頑張れる気持ちになりました。両親には感謝しかありません。

絆は、それだけではありませんでした。震災直後から、受援隊、捜索隊、検視班など、各署からたくさんのお客様が来てくれました。さらに、全国の警察が、福島県に応援部隊として来県し、支援してくれました。

福島県内を、各県警のパトカーが警らしている姿は頼もしい限りでした。

同じ警察官ながら、震災被害に遭って心が折れそうだった私でさえ、全国の警察の絆の強さを感じたのですから、地域の方々はもっと心強かったと思います。

避難所を回って、避難している方々から「警察はすごいね、全国の警察官が応援に来てくれる」「みんな福島県のために頑張ってくれてる、こっちもくよくよしていいね。感謝してるからね」と全国の警察への感謝の言葉を頂きました。

今回の震災で、福島県は地震、津波、原発事故と悲しいことが起こりすぎました。

しかし、その中に、悲しみを経験しなければ見えてこなかった「絆」がそれぞれにあったと思います。

南相馬署に届けられたたくさんの方の差し入れは、避難していく人たちからの被災地に残る私たち警察官への感謝の気持ちでした。

避難所でのみんなの笑顔、これも私たち警察官にとって強力な原動力になりました。

同期生や友人からの、私を心配してのたくさんの方のメール。

応援部隊の方々のさまざまな方言の聞こえる警察署のロビーまでも、私にとっては一つの絆でした。

「絆」なんて、いつもなら、あつてないような存在で、関心も薄いもののように思うのです。でも、本当に今回の震災の被害を受けてからは、どんなささいなことにでも、つながりがあつて協力し合える、支え合えることに気付くことが出来たような気がします。

目に見える「絆」だけでなく「心の絆」が日本人の心にあることに希望の光が見えた気がします。

(平成23年8月)

泥沼化した老人施設

南相馬警察署

大谷 裕二 50歳代

海岸の松並木の上に黒煙を見たのは、原町区の海岸線方面へ移動を開始した時だった。10分はあろうかという大木の上に、黒煙と白い波しぶきとなった大津波が見えた。

「大変なことになった」と直感し、住宅の多い浜佐方面の状況確認に向かった。

道路には次第に泥の量が増え、ヨッシーランドという介護老人保健施設に差し掛かった時には、泥が50センチも堆積し、進むことができなくなった。

周辺は、がれき、泥に埋まり原形をとどめない車が散乱し、そこに、多数の人が泥まみれになって横たわっていた。

「足の弱い老人が巻き込まれたのか」と愕然がくぜんとしながら、現場に居合わせた人に「大丈夫ですか」と声を掛け、付近に流されてきたシートや板を集めてただちに救助を開始した。



津波に襲われた老人保健施設＝
平成23年4月13日、南相馬市

横たわっている人に声を掛けると、既に息をしていない人もいた。

私は、咄嗟とっさに重傷者、意識不明者などを優先して病院に搬送しなければならぬと、周囲に大きな声で呼び掛け協力を依頼した。「病院搬送は生存者優先」と大きな声で叫んだ。

現場に居合わせた人たちもうなずき、救助活動に協力してくれた。

あまりにも数多くの人たちが流されて横たわっていたため、死者には毛布などを掛けて安置した。

救助には施設の職員や近隣者が、搬送は通りがかった

タクシーや車両で駆けつけた市役所職員が従事した。

救助された人の多くは、ヨッシーランドの職員や入所

者で、避難途中で津波に巻き込まれた状況が判明した。

津波は、巻き込まれた人たちの衣服を剥はぎ取ってし

まったのだ。

それを聞いた時、すさまじい津波の威力にあらためて

恐怖を感じた。

救助活動は、余震とさらなる津波の恐怖のなか全力で行われた。併せて二次災害を防止するための避難広報活動も繰り返し実施した。

今でも忘れられないことは、ヨッシーランドの駐車場で津波に巻き込まれた男性を、水没した車両内から救助したことである。男性は、津波の恐怖から体を硬直させ、つかんでいたベルトを外せなかったため、声を掛け、安心させてベルトから手を外させて、ようやく救助できた。

また、泥の中から救助した老人も恐怖心から歩くことが出来ず、他にも同じような状態の人が周囲のあちらこちらにいた。

私は、大きな声で「自分で歩いて、避難してください。頑張ってください」と何度も繰り返し元氣付け、何人もの被災者を自力で避難させた。

老人であるとはいえ、けががなく、自力で歩くことができそうであれば、自分で避難してもらえないほど、泥の中には人が倒れていたのである。

ヨッシーランドでは、30人以上が亡くなったが、海岸から1キロ以上離れているこの施設まで津波が打ち寄せることは、誰が予想しただろうか。

(平成23年9月)

今こそ県民のために

南相馬警察署

大島 秀一 40歳代

揺れが収まり、福島市内での職務を終了した私は、当時勤務していた南相馬署に向かいました。その途中、車のラジオから聞こえてきたのは、地震の規模や、遠く離れた首都圏の情報などで、具体的な被害の情報は流れませんでした。

そのため、自分の目で車窓を流れる景色を確認しながら、被害の状況を把握しました。

私が確認した地震の被害は、道路が小規模に崩落していることと、建物の瓦の一部が落下している程度で、倒壊する家屋などがない状況であったため、この時点では「なんだ、被害はたいしたことはないな」と思っていました。

しかし、署を目前にした国道6号線まで行くと状況が一変しました。

警察署は国道6号線から分岐して海の方向に向かう道路沿いにあります。この交差点に同僚たちが立ち、車両の進入規制をしており、また、その道路上を数多くの住

民が避難していました。

署に到着すると、警察署の駐車場には、テントが張られ、署内外には近隣住民があふれかえっていました。

刑事課の部屋に戻ると、課内は、キャビネットなどが全て倒れており、メチャクチャな状態でした。

そして屋上に上がり、海が見える東方を見て愕然がくぜんとしました。

これまでの人生で、絶望感など味わったこともなかった私が、目の前の景色を見て「もう駄目だ」という気持ちになりました。

空と海が真っ黒で、これまで毎日のように眺めていた防波堤、防潮林、人家が一切なくなっており、すぐ目の前まで海が近付いていたのです。

この光景を見た私は「これでは、数え切れない住民が亡くなってしまっただろう。俺は、これから何をすればいいんだ」と思いました。

しかし、この時私はすぐに、自分自身に対して「情けない感情を持つな。お前は警察官だろう。1分1秒でも早く行動して、一人でも多くの住民を助ける。安心させろ」と言い聞かせ、刑事課の部屋に戻り、準備を整え、検視場所となる高校体育館に



介護施設入所者を避難させる警察官＝平成23年3月14日、浪江町

向かいました。

私たちが体育館の床にビニールシートを張り終えるころになると、病院で亡くなった方々が、次から次へと運び込まれてきました。

そしてこの日から、500人を超える検視活動が始まりました。

老人から子どもまで、あらゆる年齢層のご遺体が運び込まれ、2日目になると体育館の床がご遺体でいっぱいになりました。

また、2日目には、東京電力福島第一原発の事故が発生し、捜索・検視活動が滞るなど、困難を極めながらも、一日も早くご遺体を遺族に会

わせてあげたいという一心で、昼夜を問わず必死に努力しました。

そして、月日がたつのも忘れるほどの日々を過ごし、あっという間に2カ月間が過ぎました。

この間、検視場所は、高校の体育館から南相馬市スポーツセンター体育館に変更されました。

スポーツセンター体育館では、これまで分けていた遺体安置所が一緒となり、ついで一枚越しに、検視作業とご遺体の確認作業がなされるようになりました。

するとついでに越しに遺族の泣き叫ぶ声や、嗚咽おえつが聞こえました。

そして、ある遺族の「あーよかった。こんなに悲しいことはないけれど、見つかって本当によかった」という声を聞きました。

その声を聞き一緒に涙しながら、私は「亡くなった方々を、一日も早く家族の元に帰してあげたい」という気持ちが一層強くなりました。

(平成23年8月)

死の恐怖

地域安全課

香野 洋平 20歳代

震災発生時、私は東京電力福島第一原発1号機北側にある管理棟事務室内で勤務中でした。

長く強い揺れの地震は、事務室内のキャビネットや食器棚を倒し、建物や道路に亀裂を生じさせました。

「地震で建物が倒壊して、このまま死ぬのではないか」と思った記憶がよみがえります。

揺れが弱まると、原子力発電所の被害状況を報告しようと試みましたが、電話はつながらず、無線も混雑して連絡がとれない状態で、このままでは二次災害に巻き込まれるのではないかと焦ったことを覚えています。

なんとか無線がつながり、現時点で津波などの被害がない旨を報告した後、同僚と管理棟を脱出し、原発作業員の避難誘導措置を終えた他の勤務員などと合流し、高台



津波到達後の福島第一原発の状況＝平成23年3月11日

へと避難しました。

高台へ避難する途中の坂道から沖の方を見ると、白波の立った大津波が来るのが確認できました。

避難途中の原発作業員の中には、大津波を見ている者や、大津波をカメラで撮影している者がおり、私は「早く逃げろ、津波にのみ込まれて死ぬぞ」と叫び避難を促うながしました。

このころには既に大津波が、管理棟1階出入り口付近まで到達しており、敷地内の港に設置されていた重油タンクと思われるものが軽々と吹き飛ぶのを目の当たりにしたのです。

この時、管理棟からの避難があと5分



福島第一原発敷地内の状況＝平成23年5月1日

遅れていたら「死んでいたかもしれない」と2度目の死の恐怖を実感しました。原発作業員もその状況を見て、ことの重大性、危険性を理解したようで、急いで一時避難して行きました。

その後、私は車両で住民の避難誘導に当たり、張り詰めた緊張と疲労困憊こんぱいの状態で一
夜を明かしました。

翌日、町の被害状況を確認して回りました。地震と津波がもたらした傷痕は大変大きなもので、がれきで覆い尽くされ、至るところに地盤沈下や陥没が見られる町の姿に、私は自分の目を疑いました。

そして12日の午後、運命の時が来ました。未曾有の震災に追い打ちをかけるように「原子力発電所が爆発」と無線が入ったのです。

「今度こそ、本当に死ぬかもしれない」。これまでになく強く死を意識し、底知れない恐怖に襲われま
した。

放射線に関する知識があまりなかったことも、余計に恐怖心をかき立てたのだと思います。さらに震災後から携帯電話がつかえず、連絡の取れない家族や仲間の心配がありました。

そのような目に見えない恐怖の中で職務を遂行できたのは、自分自身の中に「県民のための警察」という行動規範があり、そして、警察官として自分ができることをしなければならぬという気概があったためだと考えています。

(平成23年8月)

第2章

それぞれの最前線

〜中通り、会津編

東日本大震災、原発事故は浜通り以外の警察署にも大きな衝撃を与えた。須賀川の灌漑用^{かんがい}の藤沼湖決壊では多くの犠牲者が出た。各地における道路網の寸断、そしてライフラインの途絶によって多数の県民が混乱した。被災地への応援、治安維持への努力、福島県警察の活動は迅速に始められた。



決壊した藤沼湖下流域の搜索活動
＝平成24年3月8日、須賀川市

藤沼湖決壊

須賀川警察署

折笠 順 50歳代

東日本大震災では、内陸部の須賀川市長沼地区でも、藤沼湖の決壊で甚大な被害が発生した。濁流が下流域にある人家十数軒をのみ込み、7人の尊い命が奪われ、今なお1人の行方が不明になっている。

地震発生後すぐに、断片的に入る被害情報の中に「長沼地区の藤沼湖が決壊して家が流されている」との通報があった。被害の規模などの詳細が判明しないままに救助隊を編成し、地震で道路が損壊するなどして一部通行不能の長沼街道を途中迂回しながら、藤沼湖の下流域に到達した。そこで目にしたものは、何軒もの家屋がコンクリートの基礎や柱だけを残して流され、がれきが周辺の道路や田畑一面を覆い、付近に人影もないという現場の惨状だった。

被害は藤沼湖の下流数キロに及ぶ広範囲にわたっていた。ただちに被災情報の収集に当たったところ、現地で合流した駐在所員の報告から、いまだ十数人の所在が確認さ



上空からの藤沼湖の状況＝平成23年3月18日、須賀川市

れていないことが判明した。搜索開始に、もはや一刻の猶予も許されない状況だった。

搜索は、現場での情報と状況判断により、数軒の家屋が濁流に流されてがれきの山となった場所から始まった。

悲惨な現場の光景を見た我々の思いは皆同じであった。

——早く助け出したい。なんとか発見したい——

私たちはその一心で、時の流れも、寒さも、疲れも、眠気も忘れ、夜明けまで必死の搜索活動を続けた。

夜が明けるころには、辺りは雪ですっかり覆われていた。早朝に到着した別の



決壊した藤沼湖下流域の搜索活動
＝平成23年3月18日、須賀川市

搜索班と合流するところになると、情報の収集で徐々に被害の全容を把握できるようになった。下流域は家屋も田畑も全て濁流にのみ込まれた状況で、藤沼湖の決壊による悲劇は想像を絶するものであった。

朝からの搜索で、がれきが散乱する田んぼなどから数体のご遺体を収容したが、その後の搜索活動は、長沼支所を活動拠点に地元消防団と主流の江花川を下流に向けて実施した。

江花川の河川敷には、数^キロも流されてきた車両の残骸などが点在し、約8^キロ下流地点でもご遺体を収容するなど、藤沼湖の決壊による濁流の巨大な力が思い知らされた。

数日後からは自衛隊も加わり、江花川、釈迦堂川、そして阿武隈川の合流地点までの約20^キロにわたって搜索活動を実施した。

河川の搜索は、区間ごとに連日、必要箇所を掘り、がれきを撤去しながら繰り返し実施した。現場では、やるべきことは全てやったという思いであるとともに、被災者

が早く元の生活に戻れるようにと心から祈っている。

(平成23年8月)

みんなの協力に感謝

須賀川警察署

香野 巧 30歳代

藤沼湖のダムの決壊。この事実が判明したのは東日本大震災発生から少したってからのことだった。

決壊したダムから流れ出た水により、附近の住宅が流され、8人の方々が行方不明となる大惨事が発生していた。

私たちが現場に急行したときには既に付近の家は流され、床上まで水が漬かっており、現場に近づくことも困難な状態だった。

そんな状況の中で行方不明者の捜索が必死に続けられた。

そして立て続けに発生する東京電力福島第一原発の爆発。原発から50^キ以上離れている須賀川でも、住民たちの不安は極限に達していた。ガス、水道は止まり、物資も



地震により決壊した藤沼湖＝平成23年3月21日、須賀川市

圧倒的に不足している状態では当然のことと言えるだろう。

しかし私たちは、この危機を何とか乗り切ることができた。この危機を回避出来たのは、決して私たち警察だけが頑張ったからではない。

電気、ガス、水道が止まった時、担当者は寝る間も惜しみ、復旧作業に当たってくれた。

自衛隊は行方不明者の捜索のほか、飲料水の供給などにも協力してくれたし、役場の人も避難場所の確保に尽力してくれた。

頻繁に発生する余震の中、ラジオのアナウンサーは建物が倒壊する危険があるにもかかわらず、的確に避難指示などを放送し続けてくれたし、病院関係者は負傷者を必死に救護してくれた。

道路の復旧がもつと遅ければ、支援物資もろくに届かなかっただろう。

近くの弁当業者が毎日数少ない食料をかき集め、私たちのための弁当を作り続けてくれたからこそ、私たちは自身の生活の心配をすることなく警察業務を邁進まいしんすることが出来た。警察署には毎日のように、会社や住民の方々からの差し入れが送られてきた。

私は今まで「警察が国民を守っているんだ」という誇りを持って仕事をしてきた。

しかし、そこには私たち警察官がいるからこそ、国民は今の平和きょうつじやを享受できるんだという驕りおごがあったように思える。

生活の基盤が全て崩れ去った今回、初めて私は今の生活のありがたさに気付くとともに、私たちの仕事が国民の協力がなければ何も出来ないのだということを痛感した。

(平成23年8月)

次々に災害情報が入り、なかでも須賀川市長沼の藤沼湖が決壊したという知らせを受けたときは本当に驚きました。

震災以後、署員らの任務は震災による被害状況把握と、復旧に向けた諸活動へと移りました。

当時は、皆が物資の不足や正常な生活に戻れないもどかしさから、ストレスなどの精神的な負担を抱えていました。

それでも幸いだったのは、交通や防犯など関係団体をはじめ、地域住民一人一人が警察活動に対して非常に協力的であったことです。

交通、防犯ボランティアの皆さんが、自分の会社や自宅が被害に遭っているにもかかわらず「警察の皆さんご苦労さま」と言って、私たちの災害警備活動などに積極的に参加し協力してくれたのです。

大震災直後に寒い中を幹線道路である国道118号線の大通りで、付近の住民が警察官が駆けつけるまでの間、一生懸命に交通整理を行ってくれました。

本当にありがたいと思えました。地域の皆さんの協力があり、警察は大震災に立ち向かえたものと、心から感謝しています。

(平成23年8月)

安全管理サポート 班に従事して

福島警察署

上妻 直樹 20歳代

忘れもしない平成23年3月11日の東日本大震災当日、私は福島署に勤務してしました。

地震発生直後、福島署では、3階に署長を長とする「署災害警備本部」、4階に県警本部長を長とする「県本部災害警備本部」が設置されました。

私は、署災害警備本部に入り、管内の災害対策に当たりましたが、連絡要員として県本部災害警備本部にも出入りしていたため、県内全体の被害状況も把握することができました。徐々に判明してきた被害状況は想像以上のもので、これまで誰も経験したことのない大災害なのだと思います。

震災当初、私は信号機の停止、土砂崩れ、建物火災など地震による直接的な被害対策ばかり意識してしまい、正直なところ、原発事故が起こると思っていませんでした。



警察官に近寄ってくるペットの犬＝
平成23年4月4日、南相馬市鹿島区

その後、5月18日に福島北署に異動しました。着任後、私は「安全管理サポート班」として原発周辺区域を訪れる機会を与えられ、多くの経験をしました。

「安全管理サポート班」とは、その名の通り震災で行方不明となった方を捜索する「捜索班」のサポートを行う部隊で、主な業務は、①発見されたご遺体の放射線量測定、②捜索エリアの放射線量の測定（モニタリング）、③発見された貴重品等の放射線量の測定、④各主要ポイントの放射線量の測定（定点モニタリング）——の大きく四つに分類されます。

放射線量の測定に当たっては、空間線量測定用サーベイメータ（デジタル式、アナログ式）2台と表面汚染測定用サーベイメータ1

台の合計3台の測定器を使用しました。

これらの測定器に関しては、知識は持っていたものの使用した経験がなく、実際に手に取って測定してみると慣れるまでに時間が掛かりました。

そして防護服を装着して毎朝、原発周辺に向かうのですが、その途中、住民の方々が段ボールなどで作った激励の言葉を書いたプラカードを持ち「復興支援、ありがとう」「頑張ってください」と私たちを応援してくれるのです。

私はその姿を見る度に毎回胸が熱くなり「被災した県民のために頑張るぞ」という気持ちになり、過酷な任務に耐えられる強さをもらうのです。

「過酷な任務」と言いましたが、単に危険な環境で作業することだけが「過酷」なのではありません。

倒壊したままの家屋、住民が急いで逃げ出したと思われる洗濯物が干しっぱなしの住宅、痩せ細りながらも人間に近づこうとするペット……。原発事故による放射線汚染により「3月11日のまま」で時間が止まってしまった現場を目の当たりにし、心が折れそうになってしまうのです。

(平成23年8月)

東日本大震災を

体験して

福島警察署

佐藤 恵士 50歳代

大震災の当日、私は福島署東庁舎2階の課内にいたが、ロッカー上のテレビは傾き、物は倒れて落下し、机の引き出しも全開する状態で、その時間は長く、何もできずに揺れが収まるのを待つしかなかった。

何分続いただろうか、ようやく揺れが収まると、家族への連絡を試みたが、電話は不通で、家族の安否すら確認できなかった。

火災の通報が次から次へと無線で流れたが、パトカーの無線では、交通渋滞で全く進行できないとのことだった。

このため、徒歩で現場確認に向かったが、外に出ると、ビルの壁には亀裂が入り、窓ガラスが落下して路上で粉碎し、ガラス片が散乱している状況であった。

道路は部分的に隆起や陥没している状況が認められ、警察署前の道路は渋滞し、車は全く動けない状況だった。

途中、交番に立ち寄り、火災の状況を聞き取ったが、火災は起きていないとの知らせを受けて引き返した。

警察署に戻ると、警察本部がある県庁の建物や分庁舎に倒壊の恐れがあることを聞き、さらに県本部災害警備本部が福島署に設置されることを聞いた。一体どうなっているのか、頭で想像もつかない中で、検視班が結成されたとの知らせを受けた。

装備センターに集合し、浜通りへの応援に向かうとのことだった。

津波の甚大な被害が出ており、家屋が倒壊したり流されたり、さらには津波にのみ込まれて死者、行方不明者が多数いるとの情報が流れた。

私は、第二次要員として、1週間後に出動することになった。

災害現場を目の当たりにした私は、テレビや新聞の映像、写真とは違う光景に、体が震える思いがした。

海から3^キも離れた道路脇には、何隻もの漁船が横倒しになっており、家の屋根だけが何かにむしり取られたように無残な状態でひっくり返っていた。

また、畑だったと思われる場所は、がれきや土砂で埋め尽くされ、目を疑うすさまじい光景が広がっていた。



津波で打ち上げられた漁船＝平成23年3月18日、相馬市尾浜

私たちは相馬署の指揮下に置かれたが、ご遺体を入れたひつぎの数に言葉を失い、次から次と運び込まれるご遺体の数に驚愕きょうがくした。

いつご遺体が運び込まれてくるかも分からないため、昼食は検視現場内にとらざるを得なかった。我々は、雪が舞う寒さの中で、冷えて硬くなりかけたにぎり飯を口にした。汁物などはなく、線香などの臭いが鼻から抜けることもない中で、無理にでもにぎり飯を口に入れるしかなかった。

ひつぎに入れられたご遺体は、検視場所の隣に設置された安置場所に置かれたが、日がつにつれ傷みも激しくなる。それでも遺族は毎日のようにご遺体の確認に訪れた。

遺族は、行方不明者の特徴を遺族班に伝

え、何とか早く身内を確認し引き取りたいとの一心で訪れている。その遺族の気持ちを思うと、胸が熱くなった。

こうした遺族の気持ちを思いながら、何とか気持ちにゆえ、早く帰してあげたいという強い思いだけで検視に携わったように思う。

双葉署管内のご遺体も相馬の検視場所に運ばれたが、その中に警察官のご遺体もあった。4人の警察官が殉職し、1人の警察官がいまだに発見されていない。

同僚の死を目の当たりにするのは、本当に切ないものである。出棺の際は、検視班全員が道路に列をつくり、敬礼で見送ったが、同僚の出棺を見送る切なさやつらさは、言葉には言い表せない。

行方の分かっていない警察官は、まだ20歳代初めの若い警察官で、震災当日の異動内示で巡査部長に昇任し、異動になることも決まっていた。

新たな勤務地での夢や希望を持っていたと思うし、その警察官は刑事を希望していた。

私とは相馬署で一緒に勤務したことがあるが、やりたかったことや希望の全てを打ち砕かれ、本当に悔しい思いだったに違いないと思うと心が痛む。（平成23年8月）

被災者の身元確認

福島北警察署

佐々木 幹成 50歳代

さかのぼること10年前「これは大規模災害発生を想定した、警察官と歯科医師による身元確認訓練です」と、集まった約100人の前で切々と話す歯科医師の先生がいた。全国に先駆け、県内の捜査・鑑識系の警察官と歯科医師の先生らが合同で、大規模災害発生時に、いかにしてデンタルチャートからご遺体の身元を判明させるかを、法医歯科学の立場で行う訓練であった。私は当時事務局の一員として5年間、歯科医師の先生方と実習内容や各訓練方法について検討し訓練を重ねていた。

平成23年3月11日午後2時46分、その日は訪れた。地震発生時、私は警察署の刑事課にいた。今までに経験したことのない縦揺れと何度も押し寄せる余震。キャビネットは倒れ、庁舎内は停電した。福島県では、浜通りでの被害が甚大で、県内各署から招集された検視班第一陣での人員ではご遺体の収容、検視作業が到底できない状態に陥っていた。さらに増強のため第二陣が編成され、私たちは東京電力福島第一原発か

ら二十数^キ地点にある南相馬市の高校体育館に、検視班身元確認係として出勤することになった。

当時、検視場所兼遺体安置所となっていた体育館に到着し扉を開けると、納体袋に収納された数十体のご遺体が整然と並べられており、遺族の方々がご遺体を一人一人確認していた。安置所で身元確認を終えたご遺体の傍らから聞こえてくる遺族のすすり泣く声私たちが胸を突いた。これまで1千体を超える検視業務を行ってきた私も、この光景には言葉を失った。

ご遺体から1〜2本の歯のエックス線写真が撮影できれば、歯形鑑定のうえで極めて有効な手段となる。震災から数日後、警察庁からの派遣要請で、今まで数多く震災現場で活動された経験のある歯科医師が他県から駆けつけた。先生は、エックス線写真を1枚でも撮影しておけば必ず役に立つ、誰もいないなら俺がやると話してくれた。私もエックス線に関する簡単な資格を取得していたことから一緒に写真撮影することとなった。

当然エックス線撮影室もなく、ポータブルエックス線装置を使用するのだが、旧型であるため、とても重いものであった。先生はその装置を手にし、何体ものご遺体を

一心に撮影した。私が、大丈夫ですかと尋ねると、先生は「こんなエックス線の被ばくなんかはたいしたことないよ」と笑い飛ばした。原発3号機が水素爆発して間がない時期であり、爆発当時、検視場所で積算放射線測定器の数値が急上昇していくのを経験している私には驚きであった。

私たち警察官は拜命した時点で、大なり小なり事において「覚悟」というものを持つている。一般市民や他の公務員にはないものだと思っていたが、懸命に作業に取り組む先生の姿勢に「自分の生き方はこれだ、いつ死んでも惜しくない」という覚悟を感じた。

まだ3月で寒い時期、作業を終え2人で屋外に出てちらつく雪を見ていたときのことである。先生が「俺はこういう現場の仕事が好きなんだよ。1週間頼むと言われて来ているけど、要請があればいつでも来るからね」と話しかけてきた。先生の方に目を向けると、還暦を迎えしわの刻まれた額に汗が光るのが見えた。その姿は、長い年月を現場で生きてきた者の姿であり、私の心を打ち、私の心を惹きつけた。

ある日、遺族対応班から「身元が判明したことを伝えてもなかなか信じてもらえない家族がいます」との連絡が入った。ご遺体と歯形が一致したことは、いわば死亡宣

告である。家族もこの結果をある程度予想していたかもしれないが、もしかしてどこかに避難していかないか、どこかで生きていかないか、一縷の望みにすぎりたい思いがあったのだと思う。私はそのご家族に対し、収集されたデンタルチャートや確認書など身元確認に至る経過をできる限り詳細に説明した。やがて説明に納得したご家族は、うつむいた顔を上げ「よく分かりました。本当にお世話になりました」と感謝の言葉を述べてくれた。私は、何か声を掛けなければと思ったが、遺族の心境を察すると掛ける言葉が見つからずただ深く頭を下げるだけで、その感謝の言葉が逆に心にくのしかかった。

(平成23年8月)

奪われた命

二本松警察署

塚田 祐一 50歳代

東日本大震災が発生。しばらくして私の耳に飛び込んできた情報は、相馬市や南相馬市など太平洋沿岸で、大津波による多数の死者が出ているということでした。とに



遺体安置所で検視に当たる警察官
＝平成23年3月29日、南相馬市

かく死者の数が、推測で何千人単位に上るとのことでした。

私は、この日のうちに検視班として派遣の命令を受け、この期間中、南相馬市と相馬市において、今回の大震災で亡くなった方々の検視業務に従事しました。

検視班の業務は、検案医師と共に、次々運び込まれるご遺体の一般的所見や各部の損傷状況などを中心に観察して死因を特定するものでした。

それに、もう一つ大事なこととして、身元を割り出すための所持品確認とDNA採取がありました。

検視は、当初高校の体育館などが使用されたのですが、この場所には、ご遺体の安置所も設置されていました。

遺体安置所には、検視が終わったご遺体が次々並べられ、身元が判明して駆け付けた遺族の嗚咽おえつや死者の名前を何度も叫ぶ声が、至るところで響き渡りました。

ご遺体の多くは、家で老後を過ごしていただと思われ高齢の方でしたが、中には10

代、20代の若者も含まれていました。それぞれ個々人の人生があり、話せば何日もかかるような、いろいろな物語や思い出などがいっぱいあったと思います。

私も、今回数多くのご遺体と出会って検視を行いました。南相馬市での1歳ぐらいの乳児の検視が、今もって脳裏に焼き付いて忘れることが出来ません。

乳児のご遺体は、外傷などがほとんどなく、目をつむって、まるで安らかに寝ているかのようでした。私は、この乳児のご遺体を前にしながら「かわいそう」という一言だけで片付けることの出来ない、何とも言えない気持ちにさいなまれました。

この乳児は、人生を歩み始めたばかりで、これから楽しいことやうれしいこと、たまにはつらいことや悲しいことなど数多くのことをいっぱい経験していくはずだったのに、無残にも一瞬の大津波にのみ込まれ、1年もたたないうち全てが終わってしまいました。

それに、この乳児には愛してやまない両親がいて、成長を楽しみに生きていた祖母がいて、誰もが乳児の誕生を喜び、幸せに満ちあふれていたと思います。

私も2人の子どもがおり、ましてや生まれたばかりの乳児を失うという親の心境を考えると、いたたまれない気持ちになりました。

私は、乳児の検視を行いながら「もし、親も一緒に津波にのまれていたのなら、早く見つかってほしい」と心の中で願いました。

その矢先、乳児の母親らしい20代の女性のご遺体が運び込まれてきました。

私たちの南相馬市での検視の業務は3日間で終わり、その後、相馬市へ配置換えとなってしまったため、結局あの乳児が家族の元へ帰れたのか、あの女性が乳児の母親だったのか、何も分からずじまいでした。

私は、あの乳児が家族の元に帰れたものと信じています。

(平成23年8月)

※乳児はその後、身元確認がなされ、遺族の元に帰っています。

搜索活動に従事して

郡山警察署

西方 秀文 40歳代

▼行方不明者の搜索任務

震災発生後、私は被災地に出動し、行方不明者の搜索活動に従事しました。搜索活



福島第一原発から10*₀圏内の搜索状況＝平成23年4月14日、浪江町請戸

動に当たっては、行方不明者に早く家族の元に帰ってもらいたいという思いで、がれきの中を搜索するという活動をひたすらに実施しました。

▼被災地で

私が震災後、最初に向かった被災地は南相馬署管内の原町区で、サーフィンの世界大会の開催や、千年以上の歴史のある相馬野馬追祭で知られた町です。南相馬署は、私が以前勤務していた場所でもありましたが、私の記憶にある風景は変わり果てており、特に、大津波により壊滅した海岸に近い地区を見た時には、言葉では言い表せない強い衝撃を受けました。

捜索中のある日、30歳代半ばの女性から「今日は5歳ぐらいの女の子は見つかりませんか」と声を掛けられました。女性の表情は疲れ果て、泥にまみれながら、海水と泥の水田を歩いていました。

私は言葉を返すことができませんでした。近くにいた隊員も、誰一人何も答えられず、私は「精いっぱい捜索します」とだけ答え、黙々と捜索を続けました。

あの女性はこの先、娘を失った深い悲しみに耐えて生きていくことができるのだろうかと考えると、つらく暗い思いで胸がいっぱいになりました。正直なところ、行方不明者捜索の任務では、仕事に対する充実感や達成感は一切なく、悲痛な感情だけが残りました。

▼隊員自身の被災

捜索に従事していた隊員もそれぞれの気持ちを抱えながら任務に当たっていました。

ある隊員は、今まさに捜索中の地区の出身であり、津波で実家は全て流失し、土台だけが残されたその場所に立ち、悲痛な表情を浮かべていました。岩手県出身の隊員も、実家がある地域は津波で壊滅し、両親の安否も確認できないまま、気丈にも任務



福島第一原発から20^キ圏内の搜索活動＝平成23年4月20日、榎葉町山田浜

に当たっていました。

隊員の中には、東京電力福島第一原発から20^キ圏内の「警戒区域」に設定された町出身者もあり、避難生活を余儀なくされた家族や、自分の生まれ育った町の将来に不安を抱いていました。

隊員たち自身も被災者であり、それでも懸命な搜索活動に従事する姿は、警察官としての使命を成し遂げようとする責任感がそうさせるのだらうと思いました。私自身も自宅が全壊し、家族5人で妻の実家に身を寄せ、避難生活をしながら搜索活動に従事しており、今となっては、強い使命感と責任感だけが私の体を突き動かしていたものと思います。

▼余震と放射線

搜索活動を進めるうえで、搜索を難航させる要因の一つが、度重なる余震です。

被災地は地震と津波により、通行不能の道路が多く、大型輸送車は搜索場所まで行くことができず、車両を待機させ徒歩で搜索場所まで行くこととなります。不気味な地鳴りとともに大きな余震が幾度となく発生し、その度に「地震発生、最大震度4、津波に警戒せよ」などの無線指令が流れ、搜索を中断し、時には大型輸送車の待機場所まで退避する日々が続きました。

しかし、しばらくの間、本当に津波が発生したら、津波が到達するまでに車両の待機場所まで退避できるのかという不安と恐怖が消えませんでした。

平成7年に発生した阪神・淡路大震災で、管区機動隊員として兵庫県に出勤し、余震が発生する中、災害復興活動に従事したことを思い出しました。

搜索活動も4月に入ると、原発から20^キ圏内にも重機を投入しての本格搜索が開始され、4月14日からは10^キ圏内の大規模搜索を実施しました。福島第一原発が所在する大熊町では、線量計が高い数値を示していたこともあり、この放射線という目には見えない恐怖が、隊員たちを精神的に疲労させていました。

(平成23年8月)

幸せな「平凡な生活」

郡山北警察署

高橋 眞 50歳代

▼半径10^キ圏内での搜索開始

平成23年4月7日、県警は警視庁機動隊の応援を受け、東京電力福島第一原発から半径20^キ圏内の南相馬市原町地区での大規模搜索を開始し、4月14日に半径10^キ圏内で部隊を投入しての大規模搜索を開始しました。

私は、10^キ圏内の搜索に指名され、4月15日に10^キ圏内にある浪江町に赴くことになりました。

自分の53歳の誕生日に半径10^キ圏内の搜索が開始され、搜索班に指名されたことに天命を感じ、自分がこの世に生を受け、自分の人生を生きてきて最も意義のある時が来た、「男子の本懐ここに極まれり」と思いました。

私は、派遣前日、興奮で眠れませんでした。派遣に意義を感じながらも、一方で、原発から10^キ圏内に入る自分は、どれだけ被ばくするのだろうか、自分にも家族がい



ご遺体を運ぶ警察官＝平成23年4月29日、大熊町

る、自分が被ばくしたら家族はどうなってしまうのだ——と考えていたのです。

当時の中野寛成国家公安委員長は記者会見で、我々の10^〇キロ圏内での搜索を「勇気ある決断をし敬意を表したい」と話していました。

▼浪江町請戸地区での搜索

私が搜索に入った浪江町は、地震で道路の至るところで陥没、地割れが残っており、瓦や塀の残骸が散乱し、静まりかえっていました。

震災から1カ月がたち、相双方部以外の市や町は復興が進んでいて生活も元に戻りつつあるのに、ここだけは時間が止まっていました。

▼ご遺体の発見

請戸地区の搜索は300人体制で実施され、我が班は、がれきの中に親子と思われる成人男性と男の子のご遺体を発見しました。

二人は、寄り添うようにして亡くなっており、津波に襲われる直前に父親が我が子をかばって抱きかかえているように見えました。

私には娘がいます。私はこのご遺体を前にして、私もきつと娘をかばって抱きかかえただろうと思うと、涙が止まりませんでした。

今まで、警察官として何度となくご遺体を見てきても涙を流さなかった自分が、我が身を犠牲にしても子を守ろうとする父のご遺体と、父を信じ頼る子のご遺体を見て職務を忘れ涙を流したのです。

他の班員も私と同じ気持ちだったのだと思います。

現場には遺体搬送班を待つ3人を残し、みんな足早に次の搜索へと移って行きました。

▼震災を体験して

今回の避難指示により、避難児童を受け入れた郡山市内のある小学校の校長は、私

が被災状況を確認するために同校を訪れた際、帰り際、私に向かって「普段の何でもない平凡な生活を送れることは幸せだったんですね」と話しかけてきました。

震災という非常事態を受け、休むのも忘れ管内での警戒活動に取り組んでいた私は、この被災地の人々の心情を端的に表現した言葉を聞き、自分も被災者の一人だったのだなと再認識することになったのでした。警察官であり被災者でもある自分は、生涯この言葉を忘れてはいけないと思いました。

(平成23年8月)

放射線との戦い

田村警察署

森 裕樹

20歳代

——「安全管理サポート班」の班長に指定する——
思いがけない連絡文が、警察署のファクスに送られてきた。

「不安」と「恐怖」が私を支配した。

妻と1歳半の娘の顔が浮かんだ。



搜索を終了しスクリーニングを受ける警察官
＝平成23年4月29日、南相馬市相双保健所

初めて耳にする「安全管理サポート班」とは、原発付近での行方不明者搜索のため、放射線を測定する部隊であり、東京電力福島第一原発が相次いで水素爆発してから2週間足らずで編成された。

全国初の部隊であったことから研修や説明を受けたが「不安」と「恐怖」はやはり拭えなかつた。私自身、エックス線作業主任者という資格を持つており、多少は放射線に関する知識はあるものの、放射線量が不明な現場に向かって本当に大丈夫なのか、体への影響は大丈夫なのかなど、思うところはたくさんあった。

しかし口に出してしまえば、不安と恐怖が大きくなってしまふ。じっと耐え不安と恐怖

と戦った。

離れた場所に避難していた家族にこの活動については言えずにいた。しかし万が一を考え父親にだけは正直に話をした。

いざ出動となり、私の顔は引きつっていたかもしれないが、平静を装い任務に従事した。

原発30^キ圏内、20^キ圏内へと入り、各ポイントで放射線量の測定を実施していく。人がいない。いくら走っても1台の車ともすれ違わない。静けさに包まれた町。

飼い主を失った牛が、突然私たちの前に現れ衝突しそうになる。夢なのか、現実なのか、区別がつかないほどの状態だった。

そんな中、津波被害が大きかった、福島第一原発直近の浪江町請戸地区の行方不明者捜索を実施するため、事前の放射線量測定の仕事が言い渡され、現場に向かった。

現場は南北に走る国道6号線から東方に少し行ったところで、手つかずの状態だった。

現場に到着すると、心臓が握られるような息苦しさを感じ、思わずハンドルを強く握り、ブレーキを踏んだ。

川沿いの土手にがれきが4〜5メートルぐらいの山になっていた。

そこを抜けると、さらに心臓を強く握られたように胸が痛くなった。まるで教科書で見た戦地のような光景だった。

土台はあるが、建物は跡形もなく、民家の2階部分だけがひっくり返っていたり、船が田んぼに何隻も横倒しになっていたりした。

また、辛うじて残っていた建物には、ロープや網が引っかかり風に揺られており、アスファルトが、軟らかく軽いのではと錯覚するほど「ふにやり」と布のように剝がれていた。

目の前には、現実とは思えない現実があった。

現場の放射線量は搜索に支障はなく、翌日には搜索が開始された。

搜索開始直後から「ご遺体発見」との無線が飛び交った。

そんな中、着装していたゴーグルに涙がたまった。

子どものご遺体。

我が子と同じくらいの子ども。

おんぶひもが着けられたままの姿。

母親と思われるご遺体とともに発見された。

妻、子どもとの日常を思い出した。

我が子の笑った顔、ぬくもりを思い出した。

涙があふれ、止められなかった。

捜索に従事した警察官の多くは私と同じように涙を流し、また耐えながら活動していた。

悲しいというよりも「悔しい」という感情の方が強かったことを今でも鮮明に思い出す。

この子も元気に笑い、遊んでいたはず。

どうしてこんなことになってしまったのか、誰のせいでもなかったのか、悔しくてどうしていいか分からない、やりきれない、やり場のない思いでいっぱいだった。

でも一つだけ、私の中の「不安」と「恐怖」は「誇り」と「使命感」へと変わった。

遺族が震災と立ち向かい、乗り越え、前へ進むためにも、ご遺体を家族の元へ帰すことが第一歩で、自分はその手助けをしているのだと。

(平成23年8月)

がんばり時は今だ

白河警察署

菅野 敬之 20歳代

東日本大震災により、白河署管内では土砂崩れなどが発生し、15人が亡くなりました。

震災発生以降、まさに夜を日に継いだ救助活動が行われましたが、余震が続いたりまた新しい崩落がある分からない状況のなか、皆自分の身を危険にさらしながらも黙々と救助作業に打ち込んでいたように思います。

私は、震災発生当日はデモ警備に従事していましたが、地震により急きよ中止になったデモの現場を後にし、管内の被害状況を確認するためパトカーを走らせました。

管内の惨状は予想をはるかに超えるもので、道路は波打ち、地割れ水漏れが至るところで発生していました。

さらに県内の被害を知らせる無線がひっきりなしに入ってきて「これは突発重大事



土砂崩れにより倒壊した民家＝平成23年3月21日、白河市葉ノ木平

案だよな」「がんばり時は今だな」と独り言を言ったのを覚えています。

そのうち、署の災害警備本部から「大信地区で土砂崩れ発生の模様、現場を確認せよ」との指令があり、大信地区の現場に向かいました。現場に到着すると、山の半分ほどが崩落し、麓にあった家が押し流されている状況で、すぐに救助活動に取りかかることとなりました。

携帯電話による連絡が一切つかず、家族のことが気がかりでしたが、幸いなことに私は警察アパートに居住しており、非番で待機中であったE巡查部長が参集の途中、全て家族の安否を確認してくれたという連絡を署災害警備本部からもらい、救助活動に打ち込むこ

とができました。

しかし、大量の土砂により作業は難航。また作業中にラジオから「東京電力福島第一原発の冷却装置が作動していない」との情報聞き、今後発生する被害と、その対応は今まで誰も経験したことのないものになるだろうと思うと、暗たんたる気持ちになりました。

雪が降り、気象条件が悪い中での搜索活動でしたが、大信地区では3月13日の午後になってようやく行方不明者を発見し、家族に引き渡すことができました。

大信地区の搜索活動が終わったため、私は葉ノ木平地区の土砂崩れ現場で活動することになりましたが、ここでは就学前の子ども2人を含む13人が土砂にのみ込まれ行方が分からなくなっているという状況でした。

私が搜索現場に到着したときには、おそらく災害に巻き込まれた子どもが使う予定だったはずのランドセルがすでに発見されていました。

貴重品として丁寧に泥が拭き取られ、搜索場所現地本部の傍らにぽつんとランドセルが置かれていた光景は、いまだに忘れられません。私自身なんとも言えない気持ちになりました。涙ぐむ警察官もいました。早く見つけてやらなければという思いと、

大量の土砂を前に思うように救助が進まない無力感に、気持ちばかりが焦ったことをよく覚えています。行方不明者の家族、親族が祈るように救助活動を見守る中でのつらい搜索でした。

(平成23年8月)

原発10^キ圏内の搜索

白河警察署

佐藤 敦 20歳代

3月11日の大震災から約1カ月後の4月14日、東京電力福島第一原発から10^キ圏内に部隊を投入した搜索活動が始まった。

早朝5時30分、白河署を出発した際に特に不安は感じなかった。

初日の集合場所である広野町には、いわき市から国道6号線を北上して入った。いわき市四倉地区は津波被害の痕跡が生々しく残り、いわき市を抜けるころには車両の通行は極端に少なく、北上する車両は東電関係車両の他、自分たちだけとなった。



福島第一原発から10[※]圏内の搜索状況＝平成23年4月16日、浪江町請戸

集合場所では、タイベックスーツ（放射線防護服）などの着装方法の説明を受けた。

集合場所でタイベックスーツを身に着けて、いよいよ搜索場所に向かって出発すると、数台のマイクロバスとすれ違った。マイクロバスには、原発の作業を終えて帰ってくる作業員が十数人ほど乗車しており、全員タイベックスーツに身を包み、大きな吸収缶の付いたマスクで顔を覆っていた。その異様な光景と、一緒にうつつむいて憔悴しやうすいしきった作業員の様子に、初めて原発付近に立ち入る私は不安感を募らせていった。

出動式を終え、搜索場所である浪江町請戸地区に向かったが、そこで目にした光景は想像をはるかに超えたものだった。南方にかすかに福島第一原発の煙突を望むその一帯は、漁港があり、その周りに住宅地が広がる場所だったが、今や海岸線から数キロ内側までががれきの山になっており、面影すら残されていなかった。海岸近くの請戸小学校は、まだ新しい鉄筋コンクリート造りの建物で、大きな被害を免れたように見



福島第一原発から10*₀圏内の搜索状況＝平成23年4月14日、浪江町請戸

えたが、近づいてみると2階まで津波にのまれた跡があり、ガラスが割れ、教室には机も椅子もない無残な状態になっていた。

搜索初日は、晴天で青空が広がり、海岸から離れ津波の被害から免れた町並みには、桜の花が満開で、空には震災前と変わらず鳥が飛び交っていたが、人けの全くない状況に体験したことのない違和感を感じた。

その日、津波に押し流されたがれきの中や自動車の中などからご遺体を発見し、家族の元に帰すことが出来たが、発見できたのはその地区で数百を数える行方不明者のうちの、歩きながら目視で発見できたごく一部だった。

搜索を終え、浪江町内から同地区での主要幹線道路である国道6号線上で、飼い主が避難する際に放したと思われる数匹の犬が、餌がもらえないためか、痩せ細りながらも、じゃれ合っていたのが印象的だった。

搜索隊は各部署に帰る際、各地に設置されたスクリーニング場所で放射線の値を測り、タイベックスーツをそ

の場で廃棄することになっていた。

私たちがスクリーニング場所として立ち寄った広野町と檜葉町にまたがるJヴィレッジは、全国でも有数のサッカー施設であったが、原発作業の後方拠点として使用されており、東電関係者、自衛隊関係者などでごった返していた。玄関ホールには原発作業員が身に着ける防護服、マスク、手袋などが段ボールに入れられ山のように積まれていた。

私は過去に特別機動パトロール隊(管区機動隊)に所属していた際、このJヴィレッジの警戒に当たったこともあったが、その時印象に残った天然芝の広大なグラウンドには、アスファルトや分厚い鉄板が一面に敷き詰められ、その上には大小さまざまな機材、それを運搬する車両が置かれていた。

その光景を目の当たりにしたとき、とても悲しく、虚しい気分になったことをよく覚えている。

こうして一斉搜索の初日は終了し、その後も約1カ月間にわたり警戒区域内での搜索が行われた。

(平成23年8月)

消防団に見た ボランティア精神

棚倉警察署

花見 秀一 20歳代

東日本大震災に伴い、いわき市薄磯地区や久之浜地区などで行方不明者の搜索活動に従事した。その際、地元消防団員のボランティア精神に大きな感銘を受けたことから、この場を借りて紹介する。

▼被災地の状況

私が搜索活動に従事した「いわき市薄磯地区」は、海水浴場で有名な観光地で、海岸から一番近い住宅までの距離が10メートルほどしか離れていない風光明媚な土地として知られていた。

しかし、私たちが派遣された時には、海岸線から約1・5キロの範囲にあった建物がほぼ全壊してがれきと化しており、樹木は根元からなぎ倒されている状態だった。

また、家屋は土台が残っているものの、1階部分が倒壊しており、辛うじて残った家屋の2階部分などは土台から数十メートルも離れた道路などに流されており、内部は、家



福島第一原発から10³㎡圏内の捜索に向け集合した様子＝平成23年4月14日、浪江消防署

財道具が散乱して泥にまみれていた。

波の引き際には倒壊した建物のがれきや木片、ごみなどが数層にもわたって堆積しており、付近は異臭が立ち込めるなど、風光明媚な土地であったというかつての姿はすっかり失われていた。

▼感銘を受けた消防団員

当時、捜索活動に従事していたのは、警察、自衛隊、消防署、地元消防団が主であった。

捜索活動開始当時は、がれきを撤去する重機を手配できなかったため、それぞれががれきの上って隙間から行方不明者を捜したり、時にがれきを人の手で片付けながら作業をした。

そんな中、がれきの中から60代ぐらいの女性と認められるご遺体を発見した。

津波の影響で家屋が流され、ご遺体の身元を特定

することが困難と思われた中、近くにいた消防団員に「この人の名前や住所などは、分かりますかね」と尋ねてみたところ、その消防団員は「ああ、この人は、あその角の家に住んでいたばあちゃん、名前は〇〇さんっていうんだ」とすぐに身元が判明したのである。

不思議に思い、私が「この辺にお住まいの方ですか」と聞くと、その消防団員は私たちの目の前にあった家屋の土台を指差し「ああ、俺の家、ここにあったんだ」と話したのである。

さらに、震災被害について聞くと「うちの子どもや嫁は、ちようど会社や学校に行っていて無事だったんだけど、親父と母ちゃんは駄目だった。親父は、地震の後、すぐに搜索して見つかったんだが、母ちゃんはなかなか見つからなくてずっと捜していたんだ。それがやっと昨日、遺体だったけど見つかったから、少し気が楽になったんだ。それでもまだ埋まっている人はたくさんいるはずだから、少しでも力になればと思ひ、搜索に参加してるんだ」とのことであった。

この話を聞いたとき、私は、これまで警察官として仕事へ取り組んできた姿勢や警察職務への責任の持ちようについて、あらためて考えさせられた。



福島第一原発から10*₀圏内の搜索状況＝平成23年4月14日、浪江町請戸

消防団活動とは、あくまで地域住民が自分の意思で活動するボランティア活動であるが、震災被害に遭い、住む家のみならず家族まで失った人が、市民のことを最優先に思っただけで活動に従事している。

私はこの人ほど県民のことを考えながら仕事をしていたらどうか。

私が、この人と同じように家族を亡くし、大切な住環境が破壊されたなか、他の県民のことを思い、仕事に専念できるだろうか。

そんなことが頭をよぎり、究極のボランティア精神を持った消防団員の精神を尊敬するとも、自分はこれまで以上に国民や地域住民のために、自分はこれまで以上に国民や地域住民の職務に臨まなければならないと強く思った。

(平成23年8月)

ことを思い、優しさと愛情を持って職務に臨まなければならないと強く思った。

検視班として

会津若松警察署

高野 秀一 30歳代

東日本大震災が発生し、テレビでは津波の映像が流れ、東京電力福島第一原発事故が報じられていました。震災で甚大な被害が生じることは、誰の目にも明らかになり、死者がどれほどになるか想像もできないでいました。

そんな状態で、検視班として相馬署に出動することになったのです。検視場所は、はじめは高校の旧校舎でしたが、その後、工場跡に移りました。私は検視班での活動を終えるまで、ずっとこの工場跡で検視業務に従事していました。

検視班は、大きく二つの班に分かれていました。

一つは、ご遺体を調べ、その人の特徴を見つけ、身元確認の手掛かりを探す検視班で、もう一つは、遺族から行方不明者の特徴を聞き、その特徴とご遺体の特徴を照らし合わせて身元を確認する遺族対応班です。

▼検視班



亡くなられた方の衣類を洗う警察官＝平成23年5月1日、相馬市

検視は、まず運ばれてきたご遺体をきれいに洗うことから始めます。ご遺体の特徴を見逃さないために、何より対面する遺族の悲しみを少しでも和らげるために一生懸命、丁寧に体を洗うのです。

その後、体の傷や手術痕などの特徴を丁寧に調べ、それを遺族対応班に伝えるのです。検視でもっともつらい時は、子どもが運ばれて来たときでした。

ご遺体は運ばれてくる際に、毛布などに包まれてくるのですが、子どもはその小さな体のため、一目で子どもと分かるのです。かわいらしい服を着て横たわる子どもを目の前になると、何ともやりきれない気持ちになったことをよく覚えています。

その子が家族からどれほどかわいがられ、今後どのように成長していったんだろう、この子を見た家族はどんな気持ちになるのだろうとさまざまなことが頭を巡り、しばらくは体を動かすことができなくなりました。

▼遺族対応班

この班の周囲は、いつも悲しみに包まれていました。

毎日毎日、ご遺体を探しにやってくる人。ご遺体が見つかり、泣き崩れる人。ご遺体と一緒に悲しげに帰っていく人。ご遺体が見つからず、寂しげに帰る人…。

このような光景が毎日続いたのでした。

遺族対応の仕事をする上で、上司に教えられた心構えがありました。

「遺族のために仕事をする事。遺族が何を望み、何をしてほしいのか考えて行動すること」

遺族対応班はこの言葉を抱き、必死になって遺族と接してました。

忘れられない老夫婦がいます。

その夫婦は、息子夫婦と孫を全て亡くしており、唯一見つからない孫一人を探して、遺体安置所へと足を運んでいました。

老婦人は手提げバッグに、捜している孫が載った新聞の切り抜きを入れ「一緒にひつぎに入れてやるんだ」と寂しげに私に話し、夫に付き添われて帰って行ったのでした。

(平成23年8月)

未来への希望

会津坂下警察署

遠藤 宏 40歳代

経験のない大地震、このとき私はパトカーで警ら中でした。

突然、目の前の石塀が歩道に倒れ、倒れてきた塀の家から、老夫婦が飛び出してきて、おばあさんは地べたに座り込み動けない様子でした。

私はすぐさま、おばあさんの所へ行き「危ないから、こっちへ」と言って手を引いて誘導しようとしたところ、そのおばあさんは

「私は大丈夫、危ねえからあんたこそ逃げな」と言うのです。

私は「この人何を言ってるんだ、助けに来たのは俺なんだけど」と思いながら、おばあさんを危険のない道路まで誘導しました。

その後、おばあさんに「大丈夫だよ、近所の状況を確認してくるから」と言って立ち去ろうとしたところ「大丈夫だよ、あんたも気を付けてな」と逆に声を掛けられました。

私は、地面に座り込んで動けなくなったお年寄りに心配されているのかと、不思議な気持ちでその場を離れました。

大震災が発生した3月11日のうちに、5人の署員と共に南相馬署に救助搜索部隊として派遣されました。行方不明者の搜索と搬送が私たちの任務と決まり、翌朝から搜索を開始しました。

南相馬市は、国道6号線を境に東側の地区が津波で大きな被害を受けており、ありとあらゆる物がなぎ倒され、あるはずのない所に漁船や松の木などが横たわっていました。

私は南相馬署での勤務経験があり、当時の風景ははっきりと記憶に残っています。その記憶に残る風景と今の現実のあまりの差に、ただただ言葉を失うばかりでした。津波の被害を受けた原町区萱浜かいはまを搜索していたところ、大きな揺れがあり、その後すぐに津波警報の無線が流れ、私たちにも海岸から離れるように連絡が入りました。

付近の人に津波の恐れがあるので避難するようにハンドマイクで呼びかけました。



がれきを乗り越えて捜索現場に向かう警察職員＝平成23年4月3日、浪江町請戸

すると、6人の集団が私たちに近づいてきたのです。その中の50代の男性が「海岸沿いの道路上に二つの遺体を置いてきたので、津波が収まったら運んでくれないか」と声を掛けてきました。

ご遺体が津波で流されてしまえば見つからないかもしれない旨を話したところ、男性は「その時は仕方ねえ、また捜しますから、お巡りさんだって人間だ、無理は言えねえべ」と言うのです。

その男性とご遺体の関係を尋

ねたところ「私の20歳になる長男と10歳になる長女です」と答えました。

その答えを聞いて愕然がくぜんとしましたが、男性は涙を浮かべるでもなく淡々と冷静に話
すのです。

男性は泣かなかったのではなく、あまりのひどさに涙も出なかつたのです。

男性に「お気の毒です」という言葉をかけるのが精いっぱいでした。

その後、幸いにも津波が来なかつたので、私たちは、そのご遺体を安置所がある県立高校の体育館に搬送しました。

その後、萱浜に戻ったところ、先ほどの男性が「また遺体を発見しました。搬送お願いします」と言うのです。

私はご遺体に黙礼して、身元についてその男性に聞いたところ「16歳になる私の次男です。これで私の子ども全員です。町内の人がまだ見つからないので捜しに行きます。今日中に安置所に子どもたちを迎えに行きますから」と言って立ち去りました。

私はただ、ご遺体に合掌をし、丁寧に運ぶことしかできませんでした。

私の実家は、同じ浜通りの双葉町です。

今回の大震災では津波の被害は免れましたが、原発事故の影響で82歳になる母と兄夫婦は、埼玉県加須市に避難せざるを得なくなりました。私は捜索の合間を見ながら、母の避難先を訪ねることにしました。

母たちが避難した場所は、高校の跡地で6世帯から8世帯の家族が、一つの教室で暮らしていました。

母たちは、地元のボランティアの方々によくしてもらっていて、健康に問題はありませんが、食事は毎日おにぎりとかップラーメンでした。

私が帰る際、母は副食用にもらった乾燥バナナの袋を出して「うまいからこれ持っていけ」と言うのです。

勤務していた会津地方は地震の被害がほとんどないので、食糧の心配がないからいらないと断っても、強引に勧められ、結局もらって帰ることになりました。

この時思い出したのが、地震直後のおばあさんの言葉、3人の子どもを津波で亡くした男性の言葉でした。

地震で歩くこともできないのに、助けに行った警察官の心配をするおばあさん、自

分の子ども3人を亡くし、その子どものご遺体を私たちに託し、町内の行方不明者を捜しに行く男性、避難地で警察官の私を心配している母……。私は、はじめのうち「何もしてやれなかった。逆に励まされたり、心配させたりした」と思い、胸をかきむしられるような後悔の念にさいなまれました。同時に、なぜ私にこんなことを言ったのかという疑問はなかなか解消しませんでした。

それから、行方不明者を捜索し、ご遺体を発見していくうちに、私はあることに気づいたのです。

それは「どんなときでも、人は未来を見ている」ということです。

大震災の惨劇は消すことはできない。

けれども、人々が未来に希望を持って生きていくことは大事なことです。

おばあさんは、未来への希望を託する警察官の身を案じ、子どもを亡くした父親は、未来を信じ、まだ生きているかもしれない他人の子どもたち、家族を捜す。彼らは、私ではなく、私の持っている未来に励ましを送ってくれていたのです。

(平成23年8月)

県民の安心のために

高速道路交通警察隊
菅野 泰洋 30歳代

「結構大きな地震だなあ」と思った次の瞬間、大きな横揺れが始まり、携帯電話からは聞いたことのない警報音が鳴りだした。「ガタガタガタ」と大きな音をたててクローゼットから物が落ち、テレビは台から転げ落ち、棚は全て倒れた。このただ事でない様子に、私は身の危険を感じ、アパートの外へ避難した。一瞬ぼうぜんとしたが「参集しなければ」と我に返り、勤務先の高速隊郡山分駐隊へと向かった。

分駐隊へ向かう途中、全ての信号機は停止し、道路上にも壊れた塀や瓦が散乱し通行できない状態であったため、妨げになっている物をどかしながらやっとの思いでたどり着いたのを覚えている。

分駐隊に到着すると私はすぐさま磐越自動車道の各インターチェンジの閉鎖、通行止めと通行車両の一般道への誘導の命令を受けた。

磐越道本線の状況を確認したところ、地震の影響で、路肩や車線上のいたる所に亀



高速道路における規制の状況＝平成23年3月17日、福島市の飯坂インターチェンジ

裂や陥没・隆起箇所があり、到底高速通行は出来ない状態であった。

被害が大きい箇所では、車1台すらも通行出来ないほどの亀裂があり、本線上の全ての車両を移動しなければ、いつ大事故が起こってもおかしくない状態であった。

二次災害が起こる前に、いち早く通行車両に危険を知らせ、高速道路から出てもらわなければという、はやる気持ちで現場に急行している途中、反対車線に立ち往生している車列があるのを見つけた。

この車列は道路の大きな亀裂により通行できないで停止していたもので、

その列は数^キにも及んでいた。運転者たちは車両から降りて、怒鳴り散らしている者や取り乱している者もおり、反対車線の私たちのパトカーを見つけるやいなや「何とかしろよ」「早く通してくれ」と大声を上げた。誰もが経験したことのない状況で現場は混乱していたのである。

現場は橋の上でもあり、さらなる余震により崩れる危険性もあったことから、私たちは道路管理者などと協議の上、中央分離帯のガードレールを取り壊し、反対車線へUターンさせ避難させる措置を講じたことにした。

私たちは緊急工事が終了するまで、本線上に取り残された方に少しでも落ち着いてもらえるよう一台一台声を掛け続けたが、話を聞き入れない者や取り乱したままの運転者がほとんどだった。

しかし、ようやく中央分離帯を取り壊す工事が終了し車両が動き始めた時、どの運転者たちも道路管理者や警察に対しねぎらいの言葉を掛けてくれたのだ。

このねぎらいの言葉は、動揺を隠せないでいた私にとって、大きな励みとなり自身を奮い立たせるきっかけとなった。

(平成23年8月)

安全を守る

高速道路交通警察隊
村越 健一 30歳代

▼道路状況の把握

高速道路交通警察隊の管理係長として、東北自動車道福島飯坂インターチェンジ（IC）にある本隊執務室で勤務していた時、震災が発生した。県内の高速道路は、ただちに道路管理者による通行止めが実施され、高速隊と道路管理者総出による交通誘導と道路状況の把握作業を実施した。

磐越道、常磐道、あぶくま高原道路をはじめ、東北の大動脈である東北道も路面は波打ち、パトカーで走行すると、俗に言う「腹をする」状態で、さらに法面の地滑りが発生し、速度を上げて走行できる状態ではなかった。

▼各種先導誘導

震災に伴う高速隊の活動の中で重要な任務の一つが、先導誘導であった。

東京電力福島第一原発事故の事態収束や、各種活動のために全国各地からさまざま



高速道路における規制の状況＝平成23年3月17日、福島市の飯坂インターチェンジ

な種類の車両が、高速道路を利用して県内に入ったが、それらの先導誘導を高速隊が実施したのである。

なかでも、原発を冷却するために放水する外国製コンクリートポンプ車の先導誘導は印象に残った。通称「キリン」と呼ばれた同車は、とにかく規格外の大きさで、前後をパトカーで挟み、また右左折する交差点や橋では、対向車などの規制を実施した。

活動の場を高速道路はもとより一般道まで広げ、いわき分駐隊長を中心に、入念な計画・実査を行つての先導誘導であった。

世界中が注目する原発事故の収束作業



福島第一原発の冷却に向かうコンクリートポンプ車の先導状況＝平成23年6月21日、いわき市

であり、現場到着の遅れや事故が許されないなか、滞りのない先導誘導を多数回にわたって実施した。

▼緊急交通路の指定

高速道路は、地震直後から通行止めが実施されたが、他の交通機関も被害は甚大で、日本中の人と物の流れが止まった。

東北最南端に位置する本県の交通が止まったことで、北の被災地へ向かう流れに甚大な障害が発生し、その状況打開のため高速道路の早期通行再開が望まれた。

そこで、復旧・救援物資輸送車、災害対策車だけでも通行できるようにと交通規制課主導で高速隊が協力し、県公安委員会が緊急交通路に指定した。

緊急交通路指定後の対応は、警察署が申請受理業務を実施したほか、高速隊は、対象ICでの検問および本線上の警戒を強化し、それら車両交通の安全と円滑を図った。

▼通行止め解除へ

ある程度道路の補修が済んだ段階で、県警は緊急交通路の指定を解除し、一般車も通行出来るようにする作業を始めた。

その検討を進めるなかで、一つの問題が出てきた。それは、県内の高速道路で解除の時期がずれてしまうことだった。

県内の高速道路網は、二つのジャンクション（JCT）などで全てつながっている。そのため解除がずれると、ポイントを設定して検問を実施する必要性が生じる。

そのような情勢の中、常磐道がいち早く茨城県からいわき中央ICまでを解除することとなり、損傷がひどかった磐越道、東北道と解除時期にずれが生じた。

常磐道と磐越道は、いわきJCTで接続している。このため、常磐道を北上して磐越道に入った一般車両を最初のいわき三和ICで流出させる一方、緊急車両、緊急通行車両などはそのまま走行させるという選別検問を本線上で実施することとなった。本線上での検問は、危険なためここ何年も実施していなかったが、一人のけが人を出すことなく無事やり遂げた。

（平成23年8月）

私は警察官だ

機動隊

小針 拓史 20歳代

平成23年3月11日、東日本を襲った未曾有の大震災が起こった夜、地震で灯を失った街が真っ赤に染まった。

緊急車両の通行のため、高速道路は全国から集まった警察、消防車両の赤色灯で埋め尽くされ、けたたましいサイレンが鳴り響く、異様な光景が広がっていた。

そのとき私は、機動隊に所属し、須賀川市の灌漑用水ダム「藤沼湖」決壊現場に向かう途上だった。継続して起こる大きな余震、突然の猛吹雪に、車窓から見える景色は一変していた。鬼気迫る無線が飛び交う中、無事現場にたどり着けるのかさえ不安になるほど混乱した状況だった。

私たちが現場に着いたのは真夜中で、現場一帯に降り積もった新雪が何事もなかったかのように全てを包み隠し、雪明かりがぼんやりとその表面を覆っていた。

翌朝、前日の荒天と打って変わって晴天となったが、太陽の光が被災現場を照らし

出すと壮絶な光景が広がっていた。家屋の基礎だけ残し、流された家が逆さまになっていたり、バラバラに破壊されていたり、ペシャンコになった自動車や、散乱した家財道具、泥まみれで何に使っていたものか分からない残骸が転がっていた。

私は「この状況で生存者がいるのだろうか」とやるせない気持ちでいっぱいになりながらも搜索を始めた。

搜索の途中、若い夫婦が私に「母親が見つからない」と泣きながら話しかけてきた。

母親が住んでいたという家は木造2階建てだったが、1階部分は支柱以外全て流され、2階部分は1本の柱でかろうじて支えられている状態だった。

この夫婦の気持ちに伝えるためにも、自分は強くなければならないと思った。

私も家族、友人と連絡が取れず、今すぐにでも安否を確認しに駆けつけたかった。でも、今日の前で困難にぶつかっている人たちを全力で救おう。

「私は警察官だ」。そう心に決めた。

3日間行方不明者の搜索活動に当たり、重機と連携し倒壊家屋の下に取り残されていたご遺体、ダムから流出した約150万トの水に巻き込まれ、数百メートルも下流に流さ



地震により大きく損壊した道路＝
平成23年3月22日、須賀川市泉田

れていたご遺体を発見した。

そして、この須賀川の現場を皮切りに、命がけの出動が始まった。

東京電力福島第一原発が爆発してすぐ、私は「ホテルに人が残っているかもしれない」との通報により、福島第一原発10^キ圏内の浪江町に向かうことになった。

身に着けた吸収缶付きマスクと放射線防護服の閉塞感^{へいそく}、そして、目に飛び込んでくる被災した町並みに、私は次第に気分が悪くなってきた。

浪江町は、機動隊の原発警戒勤務の際、何度も通る場所だったが、そこには人の気配がなく荒れ果てた街が広がっていた。

マンホールが隆起し、電線が垂れ下がり、陥没、ひび割れの道、そして暗闇。

なんとか、浪江町の現場であるホテルまでたどり着き、余震が続くなか搜索を開始した。

当時は放射能の知識が浅く、また原発の状態や放射線量の情報がほとんど分からない状態だったため、見えないう放射線に恐怖を感じながらも任務をこなしていた。

不気味に静まりかえった街に、自分の呼吸と心臓の音だけ大きく聞こえるようだった。

「私は警察官だ」と心に使命感を燃やし、ホテルの一室一室を丁寧かつ迅速に搜索した。途中強い余震で何度も中断させられながらも、全て捜し尽くしホテルの中には一人も残っていないことが分かったときは、安堵感あんどを覚えた。

帰隊して間もなく、母親から電話があった。お互いや親戚など無事を報告したあと、母親が「原発の近くには行ってるの？」と聞いてきた。

私が「行ってる」と答えると、しばらく間をおいて「そう。覚悟はしてたから。誇りに思う」と言い残し電話を切った。

その後私は、いわき市田人地たびと内の土砂崩れ現場や原発30キ圏内の警戒とモニタリング、安全管理サポート班として搜索現場のモニタリングなどに従事した。

この震災で私は、警察官の誇りと使命感を強く感じた。誰かがやらねばならないなら、その先に出てやるのが警察官だと思う。雨にも負けず風にも負けぬ、力強い存在。

「私は警察官でありたい」

(平成23年8月)

第3章

それぞれの最前線

県警本部、警察学校編

県警察本部（福島市）の各部署は、有事に当たって機動的に対処した。検視、交通、避難所対応、県外応援部隊の誘導など、その業務は後方支援を含め多岐にわたった。そして、湧き上がる復興への希望。大震災を経て、福島県のために立ち上がり警察官となった初任科生の決心も披露する。



オフサイトセンターに詰める本県警察と警察庁職員＝平成23年4月14日、福島市

検視班に従事して

捜査第一課

佐藤

克彦

30歳代

震災発生後から約2カ月間、私は大津波による被害が甚大だった南相馬署管内での検視班員を命ぜられた。

大地震発生時、周りの電線や木々が不気味に揺れ、なかなか収まらなかった。私は家族の安否も確認できないまま、市内あちこちの交通渋滞をかいぐり、何とか県本部災害警備本部が置かれた福島署に参集した。

後輩のMから「浜通りの沿岸部は津波で壊滅的です」「警察官も行方不明者が出ています」と教えられました。

この時、あらためて大変な事態が発生したのだと実感した。

検視班員の集合場所は福島市の県警機動センターだった。

数年前まで捜査第一課検視係に籍を置いていた私は、県警本部の倉庫に大規模災害用の装備資機材が準備されていることは把握していたが、正直言って、それらの資機

材を使うことはまずないだろうと考えていた。

資機材を持って集合場所に集結した時、着の身着のままであることを忘れており、全員が出動服姿である中、私だけがスーツにジャンパー姿であった。

着替えてくるようにとの指示を受け、いったん帰宅したが、自宅までの道路は震災後の降雪により所々凍結し、阿武隈川に架かる橋はあちこちで寸断され、着替えて戻るまでに1時間以上もかかってしまった。

帰宅したとき、妻と2人の息子は無事で、避難先から戻ったところであり、子どもたちは既に寝ていたが、妻は実家の家族の安否確認のため何とか連絡を取ろうと試みていた。

妻の出身地は岩手県沿岸北部の宮古市で、親戚も多く、義妹は隣町の山田町という港町に嫁いでいた。

義妹とは結局10日間連絡が取れなかった。

テレビには無情にも、かつての妻の通学路や妻の両親の実家付近が津波にのみれる映像が流れていた。壊滅的被害であった。

この時の妻の心境はいかばかりであったかと今更ながら思う。



遺体安置所の状況＝平成
23年3月26日、南相馬市

でも妻は気丈にも「気をつけてね」と言って、私を送り出してくれた。

その後、S警部と合流し、南相馬に向かった。

S警部とは、いつも車内でバカ話や管区機動隊時代の話などで会話がはずむのだが、この時ばかりはお互いに口数少なく、南相馬までの道のりがやたらと長く感じた。

私たちが検視場所兼遺体安置場所となる高校に到着したのは、翌日の午前3時すぎだった。

私たち検視班の第一陣が検視場所に到着した時には、既に十数体のご遺体が収容されていた。

集まった検視班員はわずか十数人であったが、夜が明けるところには、県内各署刑事課員の応援部隊、各県警の検視のスペシャリストたちが応援に駆けつけた。

また夜明けとともに、行方不明者の家族が検視場所に大勢押し寄せた。

南相馬署員だけでは対応しきれず、検視班員数人を遺族対応班に転用して対応した。

遺族が自分の肉親のご遺体を見つける度に泣き崩れ、館内にその泣き声が響き渡り、悲しみに包まれた。

震災翌日の午後、S警部から「福島第一原発が爆発した。放射線を浴びないように全員屋内に入れ。遺族も屋内に誘導しろ」との指示を受けた。

検視場所は、東京電力福島第一原発から約25^{キロ}地点であり、その後屋内退避区域に指定された。

空は青空で、当然放射性物質は見えなかったが、この時「もう家には戻れないかもしれない」と死を覚悟した。

(平成23年8月)

気概

捜査第二課

田崎 行州 40歳代

検視班となった私たちは震災当日の夜、装備センターの会議室に集結しました。そして、夜明け前の午前5時30分、私が班長を務める本部4班は双葉署に出勤すること

になりました。双葉署の近くには東京電力福島第一原発があります。検視班の誰もが、正直、不安でいっぱいになったと思います。しかし、その不安な気持ちを口に出す者はいませんでした。私たちは、警察官としての使命感と、検視という崇高な任務を全うする気概のみで覚悟を決め、双葉署に向かうことになりました。

私たち本部4班は、3台の車両に分乗して出発しましたが、間もなく、県本部災害警備本部から私の携帯電話に「行き先が双葉署から南相馬署へ変更になった」との連絡が入りました。しかし、他の班員へ電話をかけても、つながりません。集合場所の南相馬署に着いた私は、他の班員を探しましたが、まだ2人の班員が到着しておらず、メールで呼びかけても返事もなく安否確認もできなかったのです。しばらくして、その2人が既に双葉署へ行ってしまったことを知りましたが、この2人とは、その後、検視場所となっていた高校の体育館で、やっとの思いで合流することができました。当時、何に頼るすべもなく、メールを何度も送り続けるしか方法がなく、連絡がつかない時の不安、情報を伝達することの困難さをつくづく感じました。

いざ検視現場に着いた私たちが見た光景はマニュアルでは通用しない、想定以上の惨状でした。次々と泥にまみれたご遺体が運ばれ、手探り状態で検視が始まりまし



福島第一原発敷地内の状況＝平成23年5月1日

た。検視はご遺体の泥を丁寧^{ていねい}に洗い落とすことから始まり、検案医師の先生とご遺体を所見し、死因を見極め、持ち物や衣類、手術痕などから身元を判明させるものでした。検視を始め、間もなく、不安な表情で行方不明になった家族を捜す人々が集まり始めました。その人々に説明しているうちに、広い体育館も人であふれ出しました。しばらくすると、ご遺体の中に娘さんを見つけて号泣するお母さんや不意の死に立ちすくむ家族の姿、今までに経験したことのない惨憺^{さんたん}たる光景は、誰もが胸を締め付けられるものでした。私たちは、ご遺体を何とか家族の元へお帰^{かえ}りたいと願う気持ちで、着衣を何度も洗い、目を皿^{さら}のようにして、手術痕やホク口などを観察したのです。

検視業務に就いて3日目、突然「バン！」と鉄の扉が勢いよく閉まったかのような音がとどろきました。携帯電話のニュースで「福島第一原発3号機が爆発した」ことを知りました。

すぐさま、地元の防災無線で「屋内や車の中に避難するように」との放送が流れました。当時の検視班は、大阪府警、長野県警、兵庫県警などの県外部隊と私たちの県内部隊との混成部隊でした。退避の指示があるまで体育館内で屋内待機との指示を受けた私たちは、素早く資機材を整理し、いつ退避指示が出されても対応できる体制をつくりました。外は晴れ上がり、妙に太陽がまぶしく、いつもと変わりない光景の中で、時間がとても長く感じられました。爆発の防災無線が流れてから、時が止まったかのように、運ばれてくるご遺体もなく、道行く人影もなくなりました。その場には誰も、ここにいて大丈夫なのかという不安を感じたに違いありませんが、誰一人不満を漏らすこともなく、誰一人逃げ出すこともなくその場にとどまり、ただ寡黙に次の指示が来るのを待ちました。福島県警だけでなく、全国警察の士気の高さ、使命感の強さを目の当たりにした瞬間でした。

ある日、現場を確認するため、国道6号線を原町区から鹿島区へと車を走らせたこ

とがありました。いつもなら穏やかな田園風景であったはずなのに、水田にはがれきとともに何隻もの船が流れ着き、変わり果てた田畑が広がっていました。全ての集落が消えてなくなっていましたし、いつもなら集落で見えない太平洋が一直線に見えました。その様子を見た誰もが息をのみ、干潟と見間違えてしまうような惨状でした。私は警察官を辞しても、目に焼き付けたこの光景は、一生忘れることはないと思います。

(平成23年8月)

警察官の覚悟

機動捜査隊

渡部 文武 20歳代

東日本大震災に伴う原発事故により、私は初めて「死」と向き合い、警察官の「覚悟」というものを実感した。

本来であれば「使命感」と言うべきところだろうが、大津波による甚大な被害を目



福島第一原発から10*₀圏内の放射線量計
測状況=平成23年4月3日、浪江町請戸

の当たりにし、世界を震撼させた東京電力福島第一原発事故を前に立ち向かった本県警察官は、「使命感」というよりも様々な「覚悟」を決めて任務に当たったように思う。福島第一原発1号機の爆発。絶対の強度を誇るはずの原発建屋が爆発したという事実は、絶望以外のなにものでもなく、その後も刻一刻と悪化する原発の状況は「核爆発」という最悪のシナリオを想像せざるを得なかった。

その翌日も南相馬市に行くことになっていった私は、その夜初めて真剣に「死」と向き合っている、残された子どものことを考えると全く眠ることができなかった。

しかし、警察官である以上、逃げ出すわけにはいかず「覚悟」を決めるしかなかった。

余談ではあるが、翌朝、持っていた預金通帳やカードなどを妻に全て渡し、私が殉職してからのこと、遠くに避難することを話し、今生の別れをして涙ながらに家を出た。

しかし、携帯電話を忘れてすぐに帰宅、涙の別れの数分後に無事生還し、笑顔で再出勤できたのは忘れがたい思い出である。

原発事故後、翌日から検視の支援班として活動していたが、3月28日に県本部災害警備本部の放射性物質対処班に「安全管理サポート班」が立ち上げられ、以後同班において約3カ月間活動することとなる。

安全管理サポート班は当初、エックス線作業主任者の資格を有する者が班長となり、3班編制で運用された。

同資格を有していた私は1班の班長として、機動隊員2名と任務に当たることとなった。

安全管理サポート班の任務は、一言で言えば警察活動の安全安心の確保である。

当時は、私も含め、現場の警察官の放射性物質などに関する知識は乏しく、目に見えぬ放射線は脅威であった。また、報道では放射性物質等に関する単位や用語が次々と出てきたため、一層の混乱を招いたようにも思う。

安全管理サポート班の目的である安心の確保には、現場における説明が必要であり、当然放射性物質等に関する知識が必須だった。

任務に当たると、まずは関係知識を身につけることから始めた。

原発から10_キ圏内は、津波で町の様子が一変し人影もなく、動物が闊歩^{かっほ}する異様な光景であった。それを目の当たりにすると「これが先進国日本の姿か」と放心するばかりであった。

そのような状況の中、毎日多数のご遺体のスクリーニングを行い、高線量地域のモニタリングを続けていたため、班員が精神的に参ってしまう心配があった。

そのため、精神的に落ち込まないよう気持ちを奮わせ、不謹慎であるかもしれないが、現場以外では努めて明るく振る舞うことにしていた。
(平成23年8月)

無理はするな。

でも後悔もするな

警備部

菊池 達也 20歳代

3月11日に発生した「東日本大震災」から約1カ月後の4月13日、私は安全管理サポーター班員として、東京電力福島第一原発から約7_キに位置する浪江町請戸地区で放

射線量の測定を行っていました。

漁港の町として栄えたこの場所は、津波による被害でがれきの山と化し、打ち上げられた船や倒壊した家屋からは、元の町並みを想像することは難しく、目の前に広がる光景に、私は大きな衝撃を受けました。

私が従事していた「安全管理サポート班」は1班3人の6班編制であり、計18人で構成されていました。

勤務内容は、福島第一原発から半径10^キ圏内の放射線量の測定、捜索で発見されたご遺体の線量測定などが主な任務でした。

私たちサポート班は、捜索の前日に、県本部災害警備本部に招集され、勤務内容の説明を受けました。

その際「ヨウ素剤を配布しますので、何かあった時は服用してください」と指示され、ヨウ素剤が配布されました。万が一の場合に備えて配布された物であることは説明を受け理解しましたが、私自身多少の動揺があり、「自分に何かあった時はどうなるのだろう」という考えが、瞬時に頭をかすめたことを覚えています。

私は昨年5月に入籍し妻と2人で暮らしております。大げさかもしれませんが勤務



福島第一原発周辺の放射線計測状況
＝平成23年9月7日、大熊町夫沢

の説明を受けたその時は「自分が死んだらどうなるのだろうか?」「家族、そして妻を悲しませたくない」などという考えが頭の中をぐるぐると回っていました。

私と妻にとっては、これから子どもを授かり、幸せな家庭を築いていこうと考えていた矢先の大震災であり、今回の原発から10^キ圏内での活動も合わさって、正直なところ、子どもができなくなったりするのではないかと真剣に考えてしまったのを覚えています。

そのようなことを考えていましたので、10^キ圏内に入ることには妻に言えませんでした。

自分の頭の中では、放射線量も低く、心配はないと分かっておりましたので、問題ないのであれば心配させるようなことをわざわざ言う必要はないと考え、自分に大丈夫だと言いつけさせることで不安を解消させて現地に行きました。

災害警備本部で勤務の説明を受け帰宅した後、考えないようにしても、大丈夫だと言いつ

かせても、それでも不安な気持ちはつきまとい、その日はなかなか眠ることができま
せんでした。

ほんやりと家族のことを考えていると珍しく父親から電話がかかってきました。

父は何かを感じ取ったように、私に対し「どうした？ 今はどんな勤務をしている
んだ？」などと聞いてきた後に「大変だろうが、後悔しないように頑張れ」と言っ
てきました。

私が警察官を拝命した時にも、父は同じことを言ったのを覚えていました。

私は父にだけ、明日から原発10^キ圏内に入ることを説明しました。

父は私に一言だけ言いました。「無理はするな。でも後悔もするな」。

4月13日、搜索初日のその日は、雲一つない青空が広がっており、集合場所である
浪江町役場の桜が満開に咲いており、とてもきれいだっただのを覚えています。

思えば、震災後は桜など見る余裕もない日々が続いておりましたので、とてもきれ
いに感じたのかもしれませんが。

私自身は白いタイベックスーツ（放射線防護服）にマスク、ゴーグル着装という通常
では考えられない重装備であり、周辺の家屋や店舗にも人の姿はなく、異様な光景で

あったのにもかかわらず桜をきれいに感じたのです。

また、例年であれば桜の季節は人でにぎわうであろう場所には、放射線から身を守るための装備を調えた警察官しかおらず、その通常では考えられない光景が逆にもうすぐ現実的に感じられました。

思えば私は震災の中に身を置きながらも、あまりにむごい震災の現実と、自分がしなければならぬことから逃げていたのかもしれない。

前日の夜に父から言われた「無理はするな。でも後悔もするな」という言葉と、現実起こった震災、それによる被害の光景が、私に警察官としての誇りと使命感を再認識させてくれたのかもしれない。

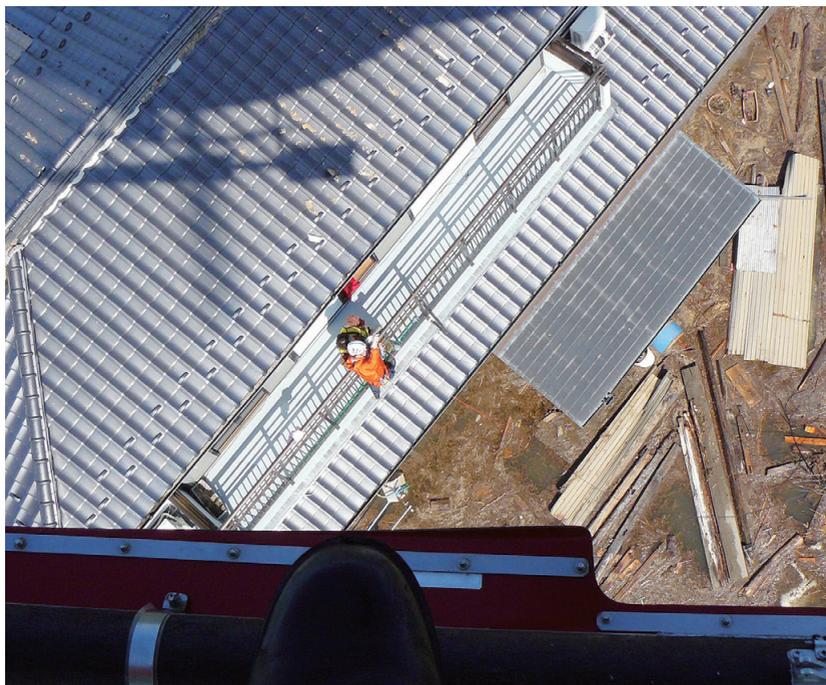
(平成23年8月)

県警へリ「あづま」

地域安全課

齋藤 明人 30歳代

3月11日、県警へリ「あづま」に搭乗していた私は、南相馬署管内での任務を終了



福島県警ヘリによる救助作業＝平成23年3月12日、南相馬市

し、南相馬市原町区の野馬追祭場地を離陸しました。

離陸して数分後の14時46分、南相馬市上空で私の目に入ってきた状況は、付近一帯の樹木から、突然上空に立ち上り広範囲に飛散した黄色い花粉でした。黄砂が降ってきたように地表付近の空気の間が、黄色い空気の層で覆われていました。まだ、この時は地震があったとは、機内にいる誰もが気付いていませんでした。そして「あづま」乗組員の携帯電話から流れる緊急

地震速報のけたたましい着信音および警察無線からの地震情報などで、本県で震度6強の大地震が起こったことを上空で知りました。

ただちに「あづま」は、地震による被害情報収集のため、福島第一原発北側の浪江町請戸付近から相馬市磯部付近までの海岸線を北上しました。まだ、津波到達前だったので、地震被害のみで、海岸沿いの各集落では、多くの家屋の瓦が地上に落下しているものの倒壊家屋は数棟でした。海岸沿いで崖崩れを数カ所確認し、私は輻輳ふくそうしている警察無線の合間を縫って、被害状況を県本部災害警備本部に連絡しました。警察無線を傍受していると、浜通りを中心に被害が広範囲に及んでいることが分かりました。そして、相馬市磯部付近上空で被害情報収集をいったん終了し、燃料補給のため県警ヘリポートに15時40分着陸しました。この時、津波が押し寄せ多数の尊い人命を奪い、甚大な被害が発生しているとは思いませんでした。

そして、再び19時15分から21時25分の夜間に、いわき市から南相馬市鹿島区までの間を火災被害情報収集のため飛行。私が見たものは、延焼中の火災現場と、月明かりにより浮かび上がった海岸沿いの津波による冠水地域でした。

一夜明けた3月12日に県警ヘリ「あづま」に搭乗し県警ヘリポートを離陸し、原発

事故に伴う避難広報と被災者捜索のため相双方部に向かいました。被災地は昨日の昼間の状況とは一変していました。特に、南相馬市鹿島区付近は津波による被害で広範囲な冠水地域が出現していました。また、原発の事故による避難指示も出ていたことで、被災地の状況は昨日より悪化していました。被災地上空では、多数の報道ヘリや他機関のヘリが飛行している状況でした。本県警察においても、他県警からヘリ4機の派遣を受け5機体制で災害警備に対応することになりました。

上空から被災地を見ると、沿岸部付近の標高が低い場所では、津波によりほとんどの家屋が跡形もなくなり、周りに海水が流入し冠水していました。また、家屋が津波にさらわれて、元あった場所から別の場所に流されていたり、漁船やがれきなどもあちらこちらに流されて散乱している状況でした。私は惨状を見て、自然災害の怖さと人間の無力さをあらためて実感させられました。

このような状況下で冠水地域を重点に被災者の捜索を行ったところ、鹿島区北屋形付近で、家の2階ベランダから手を振って救助を求めている老夫婦を発見しました。この時、警察無線から余震による大津波警報が出ている旨を傍受していたので、ただちに特務隊員1人を2階ベランダ付近に降下させて無事2人を救助することができま



福島県警ヘリによる上空からの捜索活動＝平成23年6月16日、相馬市

した。迅速な救助が求められ、狭いベランダからの吊り上げという困難な状況下で、乗組員と特務隊員との意思疎通を図りスムーズに連携した結果、2人を無事救助することができ、このことは私たち乗組員などにとって被災地での喜ばしいひとつの活動になりました。

同日15時00分、県警ヘリポートを離陸しました。この時の任務は、双葉署管内に放射線防護服などの物資を空輸することでした。双葉高校のグラウンドでヘリから物資を荷下ろししている最中に、警察無線が騒がしくなり、15時37分頃、東京電力福島第一原発で爆発が起きた旨を傍受しました。私たちは、物資の荷下ろしが終了すると、ただちにグラウンドを離陸しましたが、すぐに無線で福島第一原発の状況確認の指令が入りました。その時の乗組員の

心境は、見えない放射線の恐怖より、早く原発の状況を確認しなければという使命感に駆られていたように思われます。福島第一原発から約4^{キロ}付近の上空から原発を確認すると、1号機建屋の鉄骨がむきだし状態になっており、その上空の煙が南寄りの風により南側から北側に流れていました。このときになって初めて、福島第一原発の1号機建屋が爆発したことを確認しました。そして、15時47分頃、この状況を警察無線で連絡し、別任務に備えるため現場を離脱しました。

(平成23年8月)

免許センターでの 被災

運転免許課

森山 精一

50歳代

3月11日午後2時46分、私は、郡山免許センター2階学科試験室で当日の試験合格者220人に対して合格時講習を行うところで、まさに壇上に上って第一声を発しようとした時でした。これまで経験したことのない、すさまじい揺れに襲われ、部屋内

のあちらこちらから「キャーッ」という叫び声が聞こえ始めました。揺れは衰えるどころかますます激しくなり、私は全員を外に避難させることにしました。出入り口の左右に開くドアは、激しい揺れによって自動ドアのように開閉を繰り返していました。部屋から出る際、パニック状態になるのではないかと心配したのですが、さほどの混乱もなく、なんとか全員を建物の外に誘導することができたのが幸いでした。

その後、免許証の交付はできたのですが、教習所や家族の迎えの来ない約100人が帰宅できずに免許センターに取り残されました。そのため、迎えに来てもらうことができない人の宿探しをしたり、暖房の切れた部屋にストーブを用意して待機所を準備したり、余震の揺れに恐怖を感じる人のために駐車場にもマイクロバスを準備して待避所とするなど、手分けして帰宅困難となった人たちへの対応に当たりました。

旅館、ホテルなどのほとんどから「地震の被害を受け、客を受け入れることはできない」と断られるばかりで、宿泊出来る場所がなく苦労しました。

結局、全員が家族の元に帰宅できたのは、地震発生から約8時間後の午後11時を過ぎていました。

センターの建物内は、表示板、ロッカーなどが倒れた上、運転免許証を作成するた

めのカメラ(100キ以上もあるかと思われる)も横転して惨憺さんたんたる状況でした。さらに駐車場、実技試験や教習に使用する運転コースの路面は、液状化を伴う亀裂や地盤沈下があちらこちらに発生し、使用不能の状態になっていました。

さらに悪いことに加入電話も警察電話も県北方面との通話が全くの不通状態となり、福島免許センターとの連絡が取れず指示を受けることが出来なくなっていました。時期は折からの繁忙期、免許更新などの手続きの他、学科試験の受験者が毎日300人ぐらい押しかける時でしたから、電話による問い合わせの多さはすさまじいものがありました。

通常、1日100件前後の問い合わせ件数がありますが、震災後は1日中電話が鳴りっぱなしで、300件以上、400件にも達することがしばらくの間続きました。これにより、毎日数人が電話オペレーターのように電話対応に当たらなければなりませんでした。

結局、福島センターとのやり取りは、直接人が出向く方法しかなく、この通信技術の発達した時代に、福島センターと郡山センター間約60キを直接出向いて連絡をとらなければならないとは、いささか情けない話であると感じたと同時に、緊急時に連絡

のとれないことは大変な問題であると痛感しました。

(平成23年8月)

災害警備本部

交通班の活動

交通企画課

根本 栄太郎 50歳代

大地震発生当日、突然建物内の揺れを感じ、紅葉山公園に避難しました。その後、福島署に設けられた県本部災害警備本部に移動し、無線機から県内各地の被害状況を傍受中「大津波発生、高さは10メートル以上」との無線にただ驚愕きょうがくし、全身から脂汗が流れ出ていました。

夕刻から夜間にかけて、東京電力福島第一原発の非常電源機能故障の連絡が入り、各地に電源車が手配され、速やかに福島第一原発、第二原発に誘導するため被災地を通つての誘導手順に、胃が痛くなるような緊張感を覚えながら従事し、まんじりともせず夜明けを迎えました。

翌日になると、津波の甚大な被害が徐々に判明するとともに、その後、発生した福



立入禁止区域の検問状況＝平成23年8月12日、南相馬市原町区

島第一原発での水素爆発、半径20^キ圏内の住民への「避難指示」「屋内退避指示」の発令など、原発事故対応が県警の大きな命題になっていきました。

そのような中、災害警備本部交通班の活動は、全国からの広域緊急援助隊受け入れ対応と、30^キ圏検問活動への対応、警戒区域設定に向けての準備作業、県内道路損壊箇所での交通規制、大型ポンプ車の先導などの対応に大わらわで、昼夜にわたって多忙を極めました。

4月22日、ようやく政府から警戒区域設置の発令がありました。交通班はバリケード設置と検問所通過の車両規制、各検問ポイントへの県外部隊員の先導・案内に明け暮れましたが、検問所通過の是非に関する検問部隊からの問い合わせや他機関とのやり取りには、マニュアルにない真剣勝負が続きました。さ



立入禁止区域の検問状況＝平成23年4月6日、樫葉町

らにバリケード設置に向けた土のう作りや、各ポイントの封鎖作業など苦労の連続でした。災害警備本部員として役割の一端を担っているという自負心を全員が感じて任務に邁進まいしんしていました。

検問部隊もそれまで実施していた30キ圏から変更し、20キ圏内での検問活動を開始しました。ある部隊の大隊長は「今回は搜索活動のような地元住民に感謝される任務とは違い、地元住民の立ち入りを規制することとなる難しい活動なので、心して勤務してほしい」と訓示していました。検問の真意をよく理解した隊員の真摯しんしな姿勢が、通行を制限された20キ圏内の住民からも理解と共感を得られる結果につながったことに間違いはありません。

(平成23年8月)

ひとつでも多く、 被災者の元へ

会計課

霜山 裕樹 30歳代

震災が発生した当初、会計課は県本部災害警備本部の装備班へ入り、物品の調達や搬送業務に従事していましたが、その後、被災現場から毎日大量に届けられる金庫などの拾得物(落とし物)の対応が問題となり、私は、警察署でこれらの整理に従事することになりました。

警察署に届けられる物件は、金庫や現金、バッグ、財布、時計、貴金属など多岐にわたりました。

それらのほとんどは津波にのまれたために泥だらけの状態で、持ち主と思われる住所や氏名が書いてあっても、なかなか判読できないような状態だったため、まず泥を洗い流し、きれいな状態にすることから始めました。

紙幣を一枚一枚洗うのは、時間も人手もかかりますが、何とか早く持ち主に返して喜んでもらいたいと思いますながら作業を進めました。



拾得物を洗う警察職員＝平成23年4月23日、南相馬署



拾得物を確認する警察職員＝平成23年4月23日、南相馬署

拾得物のほとんどは、警察のほか、自衛隊や消防などの捜索部隊から持ち込まれる物で、多い日には一日に100件以上も持ち込まれました。このため、署員と会計課員だけでは足りず、警察学校や本部の他課、さらに警視庁などからも応援を受け、処理を進めました。

私は主に南相馬署に応援に行っていましたが、南相馬署では、駐車場の脇にある車庫が作業場となっていたため、警察署に遺失届を出しに来た被災者が、私たちの作業を近くまで来て見ることもたびたびありました。

私が声を掛けると「家を流されてしまった」という方がほとんどであり、中には何度も警察署を訪れ、私たちの作業を無言でじっと見ていたり、亡くなった家族を思い出しているのか涙を流す方もいました。



捜索中に回収された拾得物＝平成23年5月15日、浪江町請戸

私は、そんな姿を見るたびに「まだ見つからないんですか」と言われているような気がして心苦しく、無言で作業を続けるしかありませんでした。

泥だらけの拾得物の処理には時間がかかりましたが、私は被災現場の捜索に行くことができなかったため、捜索部隊が回収したこれらの落とし物を、できることなら全て被災者の元へ返してあげたいと思っていました。

持ち主が特定できて連絡すると、遺品が見つかったことを喜び、涙を流す方や「なくなったものが見つかった。ありがとうございます」「お金がきれいで驚きました」と言って感謝してく

れる方もおり、少しでも力になれたことを、今では本当に良かったと思っています。

(平成23年6月)

被災遺族に接して

教養課

平野 敏行 40歳代

「こんなん、わがつか！」

「こんなになつて、誰が誰だが、わがんねーべえ」

「おめえ、わがんのがあ！」

これは、遺体安置所の警察官に向けられた遺族の言葉です。

生前の面影はなく、すっかり変わり果て、ひつぎに入れられ、安置されたご遺体を目の前にした遺族から発せられた「やりきれない、やり場のない悲しみ」と「やり場のない悔しさ」は、身元の特定のため一生懸命に努力している警察官に向けられました。

当然、その遺族自身も「警察に文句を言ったって…」とは百も承知で、それでも怒鳴り散らすしかなかった、惨劇における人間の切ない声を聞いた瞬間でした。

私は震災直後から、捜索班や遺体収容班として被災現場で活動してきましたが、何よりも重く心にのしかかり、忘れられない出来事となったのが、約2カ月間に及ぶ遺族対策班としての活動でした。

ご遺体の多くは泥にまみれ、かつての面影が消え去るまでに傷んでおり、中には、男女の別すら分からなくなってしまうたご遺体もありました。

検視班は、これらのご遺体に向かうに当たり、心から礼を尽くし、ひたむきに丁寧に洗浄し「早く家族の元に帰してあげたい」「何か手掛かりはないか」との思いで細心の注意を配りながら、身元の特定につながる手掛かりを、懸命に捜していました。

まだ3月中旬、浜通りにすら雪の舞う寒い季節に、冷え込む検視場所で、冷たい水と、寒さと、目に見え鼻に感じるものの切なさ、つらさと戦い、黙々と検視を行うその姿には、本当に頭の下がる思いでした。

また、遺族は、家族を早く見つけたい、早く連れて帰りたいとの思いで、毎日、あるいは数時間おきに、さらにはご遺体が運ばれるたびに、安置所を訪ねて来ては、つ



身元確認のための資料収集状況＝平成23年4月11日、南相馬市

らい確認をしていました。

私たち遺族対応班は、そのような検視班の思い、遺族の思いを胸に、託されたご遺体を遺族の元の間違いなく帰すという使命感のもと、懸命に活動を続けていました。

私たちは活動を通じて、たくさんの遺族の悲しみの対面に立ち会ってきました。

長年連れ添った妻のひつぎのそばで「わりがったな」とポソリと口にし、唇をかみしめて立ちつくし、ご遺体を見守る初老の男性の姿。乳飲み子のご遺体の入った小さなひつぎの前で「だっこしたい、だっこしたい」と言葉にならない叫びとともに泣き崩れ、何時間もの間、ひつぎに寄り添い座り込む20代の母親の姿。

がれきの中から自分で見つけ出した母親を確認に来た息子が、ひつぎに入れられた母親のご遺体を前に「こんなにきれいにしてもらったんですか」と涙

を浮かべ優しそうな瞳で立ちつくす。妻と乳飲み子を亡くした20代の若い父親が、やっと見つかった我が子の顔に大粒の涙を落として「これでやっと、一区切りができました」と言ってほほ笑む。

こういう方々を目の前に、遺族対応班として、どんな言葉を掛けたらいいのか、どのような慰めができるのか、誰も分かりませんでした。

私たちは、ただただ安置所を訪れる遺族に対し頭を下げ、ご遺体、写真、着衣などを確認する遺族があれば同行して手助けし、現在の捜索状況を説明し、遺族の要望があれば親身に聞き入る。帰る際には全員が起立し、帽子を取って頭を下げることでご遺体、遺族への礼を尽くすことに徹してきました。

ですから、冒頭に記した被災遺族の心の叫びを耳にしたとき、大変ショックでした。心の中で「そんなこと、遺体安置所の警察官に言われても…」が正直な気持ちでした。しかし、そのときの警察官は、一言も口答えせず、怒鳴り散らしている遺族の目前で、頭をうなだれ、背中を丸くして、罵声を受け止めていました。おそらく、その警察官に限らず、遺族対応班として従事していた警察官であれば、誰でも同じように耐え忍んでいたことと思います。

毎日訪れる人に掛ける言葉もなく、絶望を背負った何百人もの姿と毎日接すれば、またその絶望の思いに比べれば、そして少しでも気が済むのなら「何でも私たちに言ってください」と自然に思えてきたからです。

罵声を口にした60代の男性遺族は、この後も何度も安置所に足を運び、結果的に数人の親族のご遺体を確認し、引き取って行きました。

この男性も、当初からは別人と思えるような穏やかさが見受けられ、とげとげしい気持ちの表れが柔らかい姿勢に変わりゆく感じが見て取れました。そして、最後の親族のご遺体を引き取る時には、親族全てが深々と頭を下げる中、この男性が丁寧に「いろいろとありがとうございます。大変お世話になりました」と言って安置所を出て行く姿になぜか、救われました。

この大震災を通じて、さまざまな人々の人間としての心の「弱さ」「優しさ」「温かさ」を知り、弱いからこそ、無力だからこそ、助け合い、かばい合い、協力し合うことが求められ、人間としての惻隱そくいんの情を育んでいかなければいけないと感じるとともに、警察官として頑丈な防波堤になればと思います。

(平成23年9月)

県外部隊に見た 警察の神髄

情報管理課

赤石沢 千昌 50歳代

子どものころ「福島県は自然災害の少ない県である」「磐城の国は地震に強い」などと教えられて育ってきたので、福島県でこのような大きな地震が起きるとは、正直、みじん微塵も思っていなかった。

自宅から非常参集するため、携帯電話で勤務先や家族に連絡を試みたが、全くつながらなかつたので、そのまま車に飛び乗り、勤務先のある県庁へ向かった。途中、停電で全ての信号機が停止しており、国道13号線は大渋滞していた。2時間近くかかって県庁へ着いたが、県庁は倒壊の恐れがあるとのことで入ることが出来ず、県本部災害警備本部が設けられた福島署へ参集した。

私は、情報管理課員であったことから後方治安要員になるのだろうと思っていたが、災害警備本部の広域緊急援助隊の無線指令班を命ぜられた。

この班の任務は、全国各都府県警から応援に来る広域緊急援助隊に対し、現場まで



介護施設入所者を避難させる警察官＝平成23年3月20日、南相馬市

の地理案内や災害警備本部から発する任務指示などを無線で指令するというものであった。

地震当日から勤務を始めたが、その翌日、テレビ画面に映っていた東京電力福島第一原発1号機が水素爆発を起こしてしまった。

テレビ画面を食い入るようになっていたが、原発が爆発したという非現実的な映像を見たとき「あー、これで福島県は終わりだな」と漠然と思った。

しかし、その後原発近くの病院や老人ホームから、患者や職員を安全な場所へ搬送するという極め

て危険な任務が待ち受けていた。その任務を各県から応援に駆けつけた広域緊急援助隊へ指令する——これが、我々の任務であった。もちろん、本県の部隊も現場で活動していたが、広域緊急援助隊無線指令班は、その過酷な指令を他県の部隊へ出さなければならなかった。その時点では、原発の爆発でどれほどの放射能が漏出しているのか分からず、漠然と危険だというだけであったが、現場で活動する部隊員の不安は相対的なものであったろう。

しかし、どの部隊も不平一つ言わず現場に向かい、黙々と任務を遂行してくれた。いったん南相馬の病院まで戻った部隊に、さらに「原発近くの病院へ戻って残りの人員を搬送せよ」との命令を出す時は、心が張り裂けんばかりの思いで指令したことを覚えている。だが、この部隊は不平一つ言わず指令を聞き入れ、再び原発近くまで戻って取り残された人たちを搬送してくれた。私はこの部隊に、警察の神髄を見た気がした。

(平成23年8月)

技術職として

科学捜査研究所

飯塚 達也 20歳代

警察職員1年生としての締めくくりとなる3月も半ばにさしかかったころ、研究所で焼損物の鑑定中に感じた揺れが、それからの数カ月をがらりと変えた。

震災に対応するため研究所にも数々の任務が与えられた。私はその中で検視補助業務に加え、死者データベースの操作、遺族・死者間のDNA照合作業を担当することとなった。

検視補助業務は、主としてご遺体に付着した放射線量の測定、ご遺体から採取された資料の適切な管理、そして検案医師の活動の補助であった。それまでご遺体を見たことすらなく、顔を青白くした私を気遣いながら黙々と作業を続ける警察官が、私にはとても大きく見え、足手まといにしかなくていけない自分に立ちと焦りを感じていた。

震災から半月ほどたったころから、私の業務に死者データベースの登録・管理が加

わり、5月ごろからその仕事に専従することとなった。ここでは検視の結果を死者データベースに登録し、求めに応じて必要な統計を捜査面に還元するのが主な仕事であった。「君のパソコン操作の能力が本部に評価されたのだから、精いっぱいやってきなさい」と激励の言葉を受け、その意味をかみ締めながら、およそ2カ月にわたる本部での業務に就いた。

データベースには、ご遺体の特徴、着衣や所持品の情報、身元が判明すれば氏名や住所を入力するが、まだ幼い犠牲者を登録するケースもあり、とても心が痛んだ。そんな中で自分にできるのは、データを正確に登録して、ご遺体を一日も早く遺族の元へお帰しすることだと思ひ、ひたすら入力を続けた。

5月に入ったころ、これまでの仕事に加えて県警ホームページ掲載用の身元不明遗体リストの作成に携わることとなった。作成したプログラムは、前述の死者データベースから身元不明遗体を抽出して、遺品の写真を添付するまでの操作を自動化した程度で、手探りでこしらえたものであった。当初は動作不良が多く、ちゃんと運用できるか心配しながらも、関係担当者との打ち合わせを重ねて本運用にまでこぎ着けた。

後日、慣れないマウスを握りながら身元不明遺体リストで家族を捜すおばあさんの様子がテレビで放映されていた。「家族を捜し出したい、でもできれば生きてほしい」というおばあさんの言葉から、リストを活用してもらえた喜びと、ご遺体で見されたことを遺族に伝える心苦しさとが交じった複雑な感覚を覚えた。

現在は、この身元不明遺体リストをベースに東北3県のご遺体リストを組み合わせた「つむぎプロジェクト」で、統合的な検索が可能になっている。ご遺体を捜す遺族に向けて、心の復興への手がかりになればと思う。

身元不明のご遺体と行方不明者家族との照合手段としてDNAによる家族鑑定が挙げられており、7月下旬から3県にまたがる照合作業が始まった。私はこの作業で検索用コンピューターの保守・管理を担当することになった。導入による効果に期待が寄せられる。

(平成23年8月)

被災直後の 心のより所に

県民サービス課
神尾 直子 30歳代

巨大地震が発生した時のことを思い出そうとすると、まず頭に浮かんでくるのは、キャビネットが倒れ、書類が散乱し、壁にひびが入ってしまった執務室から避難して、駐車場で待機している間「大変なことが起きてしまった。一体これからどうなるんだらう。これから私は何をすべきなんだらうか…」とずっと考えていたことです。

地震発生の10日後、その答えを出せないまま、私は県内各地の避難所を回って被災者支援を行う「避難所対応班」の班員としてその業務に当たることとなりました。

避難所対応班は、女性警察官を中心とした県警本部員、被害者支援室員そして他県警からの応援派遣部隊から成り、2～4班を編成してそれぞれが一日に2～3カ所の避難所を毎日巡回するというものです。活動内容は、被災者から相談や要望を聞き取り、警察が対応すべき相談や要望については適切に説明するとともに、その他の要望などについても関係機関を知らせたり、施設管理者に伝えるなど確実に引き継ぎを図

るというものでした。そしてこの活動の目的は、被災者のさまざまな不安を軽減することによって「心のケア」を行うことでした。

しかし、活動を開始したばかりのころ、班員から「被災者の『心のケア』が目的というけれど、私は警察官でカウンセリングの専門知識は持っていない。正直なところ何をすればいいのか分からなくて不安」と打ち明けられました。

私は普段、被害者支援室の心理カウンセラーとして、事件や事故の被害者に対して直後の危機介入やカウンセリングを行っています。私も、被災者支援を実際に行うのは今回が初めてでしたが、犯罪被害者も自然災害の被災者も、非常に大きな心的衝撃を受けたことから生じるその後の心身の反応や、周囲の望ましい対応方法には共通点が多いということは知っていました。私が避難所対応班になったのは、臨床心理士として被災者に直接対応することに加えて、そういった知識を班員に伝えることで不安を軽減し、本来の力を充分に発揮できるように支えるためではないか——そう考えると、地震直後からずっと考えていた「自分がするべきこと」が少し見えてきたように思えました。

そこでまず、国内における被災者支援の第一人者に相談し、被災者の心の状態や回

復について説明した資料を作成しました。それを班員から被災者一人ひとりに配布したほか、警察署を通じて県内の各避難所に掲示しました。

次に、専門知識を踏まえて、班員に対して被災者の心理的な反応や、被災者に接する際の基本的な留意点を説明しました。なかでも私が最も伝えたかったことは「警察はこのような災害発生時に県民から最も信頼される組織の一つであり、また、日頃から犯罪被害者に接しているため、同じように心に傷を負った被災者の支援を担えるだけの職業的下地を既に充分備えています。自信を持って対応してほしい」ということでした。

班員は、活動前には何をしたらいいのかと迷いを抱えている様子でしたが、実際に避難所で被災者と接するときには、その迷いや不安など微塵みじんも感じさせず、被災者一人ひとりの話に真剣に耳を傾け、出来る限りのことをしようと真摯しんしに向き合っていました。その姿を目の当たりにして、まさに「県民とともにある力強い警察」を見た思いでした。

活動を開始して1カ月ほど経過すると、行方不明者や運転免許証の再交付に関する問い合わせなど、いわゆる警察業務に関する対応は少なくなっていく、家族を失った



本県職員による避難所での対応＝平成23年3月26日、田村市

悲しみや絶望、将来に対する不安など、警察として解決策を提示することができない内容の話が多くなっていました。このころ、班員は避難所からの帰りの車中で「ただ話を聞くだけで、何もしてあげられない。何の役にも立てない自分が情けない」と

落ち込んだ様子で話すのでした。私は「警察官の存在そのものが被災者に安心感を与え、そして何より、警察官が何度も避難所に向いて、ねぎらいの言葉を掛け、少しでも役に立ちたいと一人ひとりの話に真摯に耳を傾ける姿勢が被災者の支えになると思う」と伝えました。

実際に被災者からは「警察官に話を聞いてもらって安心した」「私と同じように、話を聞いてほしい」と思っている人は大勢いると思う。こういった活動は続けてほしい」「避難所に来て3週間になるが、私の話をじっくり

と真剣に聞いてくれた人はいなかった。他の人に話をするだけでこんなに気持ち晴れるとは思わなかった。機会があれば、また来てほしい」といった感謝の言葉が多く寄せられ、迷ったり不安を感じながらも行った私たちの活動は、大切なものを一気に失ってしまった被災者の最初の心の支えになれたのではないかと思っています。

私たちが避難所を回り始めた被災直後は、ガソリンもなく、道路は寸断され、高速道路も一般車両は通行できないなど、ボランティアが避難所にたどり着くまでには時間を要したと思います。そのような状況において警察は、業務として被災後早期に、かつ広域にわたる組織的な支援ができる数少ない職種なのだということをあらためて実感しました。

(平成23年8月)

家族と被災者からの期待

県民サービス課

渡部 博之 30歳代

ようやく揺れが収まって外に出た私は、すぐさま県本部災害警備本部が設置される

ことになった福島署の4階で机や無線機、警察電話の設置を行いました。設置したばかりの無線のスピーカーからは、次々と耳を疑うような悲惨な被害状況が伝えられてきて、私はぼうぜんと、そして愕然がくぜんとしながら災害警備本部の中で過ごこしました。今、私の当時の行動を思い返しても、不思議とその時の記憶がないのです。それほど、今回の大震災は未曾有のもので、誰しもが経験したことのない、未知の出来事だったからにほかならないと思います。

その後、私は他県部隊の受け入れを行う受援班や行方不明者対応班を命ぜられ、4月からは、避難所で避難生活続ける被災者の方の悩み事や要望などを聞く避難所対応班に就くことになりました。当時県内には、避難所が500カ所を超え、避難者数は5万人以上にも上り、他県部隊の応援をもらいながら、連日避難所に足を運び、被災者の声を聞くという活動を続けていました。

被災者の多くは、津波で自宅を失い、さらには東京電力福島第一原発事故の放射能の影響で避難を余儀なくされている方々であり、やり場のない怒りや、いまだ収束する見通しのつかない原発事故に対する不安を私たちにぶつけてきました。活動当初は、そんな被災者の声に真摯しんしに耳を傾け、少しでも不安を取り除こうと努力もしまし



福島・群馬県警による避難所の対応＝平成23年4月28日、南相馬市

だが、来る日も来る日も原発に対する批判や、行政に対する不満など、同じような内容の言葉を投げかけられてきた私は、正直この仕事の存在意義に疑問を持ち始め、自暴自棄になりかけていました。

そんな状態のある日、ある避難所で、次のような避難者との出会いがありました。その方は、40代女性で、段ボールで間仕切りされた3畳ほどのスペースに、20歳ぐらいの息子と2人で生活していました。その女性は大熊町の出身で、放射能の影響で避難しているとのことでした。そして、自分には福島第一原発に勤務している夫がいることや、夫は放射能の危険を顧みず、原発内にとどまって、作業を続けていることなどを話してくれました。さらに原発は危険だからすぐに避難するように言っても「俺は今まで原発で仕事をしてきた。原発には助けられなかった。原発は今、俺たちに助けを求めている。そんな原発をほっといて避難することは出来ない。苦労をかけるがすまない」と言っていたと、涙を流しながらも、自分の夫を誇らしげに話してくれました。

その話を聞いた私は、中途半端な気持ちで勤務していた自分をとても反省し、そして、恥ずかしく思いました。

その日の夜、会津若松市に住む小学1年生になったばかりの娘から、突然電話がかかってきました。当時、私は妻と子ども2人を残して単身赴任生活を送っていました。娘からの電話は「今日ね、初めて算数で足し算習ったんだよ。今日の給食とつてもおいしかったよ。宿題もちゃんとやったよ。みんな元気だよ。私たちは全然大丈夫だよ。私たちのことは気にしないで、お父さんは困っている人のために一生懸命頑張ってる」と、私を励ましてくれました。落ち込んでいる私の気持ちを知ってか知らずか、その後もなかなか娘の電話は終わりませんでした。小学1年の娘が気遣ってくれていることに私は、涙をこらえることが出来ませんでした。

避難所対応班という仕事にやりがいを見いだせず、その場しのぎの仕事を行っていた私には、なぜかこの電話は、頼りない自分への励ましと期待のように感じられて仕方がありませんでした。同時に、家族はこんな父親でも誇りに思っているのだから、被災者は私の家族以上に警察に対する「期待」というものを持っていて、差し伸べる手を待っているのではないか、と思いました。

(平成23年8月)

復興への礎いしずえ

警察学校

高宮 優 30歳代

震災が発生した3月11日、警察学校で第16期初任補修科短期課程の卒業式があった。卒業式を終え、一息つきながら事務処理をしていたとき、今までに経験したことのない大きな揺れを感じた。私はとっさに教官室から飛び出し、正面玄関から校舎の外に出た。遠くに見える蓬莱団地のアパート群が今にも倒れそうなほど、ぐらぐらと大きく揺れていた。

震災時、警察学校には第93回初任科短期生47人が在校していた。震災の影響により校舎の一部損壊や断水があり、食堂も継続できない状況となった。このため、震災対応をするためにも、水や食料の調達が急務となり、しばらくは学生自らが自炊しなければならなかった。

また、震災当初は学生が初任科教養期間ということもあったため、多くの学生は警察学校で待機する時間が長くなる状況が続いた。



浪江町請戸地内から福島第一原発の
排気筒を望む＝平成23年5月7日

学生の中には、津波で実家が流されたり、東京電力福島第一原発事故の影響により、家族が避難しなければならぬ者もいた。

報道で明らかになる被災地の悲惨な現状を知るにつれ、一部の学生からは「人のためになる仕事をしたくて警察官になったのには何もできない。自分に何ができるかわからないし、現場に行っても何の役にも立たないかもしれない。それでもここでじっとはしていられない。何でもいいから仕事をさせてほしい」という訴えがあった。学生の間では、何にもできないという焦燥感が徐々に広がっていた。

このころ、私も学生と同じように焦燥感を抱いていた。理由は、最初の赴任地が同じだった同期生が、南相馬署管内で地域住民の避難誘導活動中、津波に巻き込まれ行方不明になっていたからだ。彼に最後に会ったのは今年の1月末、彼が専科生として警察学校に入校してきたときだった。2年前に結婚した彼は、そのとき「ようやく子どもができた。予定日は6月ごろ。初めての子どもだから今から楽しみで仕方がない」と照れながらも私に

話してくれた。私は同期生がそういう状態であるにもかかわらず、被災地で活動していないことへのいら立ちを感じ、すぐにでも被災地に赴いて、活動したいという衝動に駆られていた。

その後、警察学校では、資材物資搬送班、被災者支援班、漂流物整理班、行方不明者捜索班など、班ごとに分かれて活動することとなり、私は主に警戒警ら班に従事した。

警戒警ら班は、教官を責任者とし、相馬署を拠点として3人1組で2台のパトカーを運用して、被災地を中心とした警戒警らや事案対応に従事した。私は、被災署管内の治安向上を図るべく、職務質問を重点に警戒警らを実施した。学生による職務質問も最初は言葉が続かなかったが、何度も声をかけを繰り返すことにより、次第に学生2人だけでもできるようになっていった。学生は自分たちだけで声かけできたことが自信につながっているようで、やるたびに積極性も増していった。

学生だけで、深夜駐車場で仮眠中の車両に職務質問をしたところ、津波で流された家族を捜しに来ていた若い夫婦が乗車していた。学生らは、かなり恐縮してしまい、言葉に詰まってしまったが、その夫婦からは「実家も流されて泊まる場所もないので

この駐車場で仮眠していた。津波の影響で治安が悪くなっているという話も聞いたが、このように警察官が昼夜を問わず警戒してくれることは、私たちにあって大変心強い。こういうときに頼れるのは、警察官しかいない。ぜひとも、震災に負けず、あなた方も頑張つてほしい」と予想外の言葉をいただいた。学生にとって、自分たちの活動が被災者の役に立っていることを実感するとともに、あらためて警察官に対する期待の大きさを感じた出来事だった。

さまざまな活動を通して、一線署に送り出した学生に出会う機会も多かった。震災対応で疲弊しているにもかかわらず、笑顔で話しかけてくれる彼らの姿は、成長を感じさせ、私に自分を奮い立たせる元気を与えてくれた。

また、震災当日に初任補修科を卒業したばかりの2人の学生が、帰署途上の電車内で乗客を的確に避難誘導し、数多くの命を救ったニュースは、一般の方からもよく耳にした。本当によくやってくれたと思う。

最後に、行方不明となった同期生の子どものは6月3日に無事生まれた。男の子だった。その数日後、彼のご遺体を確認された。

彼の実家を訪問した際、父親は「息子は警察官なんだから最後まで誘導していたの

は当然だ。それで殉職したのだから仕方がない」と話してくれた。やり切れない気持ちでいっぱいになった。その後、言葉が出なくなりました。私がうつむいたままです。さらに「教官として立派な警察官を育ててほしい」と励まされた。

私は警察官として、彼の分までこれまで以上に全力で職務に当たりたいと思う。

(平成23年8月)

警備活動から

得たもの

警察学校

佐藤 嘉紀 20歳代

平成23年3月11日、史上最大級の災害である「東日本大震災」が発生し、それに伴い警察学校初任科生も警備活動に参加することとなりました。支援物資運搬、拾得物(落とし物)整理、自動車警ら、行方不明者捜索など、当時は突然の出来事にただ夢中で活動していましたが、今振り返ってみると大変な経験をしたと思います。

震災の発生当時、私たち初任科生は卒業を間近に控えており、何事もなければ3月



重機による搜索活動＝平成23年5月2日、浪江町請戸

25日には卒業を迎えていたはずでした。しかし、警察学校もまた地震による被害を受け、電気や水が止まった生活を余儀なくされ、そのような中、私たち初任科生にも被災地への出動命令が下ったのです。こうして私たちの警察人生は、被災地の復興に向けた警備活動からスタートしました。

当時教官が言ったことで印象的だったのが「お前たちが想像しているよりも現場は悲惨な所で、支援に行けば当分帰ってこられないかもしれない」という言葉でした。当時はまだ余震も多く、東京電力福島第一原発の事故も手つかずの状態であったため危険な状況で、正直そのよ

うな場所へ行くことに対し大きな恐怖感がありました。

しかし、新聞やテレビのニュースを見て、被災地の痛ましい状況、行方不明者や死者の数などを知るにつれ「私も警察官という職業に就いたのだから、なんとかして日本のために役に立ちたい」という気持ち湧き上がってくるようになりました。震災が起こってから1週間ほどは県本部災害警備本部における広報の補助や、警察署に送られる支援物資の運搬など、後方支援を主に行っていました。徐々に相馬署を中心とした自動車警ら活動や、被災地の拾得物整理、行方不明者捜索といった最前線の活動にまで業務が拡大していくこととなりました。

前述した活動の中で、やはり一番印象に残ったことは行方不明者の捜索です。私は警察官になりたてで、ご遺体を見た経験もなかったので、捜索自体に対する不安と恐れがあり、それに加え原発付近を捜索するという一方で、もしかしたら被ばくするのではないかとの不安もありました。

実際に活動してみると、捜索の要領も分からず、がれきを押し分けるときに、そこに人がいるのではないかとの想像に駆られながらの作業となりました。現場には犬や牛など動物の死骸も多く、人のご遺体でなくとも「そこにある」という、その存在感

に圧倒された覚えがあります。このころは、慣れない作業に加え放射能などの心配により毎日疲れ果てて学校に帰っていました。

捜索をはじめとする警備活動の毎日で疲労が蓄積していたころ、捜索やその他の活動に対する恐怖心、不安は、ある日テレビのニュースを見ることによって消え去りました。行方不明だった方がご遺体で発見され、その家族が警察に対し感謝しているニュースの映像を見て、私たちの活動が役に立っていると分かり、本当に救われる思いがしたからです。

(平成23年8月)

初任科生の決意

警察官を目指した理由

警察学校初任科（※執筆時）

角田 昌章 20歳代

私は、平成23年3月11日を境に警察官になろうと思うようになりました。

私は当時、会津工業高校で常勤講師として勤務しており、学校内での担当は生徒の進路に関するものでした。

平成23年3月11日、私はあいさつ回りのため、大熊町にある東京電力福島第一原発と新地町にある企業に車で向かいました。福島第一原発には、午前10時ごろ訪問して担当の方に話を伺い、午前11時ごろに会社を後にしました。今思えば、その約4時間後に地震と津波の影響により大変な事態に陥る場所になろうとは想像もつきませんでした。



捜索にあたり、先輩警察官から指導を受ける福島県警察学校初任科生＝平成24年7月5日、浪江町請戸

その後、新地町の企業で担当の方と話をしていたとき、東日本大震災が発生しました。今まで生きてきた中で、経験したことのない大きな揺れに身の危険を感じながら、食器が飛び交う食堂のテーブルの下で揺れが弱くなるのを待ち、その後外へと避難しました。この企業は高台にあるため、直接津波の被害はありませんでしたが、再

三の余震や錯綜さくそうする情報により恐怖を身近に感じながら従業員と待機しました。

その後、私はなんとか実家のある福島市に戻ると今度は職場に向かうべく、ガソリン集めに奔走し、やっとの思いで会津若松に帰ることが出来ました。

会津工業高は被災者の受け入れのため体育館が開放され、私はそこで学校職員と見回り活動や、受け入れ施設の案内など昼夜を問わず行っていました。

避難していた小さな子どもたちの中には、地震

や津波の影響により、寝言で「助けて」「お父さん」などと言う子が多く、それを聞いた時私は「どんな形でも良い、なんとかこの子どもたちのために力になれないか」と強く思いました。

そんな時、テレビで、震災発生間もない段階から津波の被害を受けた地域でご遺体の捜索活動をしている全国の警察官の姿を見たり、被災者のために深夜、体育館付近を入念に警ら活動してくれている警察官の姿を見て、私は「福島のために、福島県民のために警察官になりたい」と思いました。

東日本大震災は、私の心に大きな変化をもたらしたのです。

そして運良く採用試験に合格、念願だった福島県巡査を拝命しました。

初めのうちは地域住民に慕われる優しい警察官になればいいなと思っていました。しかし、優しいだけでは犯罪者と対峙し^{たいじ}県民を守ることが出来ないことが分かりました。また、優しい心がなければ権力を振り回すだけの存在となってしまうことも分かってきました。

警察官には強靱な体力と精神力、そして研修を重ねた知識が必要であり、それらを

兼ね備えるからこそ、優しさが自然とにじみ出て地域住民を守れる、そして頼られる存在となるのだと思います。

(平成24年7月)

福島のために

警察学校初任科(※執筆時)

佐藤 祐記 20歳代

川俣町山木屋。

私が生まれ育った小さな田舎町です。

山木屋は緑に囲まれた自然あふれる素晴らしいところです。

しかし、今は住むことができません。

3・11東日本大震災。

そして、東京電力福島第一原発爆発。

放射線量が高い山木屋は、計画的避難区域に指定され、家族は避難生活を余儀なくされました。

「福島のために」「福島に戻って、福島のために働きたい」。そう、強く思いました。

7年前、私は高校を卒業して自衛官になりました。自衛官の仕事はやりがいがありました。

この震災がなければ、私が警察官になることはなかったと思います。

しかし、昨年3月11日。

あの大地震が発生したのです。

当時、私は千葉県の駐屯地において、「先遣隊」という有事の際の先発部隊に所属していました。

しかし、震災の発生当初は、自衛隊でも情報が錯綜さくそうしており、何時間たっても出動命令は下されませんでした。

待機中に見ていたテレビから福島県を襲った巨大津波の映像や福島第一原発爆発の情報が次々と流れてきて「早く出動したい」「家族、友達、福島の人を助けたい」という気持ちでいっぱいでした。

震災発生から5日後、上司から「福島に行く派遣命令が出たぞ」と聞かされ、よう



本県警察学校初任科生と群馬県警の部隊による捜索活動＝平成23年3月13日、相馬市

やく福島派遣が決まり「やってやる」という気持ちが大きくなりました。私たちの部隊は、まず郡山駐屯地に入りましたが、街ではスーパーやガソリンスタンドに行列ができ、街全体が混乱していました。

駐屯地内も、救護隊のヘリコプターや米軍などであふれかえり、戦争のような物々しさと、異様な雰囲気でした。

私たちに与えられた任務は、南相馬市原町区における住民の避難誘導でした。

区域内の各世帯を訪問して、さらに原発が爆発した際の避難経路などを知らせるものでしたが、住民の方々は「生まれ育った土地に誇りを持っている」「福島

が俺たちの故郷だから逃げたりはしない」とおっしゃり、自分たちも被災して、家族の安否も分からないのに、私たちにたくさんのお食料を分けてくれました。

私は驚きと同時に、つらい状況なのに本当に強い人たちだと、同じ福島県人として、心から誇らしく思いました。

避難誘導の任務開始から1カ月、次の任務が決まりました。

原発20^キ圏内における行方不明者の捜索でした。

捜索初日、タイベックスーツ(放射線防護服)に着替えるため、南相馬市原町区道の駅に立ち寄ると、たくさんのお警察官の姿が目に入りました。

全員防護服がボロボロでしたが、すぐに新しい防護服に着替えて出発して行きました。

「警察官は、全国から応援に来て、真つ先に20^キ圏内での捜索をしている」と上官から教えてもらいました。

捜索の任務開始から1カ月、今度は原発1^キ圏内での捜索命令が下りました。

放射能という見えない敵との戦い。

私が恐怖心に駆られながら、いつものように道の駅でタイベックスーツに着替えて



福島県警察学校初任科生による捜索活動＝平成24年7月5日、浪江町請戸

いると、一人の警察官が私に話しかけてくれました。

「警察も自衛隊も使命は同じ。福島のために命を懸けて頑張ろう」

戦っているのは自衛隊だけではなく、警察も同じ使命を持った仲間だと感じ、胸が熱くなりました。

3カ月の派遣活動を終えて千葉県に戻った後も、福島県の悲しいニュースばかりが流れており、自分がどうするべきなのか毎日考えていました。

私は、福島県人です。

生まれ育った福島のために何か出来ることはないかと考えた時、あの警察官が言った言葉が思い出されました。

「警察も自衛隊も使命は同じ」

私は、福島県の警察官になることを決意し、そして今、警察官となり、毎日の勉学や訓練に励んでいます。

(平成24年7月)

第4章

職務と家族と

大震災発生直後から、福島県警察職員は昼夜を分かたず古里復旧に向け活動する。妻は、子どもは無事なのか、夫、息子の安否は…。互いを思いやる気持ちだが、被災した県土に交錯する。不安にさいなまれ、動揺する心。それでも家族を一途に信じる警察官と、その家族の姿をつづる。



無人となった商店街＝平成23年4月25日、双葉町

支えてくれた 妻と息子の写真

いわき東警察署

白岩 道晃 30歳代

「妻は、息子は大丈夫か」

警察官としての資質に問題があると思われるだろうが、地震発生時、私の頭には妻と幼い息子の顔が、何度もよぎっていた。

警察官としての職業病なのだろう。常に最悪の事態を想定する癖から、妻子の安否についても最悪の事態を想定した。

3月11日の大地震の際、私はいわき東署生活安全課内にいた。

揺れが普通の地震より長かったので、念のために庁舎から署の駐車場に避難した。その時は、学生時代の避難訓練のような軽い気持ちだったし、すぐ収まる地震だと思っていたが、駐車場に出るとその安直な予想は変わった。

私の股の下をアスファルトが真っ二つに地響きを立て割れ始め、私は割れ目に落ちていく危険を感じた。



陥没と地割れで通行止めとなった平田村
の県道矢吹小野線＝平成23年3月12日

警察署周囲の山林からは、くすぶった緑色の煙が立ち込め、最初は火事かと思っただけ、よく見ると地震で舞い上がっていた山林の花粉だった。

周囲から、けん銃の発砲音のような音が響き渡っており、後からその音は、地震で隆起した道路のアスファルトの音だったことが分かった。

私は当初、生活安全課の係長と共に街の被害状況の確認や津波からの避難広報の業務に当たった。

道路は避難する車であふれかえり、混乱する人々の大声やクラクションが街じゅうに鳴り響いていた。

街の状況を確認して行けば行くほど、秩序ある普段の街が地震と共に暴走していくように思えた。

警ら中に、妻と息子の知り合いに偶然出会い、2人が無事だと分かった。

その日から、電気・ガス・水道といったライフラインが止まった。

翌日には東京電力福島第一原発が爆発し、活気のある小名浜の街から、人々の明るい声と街の灯りが次第に消えていった。

ほとんどのスーパーが閉店し、食材も入手出来なくなった。

自動販売機から飲料水も消え、家では、運良く風呂桶にくんであった水を飲み水な
どにした。

私は連日、搜索活動で警察署に詰めた状態であり、深夜帰宅しても妻と息子は寝て
おり会話はほとんど出来なかった。

こんな時こそ、警察官としての職務を全うしなければと鼓舞する自分の前で、息子
を抱きかかえて小さくなって眠る妻がいた。

止まらない余震や津波の危険に加え、放射能の恐怖の中で、独り必死に息子を守り
ながら、残った貴重な食材で私の夕食を用意しておくなど、妻は極限の状態でも私を
気遣っていた。

妻の寝顔を見て、夫として何もしてあげられていない自分の力のなさが申し訳な

かった。

妻はずっと私と小名浜に残りたいと話していたが、放射能の危険から妻の実家のある喜多方市に避難させることにした。

無造作に物が押し込まれた妻と息子が乗る軽自動車を見て、自分がそばにいてあげられれば出来ることももつとあつただろうにと、つらい思いになった。

その時、置かれている状態が分からない4歳の息子は、何度も「パパ、これから喜多方ばあちゃんのと所に行くんだ。パパもお仕事終わらせて、早く喜多方に来てね」と無邪気に私に話しかけた。

原発事故の収束が見えない状態であり、さらなる原発の爆発の可能性が懸念されていたので、私はこの時が妻と息子との最後の別れになると心に決めて、妻にこう話した。

「この子が大きくなったら、パパは小名浜に残り、警察官として街のみんなのために頑張っていたと話してくれ。3人でもつと楽しい思い出をつくりたかったが、それももう出来そうにない。俺と一緒になつてくれてありがとう」

それは初めて死を覚悟した上での言葉だった。

私は、妻が「私たちと一緒に行く」とでも言うのだろうかと思った。妻の口癖が「いつでも3人一緒」だったからだ。

しかし、妻から出た言葉は違っていた。

「絶対にまた小名浜に戻ってくるから。それまで頑張つて」と妻は泣きながら話し、小名浜に残る私に仕事を頑張るように励ました。

正直意外だった。

生活安全課員として6年近く、自分なりに精いっぱい仕事をしてきた。休みも少なく、妻子との時間もなかなかとれなかった。

しかし、その6年間で私の仕事にかける熱意や業務の苦労を妻は自然と肌で感じとっていたのだろう。

そして警察官である私に幾分かの誇りを感じてくれて、警察官の妻として私を私生活で支えようとしてくれていたのだろう。そんな理解ある妻の言葉に、私は感謝した。

小名浜から離れていく妻と息子を見送り、私は今まで以上に行方不明になった方を一人でも多く捜さなければと決意し、業務に戻った。

(平成23年8月)

妻と二人で

田村警察署

山内 統 30歳代

震災当日の午前中は、地区の学校の卒業式に列席した。常業駐在所（ときわ）の「駐在さん」になって間もなく1年が過ぎようとしており、式の最中「1年を振り返ってみればいろいろあったものだ」などとのんびり考えていたことを覚えている。

午後2時半ごろ、駐在所に警察官2人が警らの途中に立ち寄った時に、緊急地震速報の警戒音が鳴り響き、大きな揺れが襲ってきた。当初は、暴れるキャビネットなどを押さえようとしたものの、揺れの大きさと時間の長さから屋外に避難せざるを得なかった。

揺れが収まった後、駐在所の敷地建物を点検し、倒壊の恐れはないと判断して本署に報告し、その後それぞれ、被害状況の確認に向かった。

この時、偶然にも警察官が複数いたことは幸運であったと思う。互いに声を掛け合い、すぐに冷静さを取り戻すことができ、なすべきことのために行動を開始できたか

らである。

パトカーで管内を走り、主要幹線道路の路面状況、信号機などの作動状況、家屋の被害状況とけが人などの有無、インフラ設備の異常の有無などの情報を集めた。

役場は、消防団員に地区を巡回してもらうなどして情報を集めており、役場にも立ち寄って情報交換を行った。

駐在所周辺の家庭や職場には、妻に回ってもらい、手分けして情報の収集に当たった。

突然空が暗くなつて一時吹雪となったり、時折襲ってくる大きな余震とその地鳴りに振り回されたりしながらも、徐々に被害状況が判明してきた。

夕暮れが近づき、テレビやラジオなどから情報が入るようになってくると、今回の震災の大きさが徐々に分かってきたが、あまりのことに言葉が出なかった。

沿岸部を襲った津波の映像が、繰り返し繰り返し放映されているのを横目に見ながら、今ここで起きていることにきちんと対処することだけを考えていた。

追い打ちを掛けるように、東京電力福島第一、第二原発の異常について報道発表が



ガソリン不足により渋滞が発生した国道115号線＝平成23年3月21日、福島市成川

なされ、避難指示が出された。

12日は、避難して来る人々を誘導する任務に従事するよう命令を受け、夜半に駐在所に戻った。

翌日は、相勤者と合流して都路に向かったが、避難所として指定された施設に向かう大量の車両で大渋滞となっていた。加えて、ガソリン残量の不安からスタンドに並ぶ車が続出し、渋滞に拍車をかけていた。

そのうち、都路の避難所は満杯になり、車両を常葉の避難所方面に誘導しなければならなくなった。

地理不案内のうえ、正確な指示のないまま避難する人々を誘導するため、紙とマジックを現地で調達し、指示内容を記載して避難者に示すことで急場をしのいだ。

順調に流れていると思って安心したのも束の間、今度は常葉町内で大渋滞が発生して車両が動かなくなったことから、渋滞解消を指示され、相勤者と2

人で常葉に向かった。

避難者は、指示された道順通り、国道を西進していたことから、裏道を経由して町内に戻り、車両を置いて徒歩で渋滞発生箇所へ向かったところ、ガソリンスタンドが渋滞の発生原因であった。

我々2人では対応しきれないと判断し、役場へ行き、避難者の受け入れで混乱するなか、数人の消防団員と交通安全協会役員に協力をお願いして、交通整理を補助していただきながら整理誘導し、徐々に流れを整えた。

昼ごろには、常葉の避難所も満杯になってしまい、避難車両を船引、三春方面に向けなければならなくなった。

避難車両の列は延々と続いて途切れることがなく、一体どのぐらいの人々が避難しているのか、見当もつかない状況だった。

この混乱の最中、福島第一原発1号機が水素爆発していたようである。避難車両の誘導にかかりきりだったため、私はそのことを知らず、役場職員から「原発が爆発したから逃げろという指示が出たのでしょうか」と聞かれて困惑してしまった。「現時点でそのような指示は受けていない」と答えたものの、その後すぐ、原発が爆発した

ことを報道で知った。

その後、役場のテレビに、爆発する原発の建物が映し出されたのを見た時、腹を決めた。

しんがり
殿は俺だ。

いまだ避難車両の列は途切れず、気を抜けば再度渋滞が発生する可能性があり、何よりここで踏ん張っている地元の人がいる限り、退くことはできない。

そのまま相勤者にとどまって交通の整理誘導に当たり、暗くなってからようやく最後尾の消防団車両が通過するのを見送った。

やはり最後まで残るのは地元の消防団なんだな、と地区隊長らと話し、避難所が落ち着いたのを確認してから本署に行き、明日からの業務の指示を受けてから駐在所に戻った。

13日は、船引幹部交番において勤務していたが、急きよ翌14日のいわき中央署応援派遣部隊として出動することが決まり、14日午前2時の出発に向けた準備を開始した。

車両2台10人の部隊と装備を調べ、午後9時ごろ駐在所にいったん戻った。

普段と異なり、すれ違う車両もほとんどなく、町の明かりも少なかった。駐在所に戻ると管区学校の同期同部屋だった青森県警のKさんから電話があった。

仲間の無事を聞き、涙が出た。

駐在所に戻ってから、悩んだものの、妻にだけは被災地への出勤を伝えた。

準備を調べてから簡単な食事と仮眠をとり、出発時間に間に合うよう駐在所を出発した。

被災現場は、自分の目で見ているはずの景色に現実感がなかった。

いわき市豊間での搜索活動中、結果的に誤報ではあったが「津波発生、避難せよ」との指示を受け、山に駆け上った。

無線も携帯電話もつながらない時が多く、困難を伴う搜索活動となった。それでも、震災以降不眠不休で搜索を続けているいわき中央署員の姿を見れば、おのずと手足が動く。

日没まで搜索を実施し、その後帰署したが、部隊員が一人も欠けることなく戻ることができ、本当にほっとした。

疲れ切って駐在所に戻ると、妻が待っていてくれた。

大半の住民が自主的に避難してしまい、人の気配がしない町で、明かりのついている駐在所がこれほど安心するものかと思った。

以来、妻と2人で駐在所を守っている。

(平成23年8月)

人を思いやること

國井 咲希 10歳代

父：留置管理課

國井 祐典

母：県民サービス課

國井 千加子

3月11日午後2時46分、当時中学1年生の私は、一生忘れられない災害に遭いました。

激しい揺れと、たくさんの泣き声の中、どうやって校舎から出たのかも分かりません。

自分の身に何が起ったのか考えられずに、膝から流れた血と、気丈に振る舞っている友達の震える肩とをぼんやりと見たことを覚えています。



大きな揺れで校庭に避難した生徒たち＝
平成23年3月11日、郡山市の郡山二中

しばらくすると、公衆電話が使えることが分かり、並んで家族に電話をかけ、迎えを待つことになりました。学校の中も停電したり、水道管が破裂して水が噴き出したりしている状態なので、福島県内も大変な状況であることは中学生の私にも想像がつかれました。そんな中を、警察官である私の両親が迎えに来られるとはとても思えませんでした。

私の父も母も、福島県の警察官で、いつも忙しく働いています。物心ついたころから、迎えが遅かったり、学校行事に来られなかったり、夜中に突然仕事に呼ばれたり、休みの予定をキャンセルされたり、そんな毎日に不満を持っていました。公衆電話に並びながら、私は母にどんなことを言えばいいか迷っていました。

こんな大きな地震の後だから、両親は警察官としてたくさんの人を助けるために、忙しく働いているのだらうな。迎えに来られなかったら学校に泊まることになるかもしれないし、もし電話にも出られない状況だったらどうしよう。仕事のことを聞いた

らどんな気持ちになるだろう。などと考えていると、私の番になってしまいました。

母の携帯電話は、コール10回でつながり、母の声が聞こえました。

いろいろ考えていたのに、何を話していいか分からず、思わず「迎えに来て！」と叫んでしまいました。

言った後すぐに後悔して「私は大丈夫だから。来られるようになったら迎えに来て。ずっと待ってるから」と自分でも無理していると分かっているのに言ってしまうました。

何でもできる自慢の母だけど、私や妹に心配ごとがあると、いつもの100分の1ぐらいのパワーになってしまう母。

母を心配させたくない。

今だけは、警察官として頑張ってた皆さんの人を救ってほしい。

そんな気持ちで、最後に「お仕事頑張ってたね」と締めくくりました。

ずずつと鼻をすする音が聞こえ、母が「必ず迎えに行くから。待っててね」と言う言葉を聞くと、私も目の前が涙でにじんでしまつて、何も言えずに電話を切りました。

夜が来て、停電で辺りがまっ暗なのと、寒さのため、先生方は中庭に火をたきました。近所のスーパードから分けてもらった食材で先生方が作った簡単な夕食をとり、ひとすらす母を待ち続けました。余震が続いて、あちこちで建物がミシミシと音を立て、そのたびに友達や先生にくっついて、心細さを紛らわせました。

どれくらい時間がたったのか分かりません。

友達の数が1人、2人と少なくなり、中学生と高校生を合わせても、数えられるくらいの人数しか残らなくなったころ、やっと母が迎えに来ました。

今思い出すと恥ずかしくなるくらい、その時ばかりは母にしがみつき、離れませんでした。

それからしばらくサバイバルな生活が続きました。

今となつては笑い話ですが、家に帰るとすぐに母はお風呂の水を湯船いっぱいにため、入浴禁止令を出しました。最初は不思議に思っていました、次の日から水道が出なくなり、母のたくましさに感心しました。父はずっと仕事場に泊まり込み、母は毎日仕事に出かけたので、私たちもいろんな努力をしました。少ない水を大切に使うためトイレの使い方を工夫したり、妹は近所のスーパードに2時間並んで食材を調達し

たり、私は給水所に3時間並び飲み水を確保したり、精いっぱい家のことに協力しました。

そんな中ですごいと思ったのは、家に入れなかったり、ガソリンがなくて家に帰れない母の同僚を家に泊めたり、託児所が閉まって困っている同僚の子どもを預かったり、こんなにひどい災害の時でも他の人を思いやる母の姿でした。

警察署に泊まり込んでいる同僚のために、炊飯器をフル回転させておにぎりを握って持って行ったり、私たちだけでも大変なのに、仕事から帰ると預かっている子どもの分まで食事を作り、みんなに温かいご飯を食べさせたり、浪江から福島に避難してきた警察官が冷たい白いおにぎりを食べている姿を見て、家に残っていた野菜などを全部使って、豚汁を作って持って行ったりもしました。

私も母の姿を見て、手伝いたいと思い、一緒に料理を作りました。

するとある日、母がまんじゅうを持って帰ってきて「これはね、双葉署の人が豚汁のお礼に分けてくれたんだよ。自分たちだって食べるものがないのに、ありがたいね」と言って、一緒に豚汁を作った私に食べさせてくれました。

震災時、たくさんの人を誘導して、津波に巻き込まれた警察官もいたそうです。原

発が爆発したときも、自分たちよりも住民の救助を優先した警察官の話を、母から聞きました。

そんな姿を思い浮かべると、今まで食べたどのまんじゅうよりも甘くおいしく感じました。

震災から半年以上が過ぎました。

震災が強烈すぎて、誰とも震災の話ができなかったのですが、先日、母とやっとその話をすることができました。母がしてくれたのは、地震の後、隣の家避難した妹からのメールの話と、私からの電話の話でした。

家で留守番をしていた妹は地震の時、隣の家避難したそうです。

たった一人で留守番していて、どんなに心細かったかしの、電話が繋がらないなかで「大丈夫」って送られてきたメールを、母は大事に保存しているそうです。

それから地震の後、私の中学校にも電話が繋がらなくなった時、私から無事を知らせる電話があったこと。

みんな自分のことで精いっぱいなのに、私から「大丈夫。お仕事頑張ってね」と言

われたとき、母は胸がいっぱいになったそうです。

そして「大変なときに、自分のことよりも他の人を思っ
てあげられる娘を、お母さんは誇りに思う」と涙ぐんで
言ってくれました。

私も、母のように人を思いやる
ことができたんだな、とうれしく
思いました。

(平成23年12月)

主人の決意

渡辺 雅子 20歳代

夫..地域安全課

渡辺振一朗

「じゃあ、行ってくる」

「転勤先が決まったら連絡するから」

3月11日、その日主人は東京電力福島第二原発で宿直勤務でした。私は、1歳の娘を抱っこし、いつものように主人を見送りました。

まさか、この日から1カ月以上も主人と離ればなれになってしまおうとは、夢にも

思っていませんでした。

午後になって、主人から「浪江に決まった」と携帯電話のメールで異動の連絡がありました。

浪江町は、冬にあまり雪が降りませんし、海も山もあって自然が豊かなところでしたから、子育てには良い環境だと思っていました。春からも引越すことなく浪江で生活できると安堵あんどしていたところに、あの地震がきたのです。

地震が収まって、近所のおばさんが一緒に避難しようと声をかけてくれました。

私は、貴重品だけを持ち出して、浪江町にある工場の体育館に避難しました。

避難所では、他に避難してきたおばあさんなどが、娘の面倒を見てくれたり、おむつを分けてくれたりして、本当に有り難かったです。

この時点までは、娘の安全を確保することに母親として精いっぱいでしたが、いまだ主人と連絡がとれておらず、主人の安否だけが不安でした。

夕方になって、テレビの報道で福島第一原発が爆発したことを知り、体育館に避難していた人たちと相乗りして、とにかく中通り方面へ避難することになりました。

避難の途中、主人から「川俣分庁舎にいる」と携帯の伝言メッセージがありました。

た。

正直なところ、地震直後の津波や、原発の爆発で主人は無事ではないだろうと思っ
ていましたので、「川俣分庁舎で再会できるかもしれない」と思ったときは、本当に
うれしかったです。

相乗りしてきた車で福島署川俣分庁舎まで送ってもらい、分庁舎の中でしたら待
たせてもらいました。

その時、主人は浪江方面へ出勤中のため会えませんでした。

深夜になっても主人は戻らず、途方に暮れていると、川俣分庁舎に勤務する主人の
同期生の方が声を掛けてくれ、福島市に住んでいるその方の親戚の家で泊まれるよう
に手配してくれました。

次の日の朝、主人から伝言メッセージがあり「青森の実家から弟が迎えに向かって
いる。合流して青森に避難してほしい」とのことでした。

私は「あなただけを福島に残して避難できない」と言いましたが、主人は「家族が
安全なところにいた方が安心して仕事ができる」と言うので、義弟と合流して青森の
実家に向かったのです。

国道4号線は宮城も岩手もとても混んでいました。その道中、車内のラジオで福島第一原発3号機の爆発を知りました。

その日、主人は浜通りに出動だと言っていたので、爆発に巻き込まれていないかとても心配でした。

私は主人に何度も「警察を辞めて帰っておいで」「今、職を失っても、生きていれば必ず立て直せる」と言いました。

その度、主人は「確かに任務は恐い、葛藤している」「今、青森に帰っても何も誇れない、恥ずかしいだけだ」「私心を捨てて、警察官としての立場を完遂することだけを考える」「絶対また家族3人で暮らせるから辛抱してくれ」と言っていました。私も主人のこの言葉を聞いて、警察官の妻として、何か決心がついた気がしました。

私は、自分の任務に向き合った主人を誇りに思います。そしてこれからも、主人を支えていこうと思えました。だから、何も心配せずに、市民の皆さんを守るために、自分の職務を精一杯果たしてくださいね。

(平成23年12月)

家族の思い

本多 幸 30歳代

夫：交通機動隊

本多 貴洋

私は北海道で生まれ育ち、高校卒業後すぐに北海道警察官を拝命し12年間勤めました。縁があつて福島県警察に勤務する夫と出会い結婚することが出来ました。

退職した寂しさはありましたが「警察官の妻として、この人を支えていこう」と決心して、平成22年4月に夫の住む福島へ来ました。

まさかその1年後に早くもその決心が試されることになるとは思いもしませんでした。

平成23年3月11日午後2時46分、私は駅前のデパートの6階で買い物をしていました。

聞き慣れない携帯電話の音がしたかと思うと、突然大きな揺れが起こり、店員とお客さんの悲鳴が響きました。

何が起きているのか分からないほどのすさまじい揺れの中、私は必死に柱にしがみ

つき耐えていました。揺れが収まり、何とかパニック状態の店内からデパートの外まで避難することが出来ました。

すぐに「とにかく家に帰らない」と思いましたが駅周辺は停電になっていたため、地下駐車場から車を出すことは出来ず、とにかく家の方向へ歩き出し、途中でタクシーを見つけて自宅に帰り着きました。

しかし、その時私には福島県に知り合いはおらず、頼れるのは夫しかいませんでした。夫は震災対応のため、家に帰っても一人で居るしかないと思うと不安でいっぱいでした。

私が警察官だった時には、有珠山噴火時の被災者支援として現地派遣を経験したり、機動隊員として多数の災害現場で活動もしてきました。

ただ、警察官ではなくなった今、未曾有の大震災を前に自分が何をしたらいいのか、何が出来るのか全く分からず、自分の無力さを感じていました。

私がどうしたら良いか分からず、ほんやりとしていたところ、同じ官舎に住む奥さま方に声をかけていただき、残っていた家族の方々と協力して行動することが出来ました。

大きな余震が続く中、臨時の避難場所として、官舎に隣接する機動隊の道場へ避難させてもらえることになりました。

不安でいっぱいだった気持ち少し和らいだ反面、こんな時でも幼い子どもを抱えて気丈に行動している奥さま方を見て、私自身もつともしっかりしなくてはと反省し、また「共に警察官の家族同士」であるという新しい絆を心強く感じました。

避難した道場では、すぐに各家庭の米を持ち寄り、おにぎりを作り始めました。

「今働いている人たちの食べる物がないから、私たちが用意しましょう」と避難した奥さま方が一致団結し、警察官の家族として少しでもその活動を支えるために、出来る限りのことをしようと、その時は夢中で行動していました。

翌朝も余震の合間に自宅へ戻り、震災直後から休まず働いている夫が戻って来るかもしれないと思い、さらに一升の米を炊いておにぎりを作り、冷蔵庫の余り物で作ったわずかなおかずを夫の職場へ届けました。

夜になり、やっと戻って来た夫に「ご飯ありがとう、みんな喜んでいたよ」と言われ、少しは役に立つことが出来て良かったと思えました。

しかし、地震で断水していたことや原発事故の影響もあり、子どもを連れて県外へ

避難する世帯が多くなり、私たちの官舎でも残ったのは数世帯だけになりました。

それでも官舎に残った家族の方々と協力して情報交換し、給水所へ行ったり、買い物へ行ったりすることで、夫の職場へ食事を持って行くことが出来ました。

私自身、震災直後で正直不安な気持ちもありましたし、夫からも「無理しないで実家のある北海道へ帰ってもいいんだよ」と言われ、実家の両親からも「北海道へ帰ってきなさい」と毎日電話が来ましたが、福島に残り夫の支えになろうと決めています。

スーパーやコンビニでは食料が売り切れ、ガソリンや灯油も買えず、今思い出してもつらい不便な生活でしたが、疲れて帰ってくる夫に対し、せめて「お帰りなさい」と出迎えたいという気持ちでした。

災害現場での活動の過酷さは知っていますが、今までにない規模の災害です。

警察署や駐在所も津波の被害に遭い、殉職された警察官もいるとニュースで見ました。被害の惨状や原発をニュースで見ると、現場付近に行っているであろう夫のことを思うと胸が痛くなりました。

夫は家に帰ってきてても「今日も疲れたよ」としか言いませんでしたが、もっとたく

さんの感情があったことだろうと思います。

「食事を用意して夫の帰りを待つ」という、ただそれだけのことですが、夫が家に帰ってきた時に少しでも「ほっ」とできる場所を準備していることが、警察官の妻として今の私に出来る唯一の夫の支えであると信じて続けることが出来ました。

震災対応では警察官の負担はとても大きいと思います。その負担を減らすことは出来ませんが、家族の支えがあれば、少しは軽く感じられるのではないかと思います。

(平成23年12月)

警察官の妻として

渡部 貴子 30歳代

夫：福島警察署

渡部 道生

休日や深夜を問わず非常参集で出かけていく背中を見送る。警察職員の家族であれば、何度か経験したことがあるかと思います。夫も、これまでに数え切れないほど寝床からはい上がって出勤しました。その度に、幼い子どもたちの寝顔を見ながら、た

ただ「お疲れさま…」という思いで夫を送り出しました。そんな非常参集の度に夫は「大きな災害の発生時には任務が優先でしばらく帰れないこともあるかもしれないから、子どもたちのことは頼むよ」と言っていました。職業柄当然のこととは思いつつ、その時はそれほど深刻に考えなかったことを覚えています。しかし、まさか現実がこのような大震災が私たちの住む福島県を襲うとは、夢にも思いませんでした。

平成23年3月11日、午後2時46分。携帯電話の緊急地震速報の直後に大きな揺れを感じたのは、外出中の自家用車の中でした。それまで体感したことのない大きな揺れに、強い恐怖を感じたことを今でも忘れることができません。そして地震の規模を知った直後に、夫は今日帰れないだろうな、と悟りました。しかしその時はまだ、その後起こるさらなる災害や、その災害警備に警察署員が長期にわたり尽力することになるとは予想していませんでした。

震災当日を含め、夫は3日間帰宅しませんでした。その間電話は通じず、一日に2通程度のメールが届いただけでした。当時、東京電力福島第一原発事故については遅々として情報が明らかにされず、不安に拍車を掛けるように大きな余震が続き、その3日間は夫の身を案じて眠れませんでした。それでも、我が家には当時2歳の娘と

4歳の息子がおり、彼らを守ることができる母親の私自身が気丈にしていなければならぬと、気を張っていました。それを察してか、たまに送られてくる夫からのメールには必ず「子どもたちを頼む」という言葉がありました。

震災から3日後の深夜に、夫は震災後初めて帰宅しました。疲れきった表情で多くを語りませんが、それは体の疲労だけではなく、目の当たりにした惨状が脳裏に焼き付いているからに違いありませんでした。刑事課に所属している夫は、主に検視に携わっていました。連日の報道にもあった通り、未曾有の死者数が出た今回の震災では、老若男女を問わずさまざまな方のご遺体を検視することになったそうです。ご遺体を前に、その方々の最期の思いを感じ、それを背負い、遺族に見つけられることを願って検視を続けていたのでしょう。夫の表情には、多くの悲しみや苦しみ、無念さを請け負った跡がありました。その重責と一緒に背負うことはできなくても、私は家族として心の支えになれるよう、努めて明るく振る舞っていたように思います。東日本大震災を通して、警察官の妻でありながら、その任務の重さにあらためて気づかされました。警察官は時に家族よりも職務を優先させなければならないという、当然と言えば当然のことを、現実のものとしてあらためて知ることとなったのです。

そんな時、私は家族を守れたのか、夫の支えになれたのか。「できた」と断言はできませんが、ただ一つ言えることは、家族の絆が、厳しい職務を果たす原動力となり、心の癒やしにもなったということです。

(平成23年12月)

夫への思い

猪狩 千文 20歳代

夫：二本松警察署

猪狩 俊治

私は平成22年3月から、二本松署東和駐在所に異動となった夫と共に、長男・長女の子ども2人と家族4人で二本松市針道にある駐在所に住んでいます。

平成23年3月11日は、こちらに転勤してから間もなく1年となるころであり、ちょうどその日は県警の転勤内示日で、朝から落ち着かない一日でした。

夫からの連絡で今回は転勤はないと知り、ほっとしたその数時間後、東北地方を大地震が襲うことになるとは、夢にも思っていませんでした。

大地震が発生したとき、夫は駐在所から車で約30分かかる二本松市内で勤務中であり、私も子ども2人を連れて買い物中で、駐在所には誰もいませんでした。

地震発生後、急いで自宅に戻ったものの、地震の揺れで自宅側玄関の鍵が壊れてしまい家の中に入ることは出来ませんでした。

駐在所側からしか自宅内に入ることは出来ませんが、私は駐在所玄関の鍵を持っていないため、夫が帰ってくるまで駐在所前の駐車場で、子どもを落ち着かせながら待っているしかありませんでした。

駐在所の駐車場は、アスファルトが割れ、液状化現象なのか、地面からは多くの泥水が噴き出しており異様な光景でした。

地震後30分以上たって、ようやく夫も駐在所に帰ってきましたが、中の被害状況を確認するとすぐに、夫は「周りの様子を見てくる」と言ってパトロールに出て行ってしまいました。

余震が続き、私や子どもたちは不安でいっぱいなのに、夫は私たちのそばにいてはくれず、管内の見回りで遅くまで帰って来ませんでした。

警察官は、事件や事故が発生したり、大震災のような非常事態の際は、仕事で出て

行ってしまうため、家族のそばにいることは出来ません。

夫と結婚する前も、結婚した後でも、そのことは十分に分かっていたつもりですが、それがこんなにも不安でつらいものだとは思ってもみませんでした。

この大震災発生の日から、誰もが本当に壮絶な日々を過ごしていると思います。

津波による行方不明者の捜索や原発周辺地域のパトロールなど警察官の皆さんは本当に大変な勤務に従事してくれていると思います。

私の夫は避難区域となっている富岡町の出身であり、自分の出身地の悲惨な状況を目の当たりにしてきても、そのことを口に出しませんでした。しかし、内心は本当につらかっただろうと思います。

捜索などの仕事から帰ってきてても、いつもと変わらぬ様子で振る舞っている夫の姿を見ると、逆に私の方が悲しくなりました。

私の実家は静岡県であり、大地震の影響は少しあったものの、原発事故による被害はほとんどなく、生活するのに不安はありません。

私の両親からは「子どもたちを連れて帰ってきなさい」と何度も言われました。「せめて子どもだけでも避難させた方が良いのでは」とも言われました。

しかし、私たちの子どもはまだ小さく、震災復興までの先の見えない期間、親と離れて暮らすのには不安がありましたし、私が子どもを連れて、夫と離れて暮らす生活というのも全く想像することが出来ませんでした。

ですから、駄目なことは分かっていたのですが、私は夫に「家族皆で一緒に避難してもらいたい」とお願いしました。警察官はたくさんいますが、子どもたちにとっての父親は夫しかいないのです。

しかし、夫は「自分は警察官だ。逃げるわけにはいかない。地域の人が全員避難するならば、その最後の一人が逃げるまでここにいる」「被災地での搜索活動がたとえ危険だとしても、自ら進んで現地へ行く」とはつきりと言いました。

夫は自分のすべきことが分かっており、避難する気などは微塵みじんもなく、私がいくら言っても夫の気持ちは揺るぎませんでした。

夫が警察官採用試験に合格して警察官になると決まったとき、夫の真面目で正義感の強い性格から、当時私は「ぴったりの職だね」と軽い気持ちで言っていました。しかし、今回の大震災を経験して「警察官」という立場がいかに重いものかということ、あらためて気づかされました。



買いだめ、品不足で、商品が消えたスーパーマーケットの陳列棚＝平成23年3月16日、福島市

あの大地震後も、私たちは家族4人で一緒に暮らしています。もしあの時、無理にでも夫を連れて避難していたら、この先夫は警察官としてやっていくことは出来なかったでしょうし、何よりも自分の信念を曲げたことを後悔して生きていくことになったのかもしれない。

現在も、余震や原発事故の影響など生活に多少の不安はありますが、家族で生活できることは大変うれしいです。

これから先も何が起こるのかは分かりませんが、以上、私は夫を信じて家庭を守るしかありません。しかし夫が警察官として職務を全うしている以上、私は夫を信じて家庭を守るしかありません。全・安心にもつながりますし、私たちの家族にとっても良いことなのだと思います。

(平成23年12月)

我が家のルール

六戸 若緒 10歳代

父…福島警察署

六戸 禎浩

私の家には、一つのルールがあります。このルールは、父と母が結婚した日から始まりました。それは、どんなに早い時間でも、家族全員が必ずそろって朝食を食べることです。私が小さい時、なぜ父の出勤時間に合わせて朝食をとるのか分かりませんでした。あの日が来るまでは…。

平成23年3月11日。その日は私の中学校の卒業式でした。友達から食事を誘われましたが、何となく気が進まず家路へ就きました。母と2人で昼食を取り、くつろいでいると、地鳴りとともに大きな揺れを感じました。何度も余震が襲ってくるため、近くの避難所になっている小学校へ歩いて行きました。

避難所に行くと、たくさんの人であふれていました。私は「これからどうなるのだろうか」と不安に胸を締め付けられました。母から「お父さんに連絡して。お母さんはお姉ちゃんに連絡するから」と告げられ、私は、「ハッ」と気持ちが変わりました。

何度連絡しても父とは連絡が取れませんでした。避難所では、他のお父さんたちが自分の家族を捜す姿を見かけました。うらやましい気持ちと、父や姉と連絡が取れない不安とで、涙があふれました。「お父さん、連絡ぐらくれなくてもいいのに、こんな時に何やっているの」と動揺しました。そんな中、小学校の体育館に避難していた私たちは、避難所からの移動を告げられ、途方に暮れながら自宅へ帰りました。自宅に戻ると近所で一軒だけに電気がついていました。普段から仲がいいご近所さんで、この家の人から「みんなうちに避難したら」と言われました。その言葉にホッとしながら、私と母はお世話になることにしました。この家に行くと「お父さんは？」と言われ「まだ、連絡が取れないんです」との会話をしながら、今、自分でできることを思い、水くみに行ったり、食事を作ったりしていました。

そんな時、自宅に懐中電灯の明かりが見えました。外に出てみると、連絡が取れなかった父が制服を着て立っていました。私は、父の姿を見て「無事だったんだ」と思いつきながら連絡が取れなかったことに怒りがこみ上げました。父は何度も連絡を取ったけど、連絡がつかなかったことを説明しました。ホッとしたのもつかの間、父が「みんな無事なのが分かったから仕事に戻る」と言い残して足早に去って行きました。私



パンと飲料水を求め長い行列をつくる被災者
＝平成23年3月13日、田村市総合体育館

は、会えた喜びに浸る間もなく去って行った父の姿をいつまでも見つめていました。しばらくして父から1通のメールが届きました。「すまない、交通整理をしている署員の夕食がない。20人分のおにぎり頼めないか。1人1個でいいから」との内容でした。私は、このメールを見て「父は何を考えてるんだろう」と目を疑いました。母はというと、避難していた近所の人に「自分たちのために、炊いたご飯を先にもらってもいいですか」と頭を下げて頼んでいて、みんなが快く提供してくれました。そして、みんなが一生懸命になっておにぎりを握ってくれました。私はこの姿を見て「近所みんなが父の仕事を理解してくれてい

るんだ」と思いました。この時は感謝の気持ちでいっぱいでした。

数日が過ぎ、父が「原発の方に行って仕事をするようになるかもしれない」と言っていて、何日か宿泊する荷物を持って職場に行きました。私は仕事先に行った父を見て、どうしてよいのか分からなくなりました。この時は「なんで警察官の家庭に生まれたんだろう」と思いました。しかし、母が「お父さんの仕事は、家庭より県民を守らなきゃいけないんだよ。無事に帰ってくることを祈っていきましょう」と言いました。この話を母から聞いて、私は母が話をしたルールの意味が分かりました。

父は、いつも危険と隣り合わせの仕事をしています。だからこそ、せめてみんなで顔を合わせ確認する時間をつくっているんだということを。

結局、父は、原発に行くことはありませんでしたが、このことがきっかけで、今まで以上に父の仕事を理解することができました。父はどんなことがあっても家族のことを思いながら、一番は仕事が優先です。このことは、警察官の家庭に育った私の宿命です。私の家族は、今日も母が決めたルールである「全員そろっての朝食」が続いています。

(平成23年12月)

警察官の家族として

加藤 久美 30歳代

夫：いわき東警察署

加藤 宏治

「無事です」

騒然とした警察署を想像しつつ、恐れながらも主人の安否確認のため、いわき東署に電話をしました。

受話器の向こう側からも壮絶な状況が読めるほどのざわめきの中で、警察職員の方からのこの一言に、一生の運を使い果たしたとまで思いました。

3月11日午後2時46分、実家の母と電話で話していたその瞬間、突然電話がプツリと切れたと同時に、自宅内のドアが激しい勢いで開閉し、電灯の笠が天井にまで付き、やまない大きな大きな揺れ。

東日本大震災でした。

友人どころか知り合いさえ誰一人としていない、土地勘が皆無の福島県に嫁ぎ、新生活を始めて約2週間目の出来事でした。

長い揺れが収まるのを待ってからすぐ外に出ると、近所の方々も混乱している様子でした。

私は、同じ民間アパートに住む方に案内されるがまま、近くの小学校に何とか避難することができました。

避難先の小学校は、小名浜港から1^キほどの距離にありましたので安全だと思っていたのですが、間もなく校門目前まで津波が押し寄せてきたのです。

避難先の小学校のテレビでは、小名浜港岸壁に漁船が打ち上げられているすさまじい光景が映し出されており、主人の最悪の結果を覚悟しました。

主人は水上警察隊に勤務していました。私は警察官の主人に嫁いだばかりで、主人からは「船に乗って港を警らしている」とだけ聞かされていたのです。

夜になり小学校に避難した大勢の方々は、「もう少し高台に避難しよう」と、迎えに来た家族と一緒にどんどんいなくなっていきました。

近所の方からは「車で乗せていくから」と言っていたいただきましたが、このときばかりは自分の家族さえ迎えに来られない警察官に嫁いだことを後悔さえしました。

私は、小学校職員の方にいわき東署の電話番号を聞き、主人の無事が確認できる

と、そのまま警察署に行くことになりました。

深夜になって警察署に戻って来た主人を見たときは、安堵あんどのあまり全身の力が抜ける思いでした。

その日から、一向にやまない地震の恐怖と、駐車場から一気に車がなくなっていた民間アパートに住んでいるという心細さ、海の近さもプラスされ、主人が仕事をしている間は、警察署にて時間を過ごさせていただくことになりました。そこには、警察署員の家族もいらっしゃいました。

翌日からは、署長、副署長、課長の奥さまをはじめ、大先輩の奥さま方に大変お世話になりながら、行方不明者捜索や災害警備に就く署員のため、調理器や食材を持ち寄り、カレー、すいとん、焼きおにぎりなどの炊き出しをすることにしたのです。

地震にとどまらず東京電力福島第一原発が爆発した時は喪失感が襲い、諦めにも似た今までに味わったことのない空虚な気持ちにもなりましたが、皆さまの温かな励ましと、勇気と笑顔に支えていただきました。

先輩奥さま方の存在の大きさを強く実感するとともに、警察官の妻としてのあるべき姿を学ぶことができた貴重な貴重な1週間でした。

(平成23年12月)

その時 やるべきことを

山辺 明美 40歳代
夫：いわき東警察署

山辺 孝志

3月11日、遅めの昼食をとろうとした瞬間、グラグラと鉄筋コンクリートの建物が左右に大きく揺れ始めました。カップボードの中に置いてあった食器が落ちて割れ、本棚の本も畳の上にバラバラと落ち、私も立っていられないほどでした。

今までに体験したことのない大きな揺れであり、私は身の危険を感じ急いで外へ出ました。

そのころ、午前中の天気とはうって変わり冷たい風が吹き、どんよりとした厚い雲が広がっていました。

私は「大変なことが起きてしまった」と不安が頭の中をよぎり、ふと時計を見たところ、娘たちの下校時間になっていました。

私は2人の娘が心配になり、余震が続き激しく揺れる中、車を運転して小学校へと向かいました。

途中にある家のブロック塀が倒れ、道路は陥没や隆起しており、その状況を見て大きな不安を覚え、それでも自分に冷静に冷静にと言いつけ、小学校へと車を走らせました。

その途中で帰路に向かう小学生を見かけ、娘たちを捜したところ、ある店舗の駐車場で、おびえながら座り込み、身動きできない状態にいる小学生の中に娘たちがいたのです。

その駐車場を見ると、揺れる度にアスファルト舗装のされた路面に亀裂が入り、その亀裂からは水があふれていました。

その日は、下校指導の日となっていたことから先生たちも一緒であり、先生たちは津波情報を得たようで、子どもたちを帰宅させずに高台にある小学校へと引き返したのです。

この時の先生たちの咄嗟とっさの判断は正しく、子どもたち全員を守ることが出来たものと思ひ感謝しております。

その後、私も小学校へ行つたところ、体育館内は、子どもや父母、近くに住んでいる方々が避難し、すし詰めの状態でした。



福島市の福島三小ではトイレの水を流すためにプールから水をくむ姿が見られた＝平成23年3月13日

体育館の中では、保護者が迎えに来ていない子どもは前方に、デイサービスを受けているお年寄りや病人の方は、いつでも外へ出ることができるように入り口付近に、後から避難して来た方には冷えた体を暖められるようストーブの近くに案内するといったことが短時間の間に確立され、避難してきた方々への協力体制が出来上がっていったのです。

私は、さらに強い余震や停電などがあるとパニック状態に陥ると思う、幼い子どもには名前や保護者の携帯電話番号を、お年寄りで歩行が困難な方には「歩行が困難」などとガムテープに書いて背中貼るという作業を、娘と手分けしながら行いました。

当時、小学4年生であった次女は心配症で、頻繁に発生する余震や体育館内での現状を直視し、全く連絡の取れない父親のことを心配して発熱し、体調を崩してしまいました。

そんな娘に私は「みんなが一緒だから大丈夫だよ。お父さんは強いから大丈夫だよ」と何度も言い聞かせ、精神的ストレスを和らげることに努めました。

一夜明けた3月12日、私は夫の安否が気になり警察署へ行ってみました。

署員の奥さま方も私と同じ気持ちであったのか警察署へ駆けつけていました。

その時点で夫とは会えませんでした。署員やその家族は全員無事であることを教えてもらい、ひと安心しました。

しかし警察署内は、地震の大きさや、予期せぬ津波で多数の行方不明者や亡くなった方が出たことで緊迫しており、署員の方々は断水により水分もとらず事案の対応に当たっていました。

その姿を見て私は、県警機関誌の「心に残る一言」の欄に、ある係長が書いた「端的只今の一念より外はこれなく候。一念一念と重ねて一生なり」という言葉を思い出しました。

その意味は、今、その時やるべきことに真剣に取り組み悔いを残さないこと、その日限りの命と違って一生懸命生きることであり、私は、今がその時だと思いました。

今の自分に何ができるか自問自答し、署内にいた署員の奥さま方と相談した結果、私たちが住んでいるアパートの貯水タンクには水が残っていることが分かったので、全員でアパートへ戻り、不眠不休で働いている署員のために水をくみ、炊飯器や米、野菜などを持ち寄り、警察署の3階に臨時の厨房を設け、精いっぱい腕を振るって食事を提供することができました。

その日より、私は奥さま方と炊き出し部隊を結成し、手分けをして近くのスーパーへ行き、数時間並んで食料品を買い求め、署員の方に提供することにしたのです。

私たちが食料品を買い警察署へ戻った直後、日本中を揺るがすニュースが飛び込んできたのです。

それは、東京電力福島第一原発1号機で爆発事故が起き、未曾有の事態が発生したとのことでした。

そのことを知り私は、放射能漏れの恐ろしさ、今後どのようなようになっていくのかという不安に襲われ涙が止まりませんでした。

その日の夜、警察署内で炊き出しの食事を娘たちと一緒に運んでいる時に、夫に会うことができました。

夫が娘たちを見て安堵あんどした顔は、今でも鮮明に覚えています。

警察官という職業柄、非常事態で夫と連絡が取れないのは覚悟の上でしたが、しばらくの間全く連絡が取れず、どのような状況にいるのか確認できなかったのは初めてでした。

その翌日、原発で放射線が漏れたことが分かり、事態の深刻さは頂点に達し、市民は自主避難し街からは人影が消え、食料品や日用品といった物資もなくなり、私は、まだ小学生の娘たちだけでも安全な場所へ避難させた方が良いか葛藤していました。

そんな時に、原発の燃料棒が露出し冷却機能が停止したというニュースを見た小学生の長女が、「早く水で冷やさなければ大変なことになるよ」と言い出したのです。

娘たちが通っている小学校では環境エネルギーについて学び、経済産業・文部科学両省から研究校の指定を受け、震災前から放射線量の測定を実践していました。

娘は原子力について学習したことを熱く語り、その姿に私は驚くとともに頼もしさを感じました。

その後も頻繁に余震があり、津波警報が発令され不安が募っていきました。

そのころ、一人の女性警察官は幼いまな娘を私に託し、何かあったら娘と一緒に連れて避難してくださいと言い、制服姿で泣きながら勤務に戻っていきました。

また、夫も、私たちに「俺は最後までこの場に残りやるべきことをやらなくてはならない。だからお前たちは皆と一緒に避難するように」と静かに言い残し、仕事に向かいました。

(平成23年12月)

息子を支えて

菅野 いつみ 50歳代

息子：双葉警察署 菅野 智康

小学生のころからの警察官になりたいという夢を実現させ、双葉署勤務となった息子は、平成23年1月28日に常磐線で赴任先の富岡駅へ向かいました。高校を卒業後すぐに社会へ出たため物心ともに準備もなく、多くの方々のお世話になりながら、仕事や初めての一人暮らしなどに慣れるまで、たちまち3月の声を聞きました。県北地方の山間地で育った息子は海の近くの勤務を希望しました。私は知人もいない土地での

無事を富岡漁港近くの子安観音にお願いしたり、本人の希望だった温暖な太平洋の近くでの勤務に感謝したりして自宅への帰路に就きました。今度来るときは、夜の森公園で初めて花見ができることを楽しみにしながら…。

3月11日は、私の勤務先の小学校で全校児童とワックスがけの準備の最中でした。突然の激しい揺れの中でただ事でないことを直感し、泣き出したりする児童らを無事に避難させたり、落ち着かせたり、ラジオをつけたり、忙しく行動することで、自分の気持ちを落ち着かせようとしていました。保護者が児童を迎えに来る姿が見え始めたころ、ラジオでは津波の危険があることを何度も報じていました。「まさか、まさか」という気持ちを押し殺しながら、毛布の上から寒さや恐怖に脅える子どもたちの身体をさするほかありませんでした。

本人が警察官を目指しているときから、その職務の大変さ、平和で幸せな人ばかりを相手にする仕事ではないことを、肝に銘じておくようにと伝えてきました。まさかこのようなことが起きるとは、私もおそらく本人も夢にも思っていないことでした。

津波が来るといふ警報ならば、高台に逃げるように住民に呼びかけ誘導しているか、あるいは注意を促すため浜辺をパトロールしているか、いずれにしても命を懸け

ているのだろう。祈ることしかできませんでした。

11日夜から12日にかけて、ラジオでは原発近隣住民の緊急避難を呼びかけていました。電話もテレビも携帯も171の安否確認もつながりません。ろうそくだけの部屋で、私たち家族は息子の無事を祈ることしかできませんでした。そして12日の夜になって川内村へ避難誘導しているという連絡がきました。そして数日後、警察の上司の方から無事で頑張っている旨の電話もあり、家族一同やっと安堵あんどしました。しかし、この緊急避難の誘導は、目に見えない放射能との戦いの始まりでした。

それから息子は、遺族支援班に配属になったため、相馬の遺体安置所へ福島から通う日々が続きました。時々、帰宅するたびに、目つきや顔つきが次第に変わり、臭いの感覚も敏感になってきたのが分かりました。本人には放射能対策のために毎日の勤務地、勤務内容、食事の記録をとるようにアドバイスしました。

家族としてできるのは、あれこれ根掘り葉掘り勤務の内容を尋ねないことなど、自然に振る舞うことだけでした。私たち親も祖母も誰も目にしたことがない風景の中で、誰も経験したことがない過酷な勤務をしている息子のことを思うと、何と言葉をかければよいのか分かりませんでした。しかし、そのような状況でひとつだけ伝えた

ことは「この震災で多くの人が犠牲になったけれども、自分や家族がその立場だったかもしれない」ということです。

(平成23年12月)

「行ってらっしゃい」
「お帰りなさい」

小林 愛佳 10歳代

父：郡山北警察署

小林 健一

母：生活安全企画課

小林 忍

それは私が、学校で卒業式の練習を体育館で行っている時でした。急に先生が「隠れなさい!!」と叫びました。体育館でしたので、あったのは座っていたイスだけです。縦か横かも分からない激しいゆれが起こり、誰かはわめき、誰かは悲鳴を上げていました。

「K子。A子。お父さん。お母さん。K子。A子。お父さん。お母さん。K子。A子。……」

私は、頭しか隠すことができないイスの下で、必死に両親や妹たちの名前をつぶやいていました。本当に何が起きたか理解できませんでした。

その後、私たちは一斉に校庭に出ることになって、みんなは、自分が先に逃げたために出口で騒いでいました。

先生が「落ち着いて!!」と言っても、できるわけがありませんでした。今までの避難訓練は、意味があったのでしょうか。

私たちは、校庭で寄り添っていました。余震はやまず、雨も降り注ぎ雪に変わり、制服に体操着しか着ていない私たちは、寒さに震え泣いていました。今、何が起きているかだんだん分かってきました。最初は「がんばろう」って励まし合っていたのに、もう耐えきれなくなりました。

「寒いよ…」

「まだ揺れてる…」

「こわいよう…」

こんな友達は初めて見ました。

そして、この時、海の近くでは何百人、何千人もの人の命が失われていたと、後に

なつて知りました。

しばらくして、母が迎えに来て、家に帰ったのですが、ホッとしたのは東の間で、家の植木は倒れ、棚は落ち、壁にひびが入ってひどい様でした。余震は続き、テレビをつけたまま眠るなんて初めてでした。それから東京電力福島第一原発のことを知りました。

3日後、私たち姉妹3人は、祖父母の家に行くこととなりましたが、父が私たちの安全を考えて、連絡してくれていたみたいでした。

私の両親は警察官です。

父は単身赴任で離れて暮らしていて、母は私たち3人を仕事をしながら面倒を見てくれていました。今年は3月18日に、父が単身赴任を終え、福島に戻ってくるはずでしたが、この震災の状態では戻って来られるはずありませんでした。でも、この状態でも、父は私たちのことを心配してくれていました。電気がつかない、水も出ない、ガソリンもない、ご飯もあまりない、この福島よりは、原発から遠い祖父母の家へ行った方が全然良かったのです。

両親が警察官だつてことは分かっていました。今まで実感はあまりありませんで

した。

「悪い人を捕まえたり、パトロールしたり、人の安全を守ったり。すごいのかなあ……」ぐらいしか思っていないませんでした。

しかし、この震災で、いろんなことが分かりました。

○ 津波から人々を守るため、自ら出動し、巻き込まれた警察官

○ 危険で、人の入ることのできない場所に行かなければならない警察官

○ 行方不明の人たちを、必死に捜す警察官

○ みんなのために、命をかける警察官……

こんな大変な仕事だとは分かっていませんでした。

父は以前「お父さんは、もしかしたら、明日、悪い人にやられて、死んじゃうかもしれないんだよ。その覚悟はあるんだよ」と言っていました。それは冗談ではなかったのです。

この時私は「覚悟ってなあに。それだったら、私だって、明日死んじゃうかもよ」と返していましたが、今思えば、とても失礼だったと反省しています。でも父は、そんな危険な立場にあるにもかかわらず、私たちのことをいつも心配してくれているの

です。

祖父母の家は、水は止まっていなかったし、電気はつくし、温かくおいしいご飯が食べられたので、福島県の自宅に比べれば安心して暮らせました。それでも、マスクは絶対に着けて、毎日テレビの端に出てくる放射線を調べてノートに記入するのが日課でした。

何日かに1回くらいは、父や母から電話が来ましたが、妹たちは、電話では聞こえないように泣いていました。

一番下のA子は寝る時、たまに「ママに会いたい。ママと寝たいよ」と祖母に泣きついたりしていましたが、祖母は「今、お父さんとお母さんは、みんなが早く、安全に普通に暮らせるように、がんばっているんだよ」と頭をなでていました。

普通がいかに大切ですばらしいか、しみじみと分かりました。

そして、学校が始まるということで、4月の初め福島に戻り、お父さんも5月に福島に帰ってきました。

福島の生活は、だんだんと元に戻ってきましたが、放射線や、風評被害などで、たくさんの問題を抱えています。家に帰りたくても帰れない人がたくさんいます。

今回の震災がなかったら、人と人が助け合うことや、普通の暮らしがいかに大切か、物のありがたさなど、分からなかったかもしれない。また、両親の仕事も理解できなかったかもしれません。

お父さんお母さんが、仕事に行く時や帰ってきた時は、感謝をこめて大きい声で言いたいです。

「行ってらっしゃい」

「お帰りなさい」

(平成23年12月)

第5章

警察は一つ

大震災に見舞われた本県に、県外から力強い応援部隊が駆けつけた。持てる力を最大限に発揮し、一日でも早い復興のために活躍する。各地域では地元住民との温かな交流も。応援部隊に参加した警察官の見た福島県の姿は、どんなものだったのか。

平成24年2月、県民の安全を確保するため、他の都道府県警察から緊急出向となった警察官350人。特別警察隊や警察署に配属された彼らの愛称は「ウルトラ警察隊」。危機を救うヒーローになってほしいとの県民の願いが込められた。期待を担う隊員の決意とは。



愛媛県警による避難所の対応
＝平成23年7月9日、南相馬市

応援部隊

感謝の気持ち忘れず

兵庫県警察本部警備部

藤江 幸生 40歳代

平成23年3月11日、当時私は、兵庫県警察本部庁舎16階で勤務していた。庁舎がゆっくりと横揺れを始めたので、「地震やな」と不安を感じた。しばらくたつても横揺れは収まらず、私の脳裏に東南海・南海地震の発生が浮かんだ。その時テレビのニュース速報で「東北地方を震源とする大地震発生」のテロップが流れた。

警備部課長補佐兼管区機動隊第4大隊副官である私は、大型モニターに流れている、今までに見たことのない津波が東北の街をのみ込んでいくニュース映像を見て、私たち管区機動隊に災害警備に伴う特別派遣命令が出ることを確信した。

私たち兵庫県警察は、平成7年の阪神・淡路大震災で、全国から長期にわたり多数



三重県警応援部隊による搜索活動＝平成23年3月18日、相馬市

の警察官の応援をいただき、未曾有の大震災を乗り越えた経験から、全国警察は一つであると実感している。そしてその時の感謝の気持ちは大きく、私たちは常々、恩返しと表現するのが適切かどうか分からないが、災害や突発重大事案が発生すれば全国のどこにでも駆けつけて、全力で活動しなければならぬと思っている。

兵庫県部隊として第3次派遣となった福島県では、東京電力福島第一原発から北へ40^{キロ}ほどの相馬署管内での搜索活動であったが、放射線量に関する事前情報を受けたことか

ら、安心して活動に従事することができた。

搜索現場は、相馬市内の原釜地区、岩子地区いわのこ、日下石地区ひつげしで、いずれも津波により海水が田畑などから引いておらず、深いところでは胸まであるへドロの中を、胴長靴を着用し、時間をかけて搜索するという状況であった。

日下石地区では、小学校や幼稚園に保護者が迎えに来て車ごと津波にのみ込まれ、親子で行方不明になっている人が多数いる。中には母親が助かり、子どもだけが行方不明であったり、その反対に子どもだけが助かっているケースもあるという被災状況であった。

私たちは、沼地と化した広範囲の田畑から一人でも多くの行方不明者を発見し、家族の元に帰したいといった気持ちで、一心不乱に休憩時間も惜しんで搜索した。

現地での活動2日目の4月8日、隊員から「発見」の声が聞こえたので現場に赴くと、網に絡まった泥まみれの軽自動車の後部座席に、小さな子どもの姿が見えた。つぶれた助手席との間に挟まれ、車体を分解しなければ搬出ができない状態であった。エンジンカッターやのこぎり、レスキューユニットなど持参の災害資機材を使い、身体を傷つけないよう気を使いながらの作業は、非常に困難であったが、応援に駆けつ



がれきの下を搜索する警視庁応援部隊＝平成23年3月29日、南相馬市



岐阜県警応援部隊による搜索活動＝平成23年3月19日、いわき市

けた消防隊員が、大型油圧カッターを活用し、やっと搬出することができた。

その子どもは全身泥まみれで、ランドセルの中の教科書を確認すると小学2年生であった。分隊長が、子どもの顔についた泥をきれいに拭き取った後、全員で合掌し冥福を祈った。私の子どもと同年であることと思いき重ね、不憫^{ふびん}で涙があふれそうになった。

しかし、まだ母親が行方不明であるのなら、ぜひ見つけ出してあげたいという気持ちで、その後も休むことなくその周辺の搜索を行ったが、残念ながら他に行方不明者を発見することができなかった。

私はこの派遣で、災害警備活動では、装備資機材の整備や習熟の必要性、自衛隊や消防隊との連携などは不可欠であるが、最も重要なことは、与えられた任務を完遂するとの強い信念を警察官個々が持つことであると再認

識し、また福島県において私たちは実践できたと自負している。

今後も特別派遣は継続して行われることと思うが、いまだ3000人を超える行方不明者の存在や、尊い命を犠牲にして、職務を全うした勇気ある警察官が多くおられたことを忘れずに、警備に従事していかなければならないと考えている。

(平成23年11月)

いいる

奈良県警察本部

交通機動隊

笹田 厚司 40歳代

「小隊長、福島県へ派遣になった」

交通機動隊副隊長からかしはら檀原分駐所に勤務する私に電話連絡があった。

被災地は悲惨な状況であり、捜索や復旧が困難を極めているため、死者・行方不明者の数はいまだ確定的な数字には至っていない。

奈良県警交通機動隊の広域緊急援助隊も、地震発生当日のうちに岩手県へ災害警備

に向かった。

副隊長から私のもとへ入った電話は、災害警備の交通部隊第二次派遣の連絡だった。

「福島県、福島第一原発があるところか……」

脳裏をよぎったのはテレビ、ラジオ、新聞などの各メディアで伝えられる東京電力福島第一原発損壊による放射能汚染の危険性だった。

報道によると、津波の規模が予想をはるかに上回ったため、発電所内の非常用発電機や制御盤が損傷し、1号機、2号機の冷却機能が喪失した。

1号機の建屋が水素爆発で損壊し、次いで3号機も冷却装置注水不能により同じく水素爆発、さらに2号機でも爆発音、4号機でも爆発による火災が発生したという。

警視庁機動隊や自衛隊、東京消防庁ハイパーレスキュー隊などは冷却のため、各燃料プールへ放水や海水の投下を行ったが、それから1号機の压力容器の温度が上昇し、放水、注水は数百ト単位で繰り返し行われ、予断を許さない状態だった。

付近住民への放射能被害がどれほどのものかは分からないが、政府は原子力災害特別措置法に基づき「原子力緊急事態宣言」を発令し、付近住民に避難指示を出した。

しかし、報道されている内容以外に原発や放射能の知識がない私は、現地に赴いて災害警備を実施することが危険なことなのか、そうでないのかさえ判断できなかった。

ただ、ひとつ言えることは必要とされているから呼ばれているのであり、そこに警察官としての誇りと使命感があった。

警察官6人、車両3台で奈良県を出発し車中で1泊、東北自動車道から磐越自動車道に入り、船引三春インターチェンジで降りた。

インターチェンジを降り、国道288号線を東進、田村市常葉町に到着した。そこが奈良県警広域緊急援助隊交通部隊の検問場所であった。

途中までは目立った家屋の損壊などは見受けられない。しかし店舗は営業しておらず、車や人通りもほとんどなく、あるのは各ガソリンスタンド前での異様なまでの給油待ち渋滞の風景だけだった。

皆、生活必需品である自動車のガソリンを求めて、数百以上並んでいた。

検問場所は福島第一原発から33^キ地点に位置し、任務は原発から半径20^キ圏内へ立ち入ろうとする人に対する規制であった。



三重県警による避難所の活動＝
平成23年6月24日、会津若松市



奈良県警応援部隊による検問状
況＝平成23年3月28日、田村市

24時間で全車停止検問を行い、目的地を確認し、通行許可や立ち入り規制を行う。

国道288号線は福島第一原発がある双葉町や大熊町、富岡町へ直接つながる国道であり、地元住民の生活道路となっており、交通量は頻繁だった。

検問場所を通過する人の目的はさまざままで、自宅に貴重品や衣服を取りに行く人や、マイカーを取りに行く人、ある老夫婦は自主避難しているのだが牛に餌をあげなければならず「原発で何があっても私らは牛を捨てることはできん」と言った。

同じく避難所では犬、猫を飼うことができないので家に残したペットに餌をあげに行く人や、自宅へ帰ることが出来ない人から依頼を受け、取り残されたペットに餌をあげに行ったり、保護に行ったりする業者もいた。

これらの方々には目的が終わればすぐに戻るよう指導

し、スクリーニングを受けるよう案内するビラを渡した。

中には20^キ圏内にある自宅に行くという人がいて「あんたが何を言おうがここを通る。孫が生まれたばかりで金がいるのになぜ通してくれない。しつこく言うならやっちまうぞ」と憤慨し、立ち入り禁止の説得に応じてくれない高齢の方もいた。

私はこの人たちの心の中も理解できた。だが、危険区域内への立ち入りを許可することはできない。

この人たちの苦しい生活環境への同情と、任務に対する使命感との間に葛藤が生まれる。

東京電力の社員も検問場所を通過した。初老の男性は「今作業している社員が第一原発内で生涯被ばく量を浴びたので、もう作業させるわけにはいかない。ですから私のような者まで作業に行くんですよ。心配ばかりおかけして申し訳ありません」と、自らが危険な場所へ行くというのに、私に対して詫びの言葉まで出る。

この男性から任務に対する使命感の強さとプロとしての誇りを感じた。

同時にこの姿を見た検問場所の警察官たちの士気が上がった。

検問実施中も胸に付けた線量計の数値が気にはなったが、地元住民や原子力発電所

で働く人の切実な思いに触れると、いつしか検問中にお互いを励まし合う言葉が出るようになった。

検問の際、運転手さんや同乗者に対し「大変やと思うけど今は辛抱やで、頑張るんやで」と、声をかけると「お巡りさん奈良から来てくれたの？ 私らのためにありがとう。福島は寒いでしょ、ごめんね、頑張ってくださいね」と逆に励まされる。

家を出て避難所で不自由な生活をし、自分たちが一番大変なはずなのに、周りの人に励ましの言葉をかけることができる。

私は「心のやさしさ」に触れることができた。

家や家族を思うあまり激高してしまう人の心、大切にしている牛、犬、猫、動物を思う心、検問する側、される側がお互いを思いやる心、被害の拡大防止、事態の沈静化の期待を背負って放射能濃度の高い発電所内へと作業に向かう人の心、私は今回の特別派遣によりいろいろな人の心に触れることが出来たと思う。

そしてその「心のチカラ」こそが震災で負った大きな痛みからこの国が立ち直ることができカギなのではないかと考える。

(平成23年4月)

「遠くから ありがとう」

山口県警察本部機動隊

榊 大輔 30歳代

平成23年3月11日14時46分。

当時私は、機動隊の武道場で術科訓練を行っている最中でした。突如、機動隊内の放送が鳴り響き、東日本大震災の発生を知りました。

常日頃から災害装備品の点検など、万全の準備をしていましたが、燃料や保存食料・水に関しては、現場の状況が全く不明なため、できる限り多めに積み込みました。

17時43分、機動隊を出発し、休むことなく走り続け、翌日の17時11分、被災地の福島県に到着しました。

途中、倒壊した家屋、高速道路の路面のひび割れや陥没、それに伴う通行止めなどを目の当たりにし、今回の地震の規模の大きさを痛感しました。

福島での任務は、原発事故による30^キ圏内への立ち入り規制を行う検問でした。現



警視庁応援部隊による放射線計測状況＝平成23年3月13日、南相馬市



山口県警による警戒区域の検問状況＝平成24年1月29日、田村市

場付近では断水により飲み水や生活水が確保困難となり、スーパーやコンビニから食料品は姿を消し、住民の方々もストレスが最高潮に達していました。そのため「湧き水をくみに行くのがいけないのか」「何のための検問か」と厳しく問われることもしばしばでした。私たちは、住民の悲痛な訴えに応えることができないジレンマと葛藤しながらも、任務の必要性を考え、これまで以上に住民の心情に寄り添いながら、懇切丁寧に少しでも住民に安心を与えていけるように努めました。

そうしたなか、3日目の夜のことでした。

いつものように勤務をしていると、付近の住民から声を掛けられました。

「遠くから来ていただいてありがとうございます。頑張ってくださいね」と手作りのおにぎりとコーヒーを

手渡されました。自分たちの食料もままならない時に、私たちへの気遣いにはとても感激しました。

今、日本全体で震災の復興に取り組んでいます。私は、このような思いやりや団結して支え合う心が一番必要なのではないかと考えています。
(平成23年8月)

ジャパンプルーの空に

鳥取県警察本部

地域課航空隊

谷岡 一馬 40歳代

福島市郊外の県警ヘリポートを離陸して東に機首を向けると、福島盆地を南北に流れる阿武隈川の向こうに、標高1000メートル弱のなだらかな山地が広がっている。鳥取県警ヘリコックピットは、本州の脊梁せきりょう、奥羽山脈から吹き下ろされた季節風にもたそばれながら、搜索空域である太平洋岸を目指した。15分も飛べば、丘陵地帯を越え、相馬平野が視界に徐々に広がってくる。同時に、容赦ない現実が露呈し、戦争を知らない我々にさえ、戦禍を思わせる光景が広がった。どこまでが海で、どこからが



鳥取県警ヘリ「さきゆう」による上空からの捜索＝平成23年3月28日、新地町

陸なのか。地図にはある町がそこにはなく、田植えを待つはずの水田には家
がまるごと横たわり、本来の姿を想像
だにできぬ残骸とがれきが幾重にも堆
積しており、潮と泥の混じった臭いが
鼻をつく。いまだ何千何百という命が
この下にあるうなど、とても信じたく
はなかった。

発生から既に2週間がたった当時の
福島県は、警察ヘリ4機体制で終日捜
索活動を行っていたものの、ヘリによ
る遺体発見は1日に1体あるかないか
で、捜索は時間経過とともに極めて困
難になっていた。

捜索場所の範囲、地形、被災状況を



富山県警による捜索活動＝平成23年3月19日、南相馬

確認した後、私は「高度〇〇、低速で水没地域を捜索する。何かあればただちに報告」と乗員に指示し「絶対に見つけよう」と最後に一言添えた。「了解」という乗員の間髪入れぬ応答が、気概と使命感に満ちた機内に響いた。

1回当たり2時間に及ぶ低高度捜索は、操縦士のみならず、1秒でも早く、1人でも多くの不明者を発見しようとはたすら地面を凝視する乗員も疲労^{こんぱい}困憊する。地上には、地元の人々が残骸とがれきの山に埋もれながらも、懸命に復旧作業を行っており、大人に交じって手伝う子どもたちの姿もあった。彼らの近くをホバリング(空中で

の停止状態)に近い形で飛ぶと、おそらく「さきゆう」の機体に描かれた「鳥取県警察」の文字に気付いてか、多くの人が我々に手を振ってくれた。絶望と悲しみを背負っているはずなのに、途方もない日々を送らねばならないのに、被災地の人々が昨日今日来た我々に笑顔で手を振ってくれた。日本人の絆を実感し、思わず視界がにじみ、操縦桿かんを握る手にも力がこもった。「さきゆう」は全国で最小ヘリでありながら中国、四国管区の1番機として、被災地東北の空を飛び、1週間の派遣期間中、計4体のご遺体を発見した。

現地への往復経路上、燃料補給のため数県の警察航空隊に立ち寄って知った。全国の警察航空隊員が、一刻でも早く東北に飛び、救難活動に加わりたいとどれほど願っている、そして、派遣指示の発令を今日か明日かとどれほど待ちわびていたかということ。警察職員「チーム・オールジャパン」の連帯、航空隊員の熱き心意気、エアマンシップを実感した。

「さきゆう」を包んだ東北の空は青く、そして温かく、人々もまた強く美しい。東北はよみがえる。日本は大丈夫。ジャパンプルーの空に我々はそう確信した。

(平成23年8月)

またいつか笑顔で

千葉県警察本部船橋東署

藤崎 朋子 40歳代

「間に合って良かった。福島の菓子。食べ」

ぶっきらぼうに、節くれ立ったごつい手で男性が差し出したのは、福島県のおみやげで有名な「ままだおる」でした。

私の任務は、仮設住宅を訪問し、相談要望を聞き住民の安否を確認する活動です。

お菓子をくれたのは、仮設住宅に1人で入居している60代の男性で、最初にお宅を訪問した時の反応は素っ気なく「これから片付けあつから」と、ポソツとつぶやくと部屋の奥に入ってしまった。突然の警察官の訪問を快く思わない方もいますので、そつと男性宅を後にしました。

数軒のお宅を訪問し、活動場所を移動しようとする私を、その男性が車で追いかけて来たのです。怒ったような顔で降車する様子には私は、抗議か苦情だと思いき身構えましたが、お菓子を渡すためにわざわざ追いかけて来てくれたと分かりびっくり。「あ



福島・群馬県警による避難所対応
＝平成23年4月28日、南相馬市

んだ、俺の娘と同じ年くらいだなと思ってよ。娘は『ままだおる』が好きだったからな。あんたも好きかなと思ってな。うめえから食ってみろ」と、包装紙から出して私の手のひらにそっとお菓子を載せてくれたのです。

「おいしいですね」。思わず笑顔で頬張る私を満足そうに見つめ「なあ。うめえだろう。福島はうめえもんいっぺえあつからな」。無愛想な顔から一変した優しい笑顔で、しばらく福島の名物について話し終えると、唐突に「車や家は金で買い戻せるけどな。金で買えないもん、なくしちゃったよ」。

ポツリポツリとあの日のことを話し始めました。日に焼けて真っ黒の顔にがちりした身体。こわもてなのに、笑うと目が糸のように細く優しい顔になるその男性は、南相馬市で従業員数十人を抱える建設会社の社長でした。

あの日、建設現場で作業中だった男性は、従業

員を避難させた後に、1人で重機を移動中に津波に流され、必死で水面に浮かび上がると、今度は凶器のような無数のがれきが、顔面目がけて流れてきたそうです。幸い、ヘルメットをかぶっていたためがれきの直撃を避け、流れてきた樹木に必死にしがみつきのながら、車や屋根、ゴミ、船などあらゆる物と共に流され、ボロボロになった肌着一枚の状態で助かったそうです。

きつとどこかの避難所にいると信じていた妻子や従業員数人は、数日後に遺体安置所で発見されたことも聞き、壮絶な体験に胸が締め付けられ、言葉を失いました。

「母ちゃんと娘は俺が帰るの待ってたんだ。逃げ遅れて流されたんだな」

流れる涙を拭おうともせず語り続け、流された車を発見し、車内に避難道具や着替えが積載された状態を見て、男性を待ち続けた妻子の最期の状況を知り、自分が殺したと思ひ詰めたことも話してくれました。

「母ちゃんに、やさしい言葉ひとつ言ったことねえ。いなくなって初めて気づいた大バカ者だ。そんな俺を待ってて流された。俺が殺したようなもんだ。悪かったな。堪忍な」

「んだけど俺を頼っている従業員がいつぺえいるんだ。泣き言は言えねえよな」



避難所の方々とともに＝平成23年4月5日、白河市

「津波のことは今まで誰にも話せなかった。話すのが怖かった。息子には言えねえしな。あんたは、俺の娘と同じくらいの年だなと思っただけが帰ってきたような気がしたからさ」と、照れくさそうにつぶやいたのです。

「母ちゃんがよく、俺のことが心配だから死ぬときは一緒だって言ってたからよ。あつちさ一緒に言ってやらねえとかわいそうだべ。縄を首にかけたり、海に入ろうとしたけど従業員がいつからな。逃げるわけいかねえべ」

社長という立場の男性は、家族を亡くしたつらい気持ちを必死で抑え、残された従業員のために1人で奮闘してきたのでしよう。

遠い県から来た「娘と同世代の警察官」だ



福島・群馬県警による避難所の活動＝平成23年4月28日、南相馬市

からこそ、誰にも言えなかった悲しみや心の葛藤を話す気になったのかもしれない。

「前の晩に娘とけんかしてな。悪かったって言いたくても、もう言えねえべよ。あんたが娘に思えてな。娘は許してくれっかな？ 母ちゃん一緒に逝けなくて許してくれっかな？」

糸みたいな目尻から幾筋も涙を流しながら、私に問いかけてました。私は「娘さんも奥さんも許してくれれます」と答えるのが精いっぱい、涙があふれて止まりませんでした。男性は「そうか。ありがと。ありがと」と私の手を取り、何度も何度も握り返しました。私のことを娘さんと思ひ、奥さんと思ひ、心から2人に詫びたのでしょうか。

「あんたに話せたから踏ん切りついた。いつまでも泣いてらんねえな。やることいっぺえあつからよ」と笑顔で言い、さらには「福島からあんたのこと、娘だと思っで見守ってんかな。さすけねえぞい。がんばれ」と笑顔と涙でくしゃくしゃになった顔で、まるで幼子にするように私の頭をなでくれたのです。そして私の姿が見え

なくなるまで、いつまでもいつまでも手を振って見送ってくれました。

「さすけねえ」とは福島弁で「大丈夫」とか「心配ない」という意味だそうです。

被災した自分のことよりもこんな私に「大丈夫」「心配ない」というエールまで送ってくれた男性の温かさに、胸がいっぱいになりました。

気が付けば男性と1時間以上も話をしていました。残暑厳しい午後で、汗が滝のように流れ落ちるぐらいの暑さでしたが、そんなことも忘れるような時間でした。

今回の災害では、この男性のような悲しい別れが幾千とあるのでしょうか。数え切れない悲しみがたくさんあるのでしょうか。

福島県は、津波や地震に加え、原発事故という先の見えない大変な状況です。それなのに、被災者は皆、私たちに「福島のために来てくれてありがとう」と気遣う温かさにあふれていました。

被災現場のあちこちに「警察のみなさん、ありがとうございます。ご恩は一生忘れません」と、手書きの看板が立てられていました。

小学生の姉妹が、機動隊員のバスに向かい「警察官の皆さん、行ってらっしゃい」「お疲れさまでした」の手書きのプラカードを掲げ、小さな手で敬礼する姿もありま

した。

地道な活動を通じ、「住民のためにある警察」「いざという時に頼りになる存在」こそが「警察の原点」であると実感することができました。

私はこの経験を生かし、真の警察官魂のこもった活動をしていきたいと心に誓いました。あの男性との出会いを決して忘れません。
(平成23年9月)

出動命令を受けて

長野県警察本部捜査第一課

神林 宏 50歳代

刑事部隊に出動命令が発せられたのは、震災が発生した3月11日の深夜であった。午後11時、私は刑事企画課からの電話で「刑事部隊に福島県への出動命令が出たと連絡を受けた。

ただちに荷物をまとめ警察本部に集合した。招集を受けた部隊員は私を含め捜査第一課7人、鑑識課2人、警務課1人の計10人だった。我々は装備資器材を車両4台に



大阪府警応援部隊による捜索活動＝平成23年3月22日、南相馬市

積み込み、午前3時、警備第二課長に申告し、急ぎ出発した。

新潟県經由で高速道路を走行中、長野県北部の栄村で大規模な地震が発生し、長野県警察本部から待機命令が出た。自宅に残した家族を思い、隊員一同不安が頭をよぎる。一時は帰県かと思われたが、1時間後に待機命令が解除され再出発した。

夜が明けて福島県に入ると所々に道路の隆起や陥没が見られ、被災地に入ったことを実感する。携帯電話は不通で、装備品の衛星携帯電話でどうにか福島県警と連絡をとり、12日午前10時すぎには福島市の福島県

警察装備センターに到着。装備資器材を受け取り、検視現場である南相馬市へ向かった。

南相馬市内は人けがなく閑散としていたが、信号待ちをしていると、どこから現れたのか住民が菓子を持って駆け付け激励してくれる。

午後2時、検視現場である高校体育館に到着すると、館内は遺族、警察官、消防団員など、関係者で騒然としていた。

体育館の床には多数のご遺体が並べて安置され、ひつぎが山積みになされている。さらに続々と搬入されてくるご遺体を目の当たりにして、我々部隊員は悲惨な現状に驚愕きょうがくするとともに、これから行う任務の重大さに身の引き締まる思いがした。

息つく間もなかっただちに検視に従事した。大勢の人が行き交い、遺族の泣き声などが聞こえるなか、とにかく無我夢中であつた。ご遺体は全て泥まみれであり、一体一体、丁寧に泥を拭い、所持品を確認しながら、早く遺族にお帰ししなければとの気持ちで、全員が黙々と検視活動を続けた。

その夜は、炊き出しのおにぎり、持参したカップ麺やアルファ米で夕食を済ませ、高校の道場での宿泊となった。深夜、道場に一組の家族がやって来た。お母さんと若



警視庁応援部隊による捜索活動＝平成23年3月29日、南相馬市

い夫婦、赤ちゃんの4人だった。お母さんが私に「ここはどういう所ですか。私たちは原発から20^キ圏内に住んでいます。怖くていられずに逃げて来ました。避難所を探していたのですが見つからず、明かりがっていたのでここへ来ました」と話をされた。不安な表情から悲惨な現状がひしひしと感じられ、現地の人々の大変さが実感された。この家族は道場で一夜を過ごし翌朝立ち去っていった。

翌日も検視は続く。大阪、兵庫、群馬の県外応援部隊も集結し、150人態勢で検視を行った。検案



福岡県警応援部隊による搜索活動＝平成23年3月30日、相馬市

医師や歯科医師も順次増員されて体制も整い、順調な兆しが見えていた。

しかし、3月14日に事態が一変した。東京電力福島第一原発3号機が水素爆発し、20^キ圏内は屋内退避となったため、搜索が停滞し、搬入されるご遺体が激減した。現地では指揮を執る鑑識課長が放射線の線量計を身に付け監視している。3月15日には、屋内退避が30^キ圏内に拡大され、現地では被ばく防止の指示が飛ぶ。我々も体育館に退避しながら検視を行い、なおかつ緊急避難にも備える状況となった。長野県警察本部

からは状況を気遣う電話が入り、放射線防護服や線量計を輸送してくれる。後方からの支援に隊員一同大いに意を強くし、士気が衰えることはなかった。

3月17日夕刻、最後に搬入されたご遺体は福島県の殉職警察官だった。海岸沿いで勤務中に津波に襲われたとのこと。館内の全員が見守る中、福島県警が検視を行い、終了後全員で黙禱もくたうを行った。検視後安置されたご遺体の周りを、同僚の警察官が囲み涙を流していた。警察官も被災者なんだと実感した。

この他にも親族が行方不明であったり、実家が津波で壊された警察官も少なからずいるとのこと。しかしこれらの警察官も自己のことを顧みず、黙々と震災の対応に従事していると話してくれた警察官の目には涙がにじんでいた。その心痛を察するとともに、職務に対する使命感に頭が下がる思いがした。

こうして3月18日、7日間の勤務を終え任務交替となった。現地で第二次派遣の長野県部隊と引き継ぎ後、福島県警刑事部長、鑑識課長、福島県警の皆さんに見送られて帰県した。

(平成23年6月)

ウルトラ警察隊

東京より愛をこめて

総合運用指令課 (※執筆時)

(警視庁から出向)

加藤 雅道 20歳代

中央線荻窪駅から電車に乗車し、いつものように帰宅の途につきました。車内の液晶画面には、数日前、東京電力福島第一原発が爆発した瞬間のニュース映像が流れていました。武蔵小金井駅で電車から降りた瞬間に見た夕焼け空は、今まで見た中で一番美しく見えました。

この美しい空のはるか先で、私の故郷が世界を震撼させる原発事故によって、かつてない試練の中にあるとは到底思えませんでした。

▼東京にて

平成23年3月11日、私は警視庁荻窪警察署の捜査本部で勤務していました。午後2



ウルトラ警察隊の入隊式＝平成24年2月6日、福島市

時46分、同僚と車で霞が関の警視庁本部に向かう途中、非常に大きな揺れに襲われました。

上下左右に煽あおられる車、波打つ送電線、泣き叫ぶ女子生徒……。異様な状況はそれまで経験したことがありませんでした。

揺れが収まり「この地震はかなりやばいな、東海地震が来たか」と思いましたが、携帯電話のワンセグで見た被災地の惨状は私の想像をさらに上回るものでした。

「仙台・若林地区で2000～3000人の遺体」のニュース速報、高架上に迫り来る津波の映像。私の携帯電話の



ウルトラ警察隊による捜索＝平成24年3月8日、浪江町

ワンセグ画面には次々に信じられないニュースが流れていました。

私の故郷を舞台に。

震災発生後、警視庁のみならず、全国の警察、消防、自衛隊、その他さまざまな支援部隊が被災地に入っていました。私は震災対策の業務には回らず、そのまま捜査本部での勤務に従事していました。

「震災対策だけが警察の業務じゃない、通常の業務も大切な仕事だ」と自らに言い聞かせながら仕事に就いてました。しかし、福島県警察や福島市職員として働いている同級生が放射能の恐怖の中で、福島に踏みとどまって戦っていることを思う度に「自分の故郷が千年に一度の災害に襲われているのに、俺は何をしているんだ。全国の人間が被災地に

入っているのに、俺は警察官なのに、なんで自分の故郷も守ることができないんだ」という気持ちで常に心の奥にありました。

▼被災地にて

5月に入り、私は警視庁部隊の受援業務の任に就くため宮城県に入りました。

震災発生から2カ月の時間がたっており、がれきの処理が議論され始めたころでしたが、初めて目の当たりにする被災地は見渡す限りがれき・残骸の山が残っていました。

まだ震災は終わっていませんでした。

そのころ、連日、芸能人がCMで被災地にさまざまなメッセージを伝えていましたが、被災地を巡る度「この人たちに対して『頑張れ』や『一人じゃない』などのメッセージは送れない。軽々しく『復興』なんて言葉は使えない」「もし、自分の故郷がこんな状況におかれていたら、希望なんて持てないのではないか」というような思いが募っていきました。

捜査車両でがれきの山と化した海沿いの町を走っていると、道路沿いで遊んでいる2人の子どもが見えました。



仮設住宅を訪れるウルトラ警察
隊＝平成24年3月30日、福島市

その脇を通り過ぎる時、赤色灯をつけて走る私の車に気づくと、2人の子どもは元
気な笑顔で拳手敬礼のポーズを私たちの車に向けてきてくれたのです。

その瞬間私は気づきました。

「悲惨な状況でも笑顔を浮かべている子どもがいる。この子たちが絶望すらしていな
いののに、自分たちが先に諦めてしまっただろうするんだ」と。

▼福島にて

半年後、志願していた福島県への出向が決まり、私は故郷である福島駅のホームに
降り立ちました。

現在私は、出向者を中心に組織された「福島県警察
特別警ら隊」に配属され、全国警察から集まった仲間
と共に、福島の平和を守るため活動しています。

私の勤務は部隊運営のための事務が主であり、外に
出て活動することはほとんどありません。しかし、東
京ですっと抱えていた故郷福島のために少しでも役立
ちたいという思いをようやく遂げることができ、非常

に充実した気持ちで勤務しています。

現在も、福島を取り巻く環境は厳しいですが、古里で震災復興のための勤務に従事することができるとも、恐怖と混乱の中にあつた震災直後の福島で戦い続けた人々がいたからだ、ということを私は決して忘れません。

そして、先のことになるかもしれませんが、美しい福島の姿・福島の人々の笑顔を取り戻せるように、決して諦めることなく、今の自分にできる仕事に励んでいきたいと思えます。

(平成24年8月)

あまみ
奄美から福島へ

総合運用指令課 (※執筆時)

(鹿児島県警から出向)

中崎 翔太 20歳代

私が福島県警への出向を希望したのは、震災当時、被災地に派遣された際に出会った女性の言葉がいつまでも記憶に残っていたからでした。

私は東日本大震災当時、鹿児島県警察の管区機動隊兼広域緊急援助隊として勤務し



平成24年2月6日、福島市
平式入営なぎみ注意

ていました。

震災発生から2日後、私たちの部隊は宮城県への災害派遣が決まり、被災地に向け出発しました。

当時は、被災地までの移動手段などを考える余裕もなく、陸路で移動したのですが、到着まで高速道路のサービスエリアでの休憩と車中泊を挟みながら3日かかりました。

移動だけで疲労がたまってしまうような道の日でしたが、立ち寄ったサービスエリアでは、私たちが被災地に向かっているのが分かるようで、一般の方々から数多くの激励や飲食物などの差し入れをいただき、元気づけられました。

その中でも、一番記憶に残ったのは、神戸市近郊のサービスエリアで休憩した際、私とほとんど年の変わらない女性が私に「私は子どものころに阪神・淡路大震災を経験しました。今、私が元気でいられるのもあの時の警察や自衛隊の救助や支援があったからです。今の私は、被災地の方々にも何もしてあげられないので、私の思いも込め



福島空港で行われた警察広報活動
動=平成24年4月14日～15日

て被災地の方々のために頑張ってください」と涙ながらに訴えかけてきたことでした。

警察に対する期待の大きさに気付くと同時に「この女性の分まで頑張る」という責任感が芽生えました。

管区機動隊に在職時、宮城県と福島県の被災地に2回出動しましたが、活動を通じて「もつと被災者の役に立ちたい」「警察官にしかできない活動をしたい」という気持ちが無言のまま湧いてきて、さらにあの時の女性が言った「私の思いも込めて被災地の方々のために頑張ってください」との声が後押しとなり、私は福島県警察への出向を希望しました。

福島県警察へ出向し、現在は警戒区域を含めた避難区域のパトロールや、仮設住宅への訪問などの任務に当たる特別警ら隊で勤務しています。

勤務を通じて出会う、避難を余儀なくされ苦しい生活を送っている方々は、私に

「これからの生活が不安で仕方がない。しかし、警察の方に話を聞いてもらえると気が楽になる」「我々が入れない被災地をパトロールしてもらい本当に感謝している」と話してくれます。

そして必ずと言っていいほど「遠くから福島のために来ていただいて、ありがとうございます」「鹿児島と比べたら寒いところですので、体に気をつけてくださいね」など、出向してきた私に対して、ねぎらいの声を掛けてくれます。

私は「被災されてつらいだろうに、私のことを気遣ってくれるなんて」と思いながらも、その声が糧となり、支えとなっています。

福島に来て被災者と話し、警察官としての原点を、今一度考えさせられました。

犯罪の検挙、交通事故の抑止も警察の大事な責務ですが、①被災者の話を親身になって聞くこと、②そのうえで被災者の期待に応える活動をすること―こそが警察官にしかできない仕事であり、被災者が一番望んでいることだと強く感じました。

実際、福島に来るまでは、知らない土地で気候も違うので不安もありましたが、福島県民と話し、その温かい人柄に触れることにより、今は不安もなく勤務しています。

（平成24年8月）

第6章

寄せられた声

写真展のアンケートから

大震災、原発事故に関して、福島県警察が撮影した写真や警察官の体験記。災害警備活動を後世に伝えるこれらの貴重な記録を広く公開するため、県内外で巡回写真展を開催した。この章は、会場を訪れた国民、県民がアンケートに記入した感想を元に、警察活動に寄せる人々の声をまとめた。



コラッセふくしま会場＝福島市



JR東京駅会場＝東京都

【50歳代・女性(東北地方在住)】写真や手記に悲しみ以上の感動がありました。ウルトラマンは本当にいないんだと思ひ知らされ、ヒーローは皆さんでした。ありがとうございます。

【10歳代・男性(東北地方在住)】警察官が地震が起きた当日から避難誘導などの活動をしていたのは知っていましたが、みんな、いろいろな思いを抱きながらも県民のために一生懸命尽くしていたことを詳しく知ることができ、とても勉強になりました。将来、自衛官か警察官になりたいので今日見た警察官のように将来、福島役に立ちたいと思いました。

【7～10歳・女性(東京都在住)】わたしはかなしかつたで

す。どうしてかというのと、おうちをなくしたひとたちとか、かぞくをなくしたひとたち。みんながんばってほしいです。がつこうでせんばづるをつくりました。みんながんばっていつてくださいね！

【30歳代・女性(東北地方在住)】どの写真も言葉を失うほどの迫力でした。絶え間なく続いてきた警察活動の大変さを思うと感謝の気持ちでいっぱいになります。特に原発周辺地域には被災者本人が入ることができないなか、こうして捜索活動が続けてきたことがよく分かりました。

【50歳代・男性(東北地方在住)】新聞社に勤務しているものです。駆け出し記者のころから、仕事だけでなく個人的につきあいをしていたただいた警察官も多く、その活動ぶりは知っているつもりでした。あの大震災以来、想像を絶する状況の中での捜索活動、その後の支援活動は今までにはない過酷なものです。松本本部長(当時)を先頭に一糸乱れぬ職務の遂行に感動しています。

【60歳代・男性(会津地方在住)】平和な時は、あ

まり警察活動のありがたみを感じられないが、大災害や大事件が起きると警察が最後の頼みとなる。これからも県民のために頑張ってください。

【10歳代・男性(県北地方在住)】あらためて震災の写真を見て胸が痛くなりました。私たちがこれから何をすべきなのか、もう一度考え福島復興に向けて頑張らなくてはいけないと感じました。警察官が最後まで諦めずに行方不明者を捜している姿に感動しました。

【40歳代・男性(相馬市在住)】たまにスピード違反で捕まったりして、「何だよ警察！こんな所で!!」と思ったりした時もありました。写真展を見て防護服を着て捜索する姿を見て、そんなふうに思ってますみません。大変な中ありがとうございます、ありがとうございます。手記も読みましたが、とうとう涙をこらえられませんでした。

【50歳代・男性(県南地方在住)】大変な状況の中で県民の生命、財産を守るため昼夜を分かたず活動していた方々に感謝します。他県から応援に来た警察官からも福島への思いが伝わり、感

謝の言葉を述べたいです。

【10歳代・男性(喜多方市在住)】大震災が起きた後に、全国の警察官がこの福島に来て救助活動をしていたことはとても驚きでした。僕たちの知らないところで昼夜活動していたことは、本当に素晴らしく、感謝の気持ちでいっぱいです。

【20歳代・女性(兵庫県在住)】まずは、被災地の写真をあらためて見て、本当にいたたまれない気持ちになりました。それから一つ一つの写真に笑顔があつたりするのを見ると、人を笑顔にできる警察官に心からの尊敬の気持ちがあふれてきました。私たちの一番身近な警察がこんなにも被災地で活動しているとは知らなかった。警察官をさらに身近に感じられたとともに、一国民として自分も守られているということを知ることができました。

【40歳代・男性(郡山市在住)】東日本大震災以前は、警察に対してあまり良い感情を持っていなかったのですが、連日にわたる警察、消防、自衛隊、行政各方面の皆さまの苦労には、ただただ涙が出てくる次第です。我が家も半壊の認定

をされましたが、生活ができていたのでまだまだ幸せです。その幸せを支えるために、多くの方が黙々と職務に励んでくださっていることを忘れずに、これからも生きていきます。警察は悪人を懲らしめること以上に、地域に生きる人々の「思い」を大切にする職業なのだということがよく分かりました。

【10歳代・女性(相馬市在住)】 今日、写真展を見ることができ、とても良かったです。とても感動して涙が出てしまいました。いろいろな所から来てくれた警察官も、とても大変なのに、私たちの笑顔を取り戻すため作業していただき感謝しています。

【20歳代・女性(鹿児島県在住)】 衝撃を受けたというのが一番の感想です。手記を読みながら、体に鳥肌が立ち、涙があふれました。私は震災時に鹿児島におり、当時の状況、現在の状況のいずれもニュースや写真でしか見たことがありません。今日、手記を読んで自らの幸せと当時の被災地での出来事、被災者がどのような思いで過ごしているのか、さまざまなことに気付かされました。

【40歳代・女性(東北地方在住)】 知人が浪江町請戸の住民です。震災の日、お巡りさんがパトカーで津波が来ると知らせてくれたから自分は逃げられたと言っていました。逃げ出した直後、請戸の空が一瞬真っ暗になったと言っていました。それが津波だったのです。

【60歳代・男性(東京都在住)】 警察官の生死を分けた支援活動、現場活動を見て頭の下がる思いです。警察、消防、自衛隊は国の財産です。その中でも警察官の仕事は聖職です。

【10歳代・女性(神奈川県在住)】 震災のこと、警察や救助隊のことなど、さして興味や関心がありませんでした。しかし、この写真展を見て、自分はなんてばかなのだろうかと感じました。被災者も警察官も必死になって頑張っていて、手記を読んだとき、警察官であることの責任や遺族とのやりとり、涙があふれ出ました。写真では、ボートから身を乗り出し、海水に顔をつけて捜していたり、がれきの上でフードやゴーグルを外し、犠牲者に祈る姿に感動しました。

【20歳代・女性(神奈川県在住)】 この写真展を見



コラッセふくしま会場＝福島市

て、被災者が警察官に精神的にも支えられていたのだなと思いました。つらい状況の中でも被災者が見せる笑顔はその人たちのために毎日懸命に働く人がいたからだと思いました。また、警察関係者の家族の心の強さにも感銘を受けました。あのような緊急事態の際に、一家の大黒柱と一緒にいることができないということは、想像を絶する不安であつただろうと思いまし

た。

【30歳代・女性（南相馬市在住）】他県から多くの警察官が駆けつけてくださったことに感謝を感じます。震災後、いろいろな県の警察車両とすれ違ってきました。その度

に、遠方から来られている皆さまを家族は心配しているのではないかと、放射線で騒がれている福島県には来たくないのではと思っていました。本当にありがとうございます。

【50歳代・男性（相双地方在住）】私の家族があの日、新地駅に止まって被災した列車に乗っており、その際居合わせた警察官に助けていただきました。本当にありがとうございます。

【50歳代・女性（会津地方在住）】報道では分からない警察官の家族のことが印象に残りました。本人はもとより、家族も行動は別々で一緒にいられない。一緒にいて助けてもらいたい気持ちで心の中にしまい、それぞれが別々の形で乗り越えられたということが伝わってきました。

【10歳代・女性（東京都在住）】自分にできることは、いつも通りの生活を送ることではないのだろうかと思い、最近ではテレビで震災の報道を見ることを自分から避けるようになっていました。そんな中、「被災地」「被災者」の様子ではなく「警察官」の様子が分かるという紹介を聞き、この写真展を見に来ました。もちろん背景に映っている写真に心が痛みましたが、懸命に



会津若松市文化センター会場＝会津若松市

復旧作業を行う警察官の姿を見て、前に進んでいるという感じがして、被災地にはただ悲しみしかないわけではないことが伝わってきました。そして、私は今、高校生なのでなかなか時間がありませんが、大学生になったらぜひ私も復興作業の手伝いをしたいと思います。この写真展に来て、被災地の方や警察官の前向きな気持ちを感じられ、本来は私たちが元気を与えるべき側なのに、たくさん元気をもらいました。

【20歳代・女性（東京都在住）】
 帰宅中、たまたま通路を通って写真展の存在を知りました。写真を見ていただけの段階では「テレビで見たことある」

という程度で、その鮮明な現実をただぼんやりと眺めるだけでした。しかし、手記を読み始め、実際に警察官、その家族の生の言葉に触れているうちに、涙が止まらなくなりました。東日本大震災の残したモノはあまりにも大きく、心に深く傷を残すものです。テレビでは「職務を全うする警察官の姿」がヒーローとして映し出されたりしていますが、ここで「主役」として映し出される警察官は、私たちと同じ感情を持った「人間」でした。家族を思い、ご遺体に対して慈しみ、それでも自らの正義感のもと仕事に向かう等身大の存在でした。警察官のこのような仕事、今なお続く被災者の苦しみをぜひもっと多くの国民に知ってほしいです。

【30歳代・女性（神奈川県在住）】忘れてはいけな
 いことだと思いました。私の2歳の娘は心臓の手術を予定しています。不安でめっちゃコワイけど、命をかけて頑張られている警察官の写真で勇気をもらいました。

【40歳代・女性（県北地方在住）】浪江町から福島市に避難しています。今回の津波で大変多くの友人、知人を亡くしました。正直、ご遺体がこれ

ほどの数が見つかると思いませんでした。本当に草の根を分けて捜し出してくださり、ありがとうございます。

【50歳代・男性(県北地方在住)】他県の人の多くは放射能について誤った認識を持ったまま、いまだ県民は報われない。そんななか警察と自衛隊には本当に感謝している、逃げずに黙々と放射能と戦い、いや臆することなく復興に力を注いでくれている。

【10歳代・男性(県北地方在住)】学校にいて何もできないときにも警察官は、津波で亡くなった人や行方不明の人を一生懸命捜して24時間頑張って諦めないで黙々と、復興を願って作業をしている。写真を見て諦めた写真が一枚もなかった。

【20歳代・女性(県北地方在住)】ご遺体の衣類を洗っている写真を見て、とても胸を打たれました。今すぐにやらなければならぬ仕事如山積みの中であつただろうにもかかわらず、亡くなった人にも家族にも届く優しさであつたと思います。

【50歳代・男性(東京都在住)】自衛隊の活動はテ

レビなどで特集されていたのでよく知っていたが、警察官の報道はあまり取り上げられていないように感じていた。本日このような展示を見て、主として活動していたことがよく見聞できました。

【70歳代・男性(県北地方在住)】自然災害はいつかは必ずやってくるが、原発事故だけは絶対許せない。今後生きているなかで誰もが絶対安心はないと言うことを肝に銘じたい。警察官たちの貴い犠牲に深く哀悼の意を表したい。

【7～10歳・男性(県北地方在住)】お巡りさん頑張ってください。

【30歳代・男性(神奈川県在住)】警察官の使命感、言葉では表現できません。テレビでは知ることのできない現実を見させてもらいました。また、全国の警察官がこんなにも来て助けていたことも知りませんでした。私は地震発生時、日本にいませんでした。海外勤務でテレビで知ることとなりました。風化させないためにもこのようなイベントを続けてください。

【40歳代・女性(千葉県在住)】警察官の関わった嫌なニュースを聞くことが多い今日ですが、写



道の駅「そうま」体験実習館会場＝相馬市

うございました。本当に本当に想像を超える状況が映し出され、ただ言葉を失うばかりでした。1年半が過ぎ、人々があの日を忘れそうになり始めているこの東京で、この写真展を見させてもらうことになりましたが、今日のこの感情を思うと、3・11から実際に活動をし続けてくださっている警察官の気持ちはいかほどだっ

真や手記を見て、素晴らしい警察官がこんなにも多くいて、今の日本を支えてくださっていることに深く感動しました。

【40歳代・女性（東京都在住）】このような写真展を開いてくださり、ありがと

たのでしよう。やはり忘れてはいけませんよね。まだまだ続く皆さんの捜索、これからの対応等々、頭が下がる思いでいっぱいです。

【60歳代・女性（会津地方在住）】我々を必死で助けてくださる警察官にありがたいと思いました。また、生々しい活動記録を読ませていただき、我々も何かしなければならぬという気持ち強く抱いた。風評被害に負けず、頑張っていきたい。

【7〜10歳・女性（東京都在住）】ひがいにあった所がとてみたいへんだということがわかりました。けいさつも、これからがんばってほしいと思うし、ひがいにあった人がとてもふあんで、苦しい生活をしていると、たいへんでたいへんで、今なにをしいいかわからなくなってしまうと思います。私たちもふつこうのために何かできることをしたいと思いました。

【30歳代・男性（東京都在住）】今回の写真展で、震災直後の県内各所の写真を拝見し、被害の大きさをあらためて感じるとともに、復興の最前線で作業に当たられた警察、消防等の関係者が被災者に寄り添って尽力されている姿に、心を

動かされました。自分の住んでいた家や町を津波が一瞬のうちに失い、また家族や友人、知人を亡くされ、途方に暮れていた住民も数多くいたと思いますが、そんな中でも警察の関係者が明るく励まされている様子が写真の数々から伝わってきました。

【70歳代・女性(県北地方在住)】県警察の命がけの活動に、ただただ感銘し感謝しています。特に県警本部長自ら立入禁止区域に入っでの捜索活動の指揮には頭が下がります。

【60歳代・女性(相双地方在住)】私は一人息子を津波で亡くしました。震災発生後10日目、家族で遺体を見つけました。警察官に遺体を収容していただき、きれいにきれいに洗い流していただき、本当にありがとうございます。生涯忘れないと思います。お世話になったこと…そして息子の顔に触った時の冷たさを…。

【50歳代・女性(東京都在住)】警察官とはいえ、一人の人間、ある人は親であり、ある人は子であり。職務とはいえ、こういう極限状況の活動においては、素の、人間としての心のありようが出る。それは自然なことだと思う。むしろ、

人を守る立場になる人は人間的な慈悲の心を持つべきだと思うし、展示された写真や手記からはそれが本当に伝わってくる。手記で、ご遺体を発見する度に重い気持ちになったとありましたが、それはあなたが人間だったからです。放射線関係の職務を任された人の迷いももつとものだ。生の言葉は重く、心に響く。

【80歳代・男性(新地町在住)】今後永遠に残すべき大事な写真と思います。私たちの子孫に残す大切な宝だと思います。



南相馬市立中央図書館会場＝南相馬市

あとがきに代えて



警察庁長官官房人事課長

前福島県警察本部長 松本 光弘

アンサング・ヒーロー (unsung hero) という言葉があります。世の中から持て囃はされることなく黙々と活躍する、「陰の英雄」といった意味です。この本は、未曾有の地震と津波、そして原発事故に立ち向かったアンサング・ヒーロー／ヒロインたちの物語です。

福島の警察職員は、4人の同志を喪い、1人は行方不明というなかで、当初の避難誘導やご遺体捜索、治安維持活動などに全力で取り組んできています。マニュアルや訓練の想定をはるかに超える、日本警察として経験のない事態が続発するなか「逃げるわけにはいかない」警察職員は自らの危険を顧みず、また家族よりも職務を優先さ

せて、勇気を奮い起こしながら職責を果たしてきました。われわれ自身も福島県民として大きな悲しみと喪失感を共有しながら、人々を助け、守り、支えるために、それぞれの持ち場で頑張ってきたのです。

私は平成24年4月初めまで警察本部長として勤務いたしましたが、とりわけ発災以来の職員やご家族の気概と奮闘ぶりには、ただただ頭が下がります。ある殉職者のご葬儀で父上が「この非常時に息子が皆さんのお役に立てなくなってしまっても大変申し訳ない」と言われたのも、生涯忘れられません。組織としても、自衛隊にない地域密着性と消防にない全国展開力を併せ持った警察が、危機管理・災害対処の実力部隊としていかに優れているかを実感しました。

私たちの活動は、日々、さまざまな難題に直面しながらも、全国警察をはじめ各方面からのご支援、ご協力を頂き、職員一人一人の力を結集して、何とか前に進んできております。この経験を後世に伝えるため、福島県警察では大震災と原発事故への対応の記録を作りました。その一環として集められたのが、この本に収録されている手記です。本書を手にとって頂いた皆さんにも、陰の英雄たちの心意気に触れて頂ければ有り難いと考えています。

（平成24年11月）

ふくしまに生きる ふくしまを守る

平成24年11月30日発行
平成24年12月14日 初版第2刷発行
平成25年 1月31日 初版第3刷発行
平成25年 5月 1日 初版第4刷発行
平成26年 8月18日 二版発行

発行 **福島県警察互助会**

監修 **福島県警察本部**

編集協力・発売 **福島民報社**

〒 960-8602 福島県福島市太田町 13-17

☎ 024(531)4182 (事業局出版部)

印刷・製本 民報印刷

☎ 024(594)2170

※落丁・乱丁はお取り替えいたします。

警察署

〈浜通りにある警察署の規模〉(平成23年度当初)

A規模:概ね署員200人以上

B規模:概ね署員100人以上

C規模:概ね署員65人以上

D規模:概ね署員65人未満

なお、管内人口は平成22年10月1日現在の数値

